

琵琶湖博物館 年報

8号 平成15(2003)年度



LAKE BIWA MUSEUM
琵琶湖博物館

ごあいさつ

2003年度は、琵琶湖博物館の開設から8年目に当たります。

この年の主な行事としては、第11回企画展示として7～11月に開いた、『外来生物 つれてこられた生き物たち』を、先ず挙げる事が出来るでしょう。私たちのまわりには、さまざまな外来生物がいます。その中には、自然に分布しているものと間違ふほど近いものもあり、その一部はまさに「身になじんでいる」と言っても良いものかもしれません。しかしその一方では、日本列島の自然や景観に対してたいへん困った影響をもたらし、その駆除が大問題になっているものもあります。この企画展示は、琵琶湖博物館の開館の前から論議し、とくにここ数年にわたっていろいろに調査してきた「外来生物」について、皆さんに知りそして考えて貰い、いや、さらに広く、「人と生きものないし自然との望ましい関係のありかた」を、さまざまに考えて頂くとの思いを込めて、企画したものでした。幸いに多くの方々が積極的に参加して下さい、また、大きな話題になったようです。

これに関係させて、同じ題、ただし『—そのペット、あなたは飼い続けることができますか—』を副題に、水の中のものを中心に、生きたままの展示も行いました。

企画展示室ではその他にも、『のぞいてみよう、博物館の舞台裏』、『滋賀県環境学習フェア』、『楽石注意—石の愛し方・遊び方・楽しみ方—』、『滋賀の植物標本・写真展—村瀬忠義植物コレクション—』の、ギャラリー展示を開きました。これらの展示も企画展示と同様に、多くの人々の協力を得て行なったものであるのは、申すまでもありません。

いっぽう今年度は常設展示のうち、C展示室の「タンガニーカ湖」水槽をほぼ全面的に更新しました。これは、潜水調査に基づく魚の生態の調査研究の結果を、さらにいっそう強く反映するかたちにやり変えたものです。また、大津市の田上地区にある日本フィンランド学校や京都在住のフィンランド人の方々のご協力により、「デイスカバリールーム」の中に、「フィンランドの子どもたち」を新しく作成しました。

さらに、地域の学校や公民館と琵琶湖博物館との連携事業として、『伯母川探検隊～地域の人とつくる伯母川博物館』を試みてみました。これは、いろいろの方々から評価して頂きながら、今後さらに進めていきたいものと考えております。

国際交流活動についても、さまざまなことを進めてきています。中でも、1998年にパリにある「フランス国立自然史博物館」と交わしました「相互協力に関する覚書」を更新し、これによって今後5年間にわたって、両館の協力をいっそう進めていくことが決まり、大きい具体的な計画も現在進んでいるところです。

「はしかけ」や「フィールドレポーター」制度などを含め、多くの方々が琵琶湖博物館を「作る」働きをして下さっています。来館者の総数も、2003年11月には延べ450万人になりましたし、繰り返し来て下さる方もさらに多くなっています。また、博物館に滞在しておられる時間も、少しずつ延びてきているようです。「満足して」下さる博物館、さらには、お帰りのときには何か「向上した」気分になって下さるような博物館、何度も来て頂くたびにそれがさらに増えていって頂けるような博物館を、皆さまとともにさらに作り上げるように、努力していきたいと存じております。

2003年度における多様な活動を、この小冊子に取りまとめました。建設的なきびしいご批判を賜りますとともに、ともに新しく作り上げる事について、さらなるご助力を頂きますよう、お願い申し上げます。

2004年6月30日

滋賀県立琵琶湖博物館
館長 川那部 浩哉

目 次

ごあいさつ	1
I 博物館活動の概要	4
1 研究調査活動	4
(1) 文部科学省科学研究費申請機関への登録	4
(2) 総合研究	4
(3) 共同研究	4
(4) 専門研究	5
(5) 公表された主な研究業績	6
(6) 研究助成を受けた研究	7
(7) 第6回 琵琶湖博物館研究発表会	8
(8) 研究最前線	8
(9) 特別研究セミナー	9
(10) 研究セミナー	9
(11) 特別研究員の受け入れ	10
(12) 海外交流活動	11
2 交流・サービス活動	13
1. 利用者主体の事業	13
(1) フィールドレポーター	13
(2) 「はしかけ」制度の実施状況	14
2. 一般利用者へのサービス事業	17
(1) 観察会・見学会等	17
(2) 博物館講座	18
(3) 田んぼ体験教室	21
(4) 里山体験教室	21
(5) 地域交流活動支援事業	22
(6) 質問コーナー・フロアトーク	27
3. 学校連携事業および体験学習	28
(1) 教職員研修および視察	28
(2) 学校団体向け体験学習	30
(3) 一般団体向け体験学習	30
(4) 「体験学習の日」の活動	31
(5) 科学技術振興機構委嘱事業 平成15年度地域科学館連携支援事業	32
4. 展示交流事業	32
(1) 水族展示の交流	33
(2) 展示交流員と話そう	33
5. 博物館実習	35
6. 来館者との交流会	36
3 情報活動	38
(1) 館内の情報センター(図書室・情報利用室)	38
(2) 通信網を利用した館外サービス	38
(3) 電子交流システム(LBM NET)	40
(4) 情報システムの更新	40

(5) 収蔵品データベースの整備および公開	40
(6) 画像情報システムの整備	41
(7) 映像資料の貸出	41
(8) 資料整備	46
4 資料整備活動	48
(1) 収蔵資料	48
(2) 新規収集資料	54
(3) 資料の利用	62
(4) 燻蒸	64
(5) 資料有害虫類調査	65
(6) 資料評価委員	65
5 展示活動	66
(1) 常設展示の主な更新	66
(2) 第11回企画展示「外来生物 つれてこられた生き物たち」	67
(3) 水族企画展示	71
(4) ギャラリー展示	72
(5) トピックス展示	75
(6) 展示関連事業	75
6 国際交流活動	76
(1) フランス国立自然史博物館との相互協力に関する覚書の更新	76
(2) 海外研修員の受け入れ	76
(3) 海外からの視察	76
7 印刷物	79
II 利用状況	80
1 2003年度入館者数	80
(1) 総入館者数	80
(2) 学校等入館者数	81
(3) 月別・曜日別入館者数	82
2 来館者アンケート調査結果	83
3 新聞掲載記録	87
4 雑誌等掲載記録	92
5 テレビ放映・ラジオ放送記録	95
III 組織および運営	97
1 組織	97
2 職員	98
3 予算	103
4 滋賀県立琵琶湖博物館協議会	104
IV 博物館利用のご案内	105
平成16年度 職員紹介	108

*表紙の写真：企画展示「外来生物 つれてこられた生き物たち」の展示風景

I 博物館活動の概要

1 研究・調査活動

琵琶湖博物館の事業は、研究事業、交流サービス事業、情報事業、資料整備事業、展示事業という五つを総合的に行い、特にその中でも研究活動が全ての博物館活動の基礎となる。すなわち、研究の成果の発信として、交流、情報、資料、展示が行なわれ研究の成果とその発信が魅力的であればあるほど、博物館の他の事業も魅力的なものとなる。

特に琵琶湖博物館の研究事業では、「生命文化複合体」としての琵琶湖の「価値」を明らかにすることを目標に、学際的な総合研究やテーマをしぼった共同研究、ならびに個々の学芸員の資質を高める専門研究に取り組んできた。総合研究と共同研究については、研究審査委員会に対して研究計画書を提出し、その審査を受けて2003年度は、以下の研究課題が審査を通過して実施された。なお、専門研究については、申請金額の多い研究については申請専門研究として、同じく研究審査会での審査を受けた。

(1) 文部科学省科学研究費申請機関への登録

2002年度から文部科学省の科学研究費申請機関に登録が認められることになり、2000年度は学芸職員2件（継続）、特別研究員2件に対して補助金が交付された。

(2) 総合研究

琵琶湖博物館の設立理念を実現することに直接結びつく研究として、総合研究を行った。総合研究のテーマは次の3件であった。

- ・東アジアの中の琵琶湖 -コイ科魚類を展開の軸とした- 環境史に関する研究
(代表者 中島 経夫)
- ・琵琶湖沿岸帯の生物群集における生物間相互作用に関する研究 (代表者 Andrew Rossiter)
- ・博物館資料の収集・整理・保管と利用に関する研究 -博物館資料の利活用の理論化-
(代表者 八尋 克郎)

(3) 共同研究

琵琶湖博物館のテーマにしたがった研究として共同研究を以下のテーマで行った。

- ・博物館展示における「ハンズ・オン」の効果とその意義 (代表 芦谷美奈子)
- ・滋賀県内の魚類分布調査および琵琶湖博物館収蔵魚類標本の充実 (代表 長田 智生)
- ・琵琶湖とその集水域における水生動物の寄生虫相に関する研究 (代表 Mark J. Grygier)
- ・琵琶湖堆積盆地の後期鮮新世約250万年前前後の古環境変化と古植生変化 (代表 百原 新)
- ・たんぼにおける大型鰓脚類 (ハウネンエビ・カプトエビ・カイエビ類) に関する研究
(代表 Mark J. Grygier)

- ・島の動物相の成立過程-古琵琶湖時代の動物相の特殊性解明にむけて- (代表 高橋 啓一)
- ・「カワウ問題」解決に向けての生態学的アプローチ (代表 亀田佳代子)
- ・南湖の富栄養化過程に沈水植物が及ぼす影響の解明 (代表 芳賀 裕樹)
- ・琵琶湖水系に生息するイワナの地理的分布とその形成過程 (代表 桑原 雅之)
- ・東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究 (代表 榎 永一宏)
- ・外国産シジミ類に関する研究 (代表 松田 征也)
- ・珪藻電子図鑑の増補改良 (代表 大塚 泰介)
- ・ヘラブナの放流に伴う琵琶湖在来のフナ集団への遺伝的影響 (代表 大原 健一)
- ・水辺エコトーン創生のための在来魚復活・外来魚排除に関する研究 (代表 前畑 政善)
- ・滋賀県の蝶類分布および生態に関する研究 (代表 八尋 克郎)

(4) 専門研究

各学芸職員が、自らの専門分野の研究をおこなった。専門研究は、特別な経費を要求した申請専門研究と通常の間費で研究をしたものとに区別している。

<申請専門研究>

- ・房総半島の鮮新統三浦層群を主軸とした、本州中央部の鮮新統に挟在する火山灰の広域対比

(里口 保文)

- ・琵琶湖等における外来生物(とくにブラックバス問題)に関する研究(中井 克樹)
- ・植生と水質調節:一降雨流出時の水質変化の組成解析(草加 伸吾)
- ・近江盆地における遺跡の立地環境の解析(宮本 真二)

<専門研究>

環境史研究領域

- ・ナウマンゾウの臼歯の咬耗段階による変化(高橋 啓一)
- ・コイ科魚類の咽頭歯に関する研究(中島 経夫)
- ・近江の歴史の固有性と普遍性に関する考古学的研究(用田 政晴)
- ・琵琶湖歴史環境の世界史的評価に関する研究(牧野 久実)
- ・新生代の大型植物化石の研究(山川千代美)
- ・中世琵琶湖の環境史(橋本 道範)
- ・双翅目アシナガバエ科昆虫の系統分類と生物地理(榎 永一宏)

生態系研究領域

- ・陸亀における生物地理学、進化、生態(Andrew Rossiter)
- ・水域-陸域間の相互作用における鳥類の役割に関する研究(亀田佳代子)
- ・住民参加によるピオトープづくりの課題と可能性(杉谷 博隆)
- ・日本産ナマズ類の繁殖生態(前畑 政善)
- ・甲殻類の系統分類学および海洋無脊椎動物の寄生虫に関する研究(Mark J. Grygier)
- ・多自然型川づくりの評価手法に関する研究(野崎 信宏)

- 水産生物における遺伝的多様性の管理に関する研究（井戸本純一）
- 樹木の健全性の診断に関する研究（長崎泰則）
- 織毛虫の形態と餌捕獲効率について（楠岡 泰）
- 河川改修後の貝類相復元に関する研究（松田 征也）
- 琵琶湖水系におけるビワマスとアマゴの関係（桑原雅之）
- 歴史的環境保全における地域社会の意思決定（牧野厚史）
- 貝曳きによる沈水植物除去に関する実験（芳賀裕樹）
- 琵琶湖水系における伝統的資源利用とその変化（中藤容子）
- 琵琶湖及び内湖湖岸における水辺利用に関する研究（矢野晋吾）
- 付着珪藻の群集構造に影響を及ぼす環境要因の実験的検証（大塚泰介）

博物館学研究領域

- 博物館評価のありかたについて（布谷知夫）
- オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究（八尋克郎）
- 淡水魚類の音響行動について（秋山廣光）
- 博物館事業における水理学分野の位置付けに関する研究（戸田 孝）
- イバラモのシュート群動態と雌雄異株性に関する研究（芦谷美奈子）
- 身近な自然を利用した環境学習についての考察（西垣 亨）
- 博物館における体験学習を通して、学校とのよりよい連携の在り方をさぐる（谷口雅之）

琵琶湖博物館総合研究・共同研究審査委員会 委員

氏 名	現 職
秋 道 智 彌	総合地球環境学研究所 教授
鳥 越 皓 之	筑波大学社会科学系 教授
原 田 英 司	京都大学名誉教授
横 山 俊 夫	京都大学大学院地球環境学堂 三才学林長 人文科学研究所 教授
鷺 谷 いづみ	東京大学大学院農学生命科学研究科 教授
佐々木 亨	北海道大学大学院文学研究科 助教授
三田村 緒佐武	滋賀県立大学環境科学部 教授
吉 村 輝 夫	滋賀県総合教育センター 副主幹
川那部 浩 哉	滋賀県立琵琶湖博物館 館長
重 野 良 寛	滋賀県立琵琶湖博物館 副館長

(5) 公表された主な研究業績

研究業績については、「琵琶湖博物館業績目録」8号に収録した。

(6) 研究助成を受けた研究

中島 経夫

- ・奈良県田原本町教育委員会「奈良県田原本町唐古・鍵遺跡共同研究」共同研究者

嘉田由紀子

- ・地球環境研究総合推進費「景観の変化から探る世界の水辺景観の長期的トレンドに関する環境社会学的研究」研究代表者
- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B1）「環境保全における地域システムの役割ーコモンズ論・公共性論・生活環境主義の再検討を通してー」研究代表者
- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B1）「人類学的視点から見る環境保全」研究分担者
- ・滋賀県湖西地域振興局 湖西の魅せ方フィールドワーク委託事業 研究代表者
- ・河川環境管理財団助成事業 世界子ども水フォーラムフォローアップ事業 共同研究者
- ・地球環境基金助成事業 子どもと川のかかわりの再生 研究代表者
- ・近畿地方整備局委託事業 三世代交流型河川調査 共同研究者

牧野 久実

- ・文部科学省科学研究費補助金（基礎研究A）「イスラエル国ガリラヤ湖周辺の宗教文化についての総合研究」（代表者 月本昭男）研究分担者

芳賀 裕樹

- ・河川環境管理財団助成「魚類探知機による沈水植物の分布・現存量のモニタリング手法の開発」研究代表者

芦谷美奈子

- ・河川環境管理財団助成「魚類探知機による沈水植物の分布・現存量のモニタリング手法の開発」研究分担者

大塚 泰介

- ・河川環境管理財団助成「魚類探知機による沈水植物の分布・現存量のモニタリング手法の開発」研究分担者

榎 永一宏

- ・文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）「大洋島における海洋性アシナガバエの種分化と起源」研究代表者

矢野 晋吾

- ・文部科学省科学研究費補助金（若手研究B）「日本村落社会における労働の社会学的研究ー主観的労働観を通じた再検討と理論化」研究代表者
- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B1）「コモンズと公共性の環境社会学的研究」研究分担者

牧野 厚史

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤B1）「コモンズと公共性の環境社会学的研究」研究分担者

Mark J. Grygier

- ・Carlsberg Foundation (Denmark) 「Biologi og morfologi af 'Y' larver: Et 100 år gammelt

(7) 第6回 琵琶湖博物館研究発表会

2003年度は、連続講座と共通したテーマ「水辺移行帯…生き物と人びとの暮らし」で、生態学研究領域の学芸員を中心に行った。参加者は、145人であった。

日 時：2003年11月30日(日)

会 場：ホール

テーマ：水辺移行帯…生き物と人びとの暮らし

スケジュール

1：30 受付開始

1：30 開会の挨拶・趣旨説明 布谷 知 夫（琵琶湖博物館研究部長）

1：35 魚はなぜ田んぼに侵入するのか？ 前 畑 政 善（琵琶湖博物館総括学芸員）

2：10 村の領域における水辺 牧 野 厚 史（琵琶湖博物館主任学芸員）

2：45 休 憩

3：00 水田藻類の農業との関わり 藤 田 裕 子（京都大学基礎物理学研究所）

大塚 泰 介（琵琶湖博物館学芸員）

3：35 田んぼで生活する甲殻類 Mark J. Grygier（琵琶湖博物館専門学芸員）

4：10 水辺移行帯のゆくえ、人々の暮らし 川那部浩哉（琵琶湖博物館館長）

4：45 閉 会

(8) 研究最前線

琵琶湖博物館の研究内容を広く公開するために、2001年度から連続講座を行っている。2003年度は生態学研究領域の学芸職員が研究発表会と同様のテーマに関連した講演を行った。募集人数は60名であったが、事前の参加申込みは87名あり、毎回35～57名の参加があった。

テーマ：「水辺移行帯—その自然・暮らし、政策—」

2003年12月～2004年3月までの毎日曜日、午後2時～4時

第1回 12月7日 草加 伸 吾 「おいしい水をはぐくむ森林—琵琶湖とのかかわり—」

第2回 12月14日 長崎 泰 則・田上 知（滋賀県林務緑政課）「森と人びとの暮らし」

第3回 12月21日 芳賀 裕 樹 「琵琶湖・南湖の水草はどうなったか？」

第4回 1月11日 井戸本純一・藤原 公一（滋賀県水産試験場）・上野 世 司（滋賀県水産試験場）
「魚と水辺移行帯—琵琶湖漁業の過去・現在・未来—」

第5回 1月18日 中 藤 容 子 「琵琶湖の伝統漁法とその意義の変化」

第6回 1月25日 西川與史雄（くろだ村づくり委員会）・川寄太久馬（滋賀県湖北地域振興局）・
松田 征 也「木之本町黒田における圃場整備と希少貝類保全への取り組みについて」

第7回 2月8日 楠岡 泰 「生き物の高層マンション、ヨシの茎」

第8回 2月15日 野崎 信 宏・橋本重一（滋賀県河港課）「水との闘いと共存」

- 第9回 2月22日 泉 峰一 (滋賀県農村整備課)・杉谷博隆
「みずすまし構想から魚のゆりかご水田プロジェクトへ」
- 第10回 2月29日 中井克樹 「生き物でにぎわう湖の沿岸帯を調べる」
- 第11回 3月7日 亀田佳代子 「カワウと人の過去・現在・未来ーカワウが運んだものの行方ー」

(9) 特別研究セミナー

- 第37回 5月14日 セドリック・クレミエール(Cédric Crémère) (パリ国立自然史博物館比較形態学研究科)「自然をどう展示する：フランスにおける18世紀から現在までの自然史博物館」

(10) 研究セミナー

毎月第3金曜日に、内部での研究セミナーを開催しているが、2003年度は5月から開催した。

第1回 (5月16日)

- 芦谷美奈子 「ハンズオン手法と『よい展示』との関係」
芳賀裕樹 「南湖沈水植物の現存量とそのインパクト」
戸田孝 「博物館情報および学術情報の最近の動向」

第2回 (6月20日)

- 矢野晋吾 「沿岸域における環境保全活動の新たな枠組み」
高橋啓一 「東西から南北へー日本の哺乳動物相形成概念の転換ー」
楠岡泰 「『ザ・自然史博物館』とよばれる博物館の歴史の重み」

第3回 (7月18日)

- 中島経夫 「咽頭菌の研究ー生物学と古生物の間からー」
草加伸吾 「森林伐採実験流域における水質形成」
前畑政善 「ナマズの繁殖生態」

第4回 (8月15日)

- 八尋克郎 「共同研究『滋賀県のオサムシの分布』の成果と今後の展望」
里口保文 「古琵琶湖層群下部の広域火山灰とその年代」
用田政晴 「琵琶湖周辺における中世山岳寺院の特質」

第5回 (9月19日)

- 宮本真二 「『環境史』とは何か？ーフィールド科学としての地理学からの応答：レビュー」
布谷知夫 「日本における『地域博物館』という考え方」
榊永一宏 「ハワイ諸島における海洋性アシナガバエの分布と系統」

第6回 (10月17日)

- 亀田佳代子 「カワウによる森林への養分供給とその影響」
牧野久実 「丸子船の横断面が語ること」
牧野厚史 「漁業占有利用権の行方」

第7回 (11月14日)

嘉田由紀子 「水辺環境変遷を今昔写真でたどるー比較環境社会学的調査手法の提案としてー」

松田 征也 「水草の刈り取りが貝類に与える影響」

中井 克樹 「外来生物をめぐる問題と課題：企画展示を担当しながら考えたこと」

第8回 (12月19日)

山川千代美 「滋賀県水口町幸が平の古琵琶湖層群産球果化石群」

野崎 信宏 「多自然型川づくり」の定量的評価手法の検討」

桑原 雅之 「琵琶湖水系におけるイワナの分布」

第9回 (1月16日)

井戸本純一 「堅田内湖で外来魚は在来魚と共存しているか」

大塚 泰介 「Web版珪藻図鑑の検索システムについて」

杉谷 博隆 「マザーレイク21計画の理念から見た住民参加型ビオトープづくりの課題と可能性
PART 2 (マキノ町海津地先における事例から)」

第10回 (2月20日)

Mark J. Grygier 「Y幼生(Facetotecta; 甲殻類彫甲下綱)の紹介および様々な寄生虫甲殻類の
生活史の比較」

長崎 泰則 「樹木の健全性とその簡易診断法の検討」

西垣 亨 「生き物を出発点とした環境学習Ⅱーフィールドにおける博物館の良さを生かした
環境学習プログラムの開発ー」

第11回 (3月19日)

秋山 廣光 「琵琶湖博物館水族展示水槽で発見された淡水性ゴカイの紹介」

中藤 容子 「博物館における民具の復元・再現・体験ー琵琶湖博物館はしかけ事業との関わりー」

谷口 雅之 「琵琶湖博物館と学校とのよりよい連携の在り方をさぐる」

(11) 特別研究員の受け入れ

- ・高橋 鉄美 (日本学術振興会科学技術特別研究員・日本学術振興会特別研究員)

2003年4月1日～2004年3月31日

テーマ：アフリカ東部の古代湖におけるカワスズメ科魚類の系統進化および尾鰭骨格を用いた琵琶湖産魚類の比較解剖学的研究

- ・大原 健一 (日本学術振興会特別研究員)

2003年4月1日～2004年3月31日

テーマ：DNA多型を用いたギンブナの進化と多様化に関する研究およびヒナモロコの遺伝学的多様性に関する調査

- ・高橋 大輔 (京都大学大学院理学研究科)

2003年4月1日～2004年3月31日

テーマ：琵琶湖産ハゼ科魚類トウヨシノボリにおける性的二型形質の種内変異と底質環境との関連

性およびマイクロサテライトDNA解析による遺伝的流動の推定

- Cédric Crémère (申請機関: Institut National du Patrimoine

所属機関: Muséum National d'Histoire Naturelle)

2003年4月14日～2003年6月9日

テーマ: 日本の博物館運営と学芸活動について

- 辻 彰 洋 (国立科学博物館植物研究部)

2003年4月1日～2004年3月31日

テーマ: 微細藻類の展示手法の検討

- Dave Roberts (Department of Zoology, The Natural History Museum)

2003年9月25日～2003年9月29日

テーマ: 琵琶湖底泥中のDNA解析

- Jens Th. Høeg (Department of Zoomorphology, Zoological Institute, University of Copenhagen)

2003年10月24日～2003年10月31日

テーマ: 彫甲類のy-幼生の研究

- Charity N. N. Salasini (申請機関: JICA

所属機関: National Museums Board, Lusaka National Museum)

2003年11月11日～2003年11月29日

テーマ: 博物館のアウトリーチ活動と教育プログラムの比較研究

(12) 海外交流活動

1) 研究に関する国際交流

- 川那部浩哉

2003年7月20日～8月15日 ドイツ・フランス・ベルギー 博物館等における生物と文化の多様性に関する研究・普及に関する打合せ、企画展〈フェアブルさんの仕事と、その後100年間の発展(仮題)〉打合せ、陸水生物学シンポジウム-同編集会議への参加。

2004年1月14日～1月30日 フランス・エジプト 博物館等における生物と文化の多様性に関する研究・普及に関する打合せ、企画展〈フェアブルさんの仕事と、その後100年間の発展(仮題)〉打合せ、第28回IUBS総会及び生物科学:発展と社会に関する国際会議への参加

2004年3月21日～3月25日 東アジア

- 中島 経 夫

2003年10月5日～10月18日 中華人民共和国湖南省長沙市、岳陽市、湖北省武漢市(中国科学院水生生物研究所) 中国淡水漁撈調査および中国科学院水生生物研究所収蔵標本の調査

- 高橋 啓 一

2003年5月24日～6月2日 カナダユーコン州 第3回国際マンモス会議発表

2004年3月7日～3月16日 中華人民共和国北京市、天津市 総合研究に伴う古脊椎動物調査

• 用田 政晴

2003年7月21日～7月28日 トルコ・エジプト 博物館調査

• Mark J. Grygier

2003年12月6日～12月22日 デンマークコペンハーゲン 彫甲類y-幼生の調査研究

• 亀田佳代子

2003年8月3日～8月10日 カナダ 国際理論応用陸水学会水鳥ワーキンググループ大会出席

• 榎 永一宏

2003年6月10日～6月18日 韓国 共同研究に伴う東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究調査

2003年6月24日～7月25日 ポルトガル 科学研究費に伴うマディラ諸島とアソーレス諸島における海洋性アシナガバエの種分化と分散のため研究調査

• 草加 伸吾

2003年8月19日～9月1日 モンゴル フブスグル湖東南岸での山火事跡地再生状況調査

2) 事業に関する国際用務

• 中島 経夫

2004年1月14日～1月21日 フランス共和国、パリ市（国立自然史博物館）、セリニオン（アルムス）、アビニオン市。フェアブル展（仮称）に向けての調査

• 八尋 克郎

2004年1月14日～1月23日 フランス共和国、パリ市（国立自然史博物館）、セリニオン（アルムス）、アビニオン市。フェアブル展（仮称）に向けての調査

• 中井 克樹

2003年6月23日～6月28日 ライデン大学総合生物学科および国立自然史博物館・ナチュラリス（オランダ・ライデン市） 企画展示用のヴィクトリア湖産魚類標本と写真資料の借用

2004年2月22日～2月27日 ライデン大学総合生物学科および国立自然史博物館・ナチュラリス（オランダ・ライデン市） 企画展示用のヴィクトリア湖産魚類標本の返却と写真資料の将来利用に関する契約締結

2 交流・サービス活動

博物館の研究や資料収集などの成果をできるだけ多くの利用者に伝え、博物館をうまく有効に利用してもらうことで、博物館と利用者との双方向の情報交換と交流を行う場をつくりあげていくため、観察会や博物館入門セミナーあるいは学校教育との連携のための教育研修の受け入れなど様々な活動を実施した。また、2003年度からは、学芸職員が実施した地域交流事業の一覧についても掲載するとともに、「伯母川探検隊～地域の人とつくる伯母川博物館」（科学技術振興機構委嘱事業 平成15年度地域科学館連携支援事業）の概要も記した。

1. 利用者主体の事業

(1) フィールドレポーター

フィールドレポーターとは、県内を中心に、身近な自然や生き物あるいは地域の情報などを定期的に報告してもらい、得られた情報を博物館の資料として保存し、展示や交流の中で活用してゆくとともに、情報のやりとりを通して博物館とレポーター同士をつなぐ制度である。この制度は1997年度から始まり、2003年度は139名の登録者があった。

活動としては、博物館とフィールドレポーターが相談してテーマを設定し、年数回行うアンケート型調査と、身近な情報を自由な形で随時報告してもらう自由型調査を実施している。また、アンケート型調査の結果を受けて交流会を開催したり、調査に先駆けての勉強会や観察会を適宜実施している。

2003年度は、2004年度に開催される企画展示「のびる・ひらく・ひろがる－植物がうごくとき－」への参加を目指して、「庭を訪れた蝶の調査」、「ガマ（蒲）を探そう」、「我が家の年中行事」（2004年度も継続中）という3つのテーマでアンケート調査を行った。これらの調査で得られた情報は、「フィールドレポーター便り」としてまとめられ、フィールドレポーター全員に報告された。また、自由型調査で報告された内容は「フィールドレポーター掲示板」としてまとめられている。

2003年度の新しい活動として、夏の交流会を伊吹山文化資料館のボランティアのみなさんで行った。さらに、2002年度も参加した兵庫県立人と自然の博物館で開催された「ボランティアメッセ」にも参加し、他館の多くのボランティアグループとの交流をもった。

フィールドレポーターの調査内容等一覧（2003年度）

調査内容	実施月	報告数（件）
1) 庭を訪れた蝶の調査	4～7	372
2) ガマ（蒲）を探そう	6～10	267
3) 我が家の年中行事	3～	調査中
4) 自由型調査（フィールドレポーター掲示板）	通年	122

フィールドレポーターの活動内容等一覧（2003年度）

活 動 内 容	実 施 月	回 数
1) フィールドレポーター便りの発行	1・3	2
2) フィールドレポーター掲示板の発行	4・5・7・9・12・2	6
3) フィールドレポーター交流会	4・8	2

(2) 「はしかけ」制度の実施状況

1) 概 要

2000（平成12）年度に運用が開始されたはしかけ制度は、どちらかという受け身的な博物館の利用では飽き足らなくなって、何らかの活動を始めたいという人たちに対し、そのきっかけと場、さらには新しい活動を発想するための環境を提供しようとするものである。また、その活動は博物館内とその周辺にとどまらず、地域へも広がってゆくことにより、琵琶湖博物館の中長期目標に掲げられている「地域だれでもどこでも博物館」の実現に向けて、博物館と地域あるいは地域に住む人たちとの「はしかけ」としての役割も期待されている。

2004年4月末現在、登録者数は204名で、11のグループが活動を行った。

2) はしかけ制度の展望

はしかけ制度の精神に沿えば、参加者側から多様な活動が提案され、博物館とともに活動を作り上げる形へと移行していくことが理想である。また、はしかけグループや参加者が核になって、各地域に新たな活動が生まれ、すでに活動しているグループも巻き込んで、博物館を基点とした活動のネットワークが県内全域に広がっていくような方向へと発展してゆくことが、はしかけ制度の将来的な目標であり、中長期計画で掲げている「地域だれでも・どこでも博物館」という構想を実現する一つの有効な手段となりうるものと考えられる。

3) グループの名称と活動の概要

○咽頭歯倶楽部（担当：中島 経 夫）

うおの会(後述)のサブグループとして2003年1月末に発足。コイ科魚類の咽頭歯を見分ける能力を磨き、現生・化石のコイ科魚類の進化の道筋を探る。咽頭歯標本の制作、遺跡からの咽頭歯遺体検出、化石の調査などをおこなっている。

○うおの会（担当：中島 経 夫）

2000年より、身近な環境で頑張っている魚たちの姿を21世紀初頭の記録として保存することを目的に、滋賀県の琵琶湖集水域における魚類の分布調査を実施している研究グループ。

○湖（こ）をつなぐ会（担当：嘉田由紀子）

2003年11月に、県内在住の子どもたちで組織する「琵琶湖の未来たち合唱団」とその保護者らによって活動を開始した。加藤登紀子さん作詞作曲の「生きている琵琶湖」を滋賀県内外に

広める活動を行うとともに、子ども達が、簡単に口ずさむことができ、琵琶湖の未来のことを考えるきっかけとなる様な「うた」を作ることを考えている。「うた」を通じて、琵琶湖の文化的、社会的価値を再発見することが、「湖をつなぐ会」の目的である。

・将来展望

県内外でのさまざまな企画に参加し、「うた」を通じて琵琶湖を知ってもらおうとともに、博物館のアトリウム等を利用しながら、「生きている琵琶湖」を来館者に知ってもらい、琵琶湖の未来を考えるきっかけを提供していく。あわせて琵琶湖にかかわる「うた」をさらに発掘し、新たな「うた」の創造もめざしていく。

2004年度は、第3日曜日の家庭の日を活動の日として、県内からの来館者に「生きている琵琶湖」をより知ってもらえる様な活動を続けていく。また、他の「はしかけグループ」との連携を図りながら、共に活動できる方法を探りたい。

○里山の会（担当：長崎 泰則）

当館の交流事業「里山体験教室」卒業生により、2001年から活動を行なっている。

活動フィールドとして、琵琶湖近郊（滋賀県日野町上駒月）の里山で、春の植物観察、山菜とり、夏の昆虫観察、秋のキノコ観察、そして冬の里山のくらしなど、四季の変化を楽しみながら、学芸員とともに琵琶湖博物館里山体験教室のサポートをしている。

・将来展望

里山の会は、里山の手入れだけでなく、春夏秋冬の自然を満喫しながら、炭焼きをしたり、そば、サツマイモ、シイタケなどの栽培をし、その味わいを楽しんでいる。

入会するのは里山体験教室卒業生なので会員は急激には増えないが、和気あいあいとやっていきたいと思っている。

今、取り組んでいる日野町上駒月の里山は、「山菜、シイタケ、カブトムシ採りの楽しめる、ケヤキ混じりのコナラ林」を目標にしている。数年かけて、常緑樹を整理していく予定である。

○植物観察の会（担当：布谷 知夫）

いろいろな活動をしようとする時にすべての基礎になるのが植物の情報である。植物観察の会は、「はしかけ」の横断的な植物研修会として発足した。年4回の県内各地での観察会を行ない、はしかけの登録者ならだれでも参加することができる。

2004年度は同じく4回の観察会と企画展示室内でのワークショップなどを行う予定である。植物について知りたいと思う方に多数参加していただきたい。

○体験学習の日（担当：西垣 亨）

子どもたちの自然や暮らしへの興味関心を高め、博物館を好きになってもらえるような学習プログラムを開発し、第2第4土曜の「体験学習の日」事業の中で実践している。子どもや家族との触れあいを大切にしたプログラムづくりを心がけている。

・将来展望

体験学習の日はしかけは、はしかけ制度設立から、交流事業「体験学習の日（毎月第2・4土曜日開催）」の運営を館職員とともに行ってきた。2003年度は新たに、プログラムの企画・

実施に興味をもつはしかけが中心となって、オリジナルの学習プログラム作りや既存プログラムの改善を行った。はしかけが参加者一人一人の学びを支援し、事業運営の改善もはしかけの視点で積極的に進めている。

今後は、展示室・企画展関連のプログラム、参加者同士がつながるプログラム、他のはしかけグループとの協働プログラムなどを開発する中で、参加者の学びの可能性をさぐりながら新たなつながりを求めていきたい。

はしかけによる体験学習の日が、より多くの利用者にとって、琵琶湖博物館を楽しむためのきっかけと出会いの場となることを目指していく。

○たんさいぼうの会（担当：大塚 泰介）

2002年5月に珪藻の会として出発し、対象範囲の拡大をねらって「たんさいぼう(単細胞)の会」と改名した。珪藻の研究を中心に単細胞微生物のハイ・アマチュア研究者の育成を目指す。年数回の調査旅行と標本の整理、顕微鏡写真の撮影などを行っている。メンバーの中の数名は学会発表も行った。

○田んぼの生き物調査グループ（担当：楠岡 泰、M. J. グライガー）

フィールドレポーター制度で行った田んぼの生き物調査に興味を持った有志で結成された。田んぼにすむカブトエビやハウネンエビ、カイエビなどのエビ類を中心に、田んぼの生き物の分布や生態を調べている。これまでエビ類の分布が滋賀県南部に片寄っていることなどを発見した。

○中世のおんなたち（担当：中藤 容子）

2002年度(平成14年度)企画展示「中世のむら探検」の際に設立した「中世探検隊」が、企画展示終了後2003年度より地機織りの活動の継続を目指して改名。

・将来展望

近江に残る地機から使える地機を復元製作し、糸・布作りに使う道具を整え、地機織りの技術を高め、広め、地域に地機織りの拠点を作っていくような活動が今後展開できればと考える。

○ほねほねくらぶ（担当：高橋 啓一）

「ほねほねくらぶ」は、7番目のはしかけとして2002年7月に発足。現生動物の骨格標本の製作や、骨の化石のクリーニングなどを行っている。これまで、ネコ、モルモット、タヌキ、ニワトリ、ウサギ、シカ、クマ、クジラ、ハクビシン、アザラシなどなどいろいろな動物を扱ってきた。

○丸子船探検隊（担当：牧野 久実）

2002年度より準備的な活動が始められ、2003年度より正式に発足した。近世から戦前まで琵琶湖輸送の主役であった丸子船を中心に、伝統的な木造船についてさまざまな角度から調査研究を行い、その謎を解きほぐして行くことを目指している。

4) その他

2003年度は、通常の活動のほか、2002年度に引き続いて兵庫県立人と自然の博物館で開催され

た「ボランティアメッセ」(兵庫県三田市)に参加し、はしかけの活動をアピールするとともに、来場者や他館のボランティアグループと交流を行い、見識を広めた。また、2004年3月には、「はしかけ活動発表会」を行い、普段交流の少ないグループ間での交流を深めた。

2. 一般利用者へのサービス事業

(1) 観察会・見学会等

2003(平成15)年度は、博物館内や県内とその周辺で行う博物館観察会17件、博物館の舞台裏紹介などの博物館を見学する見学会2件の合計19件の事業を企画した。本年度は雨天等止むを得ない理由によって中止された行事が4件あった。当該年度は他団体との協働事業を多くすることをめざしたが、実際協働できた事業は4件(竹生島でカワウを観察しよう、漁船に乗ってエリの漁を見に行こう、化石の観察会、湖のまわりにある巨木を見にいこう)にとどまった。観察会・見学会に対する参加者の評判はおおむねよかったが、応募者が定員をかなり下回った事業が4件みられた。逆に応募者が定員を大きく上回り、参加者を抽選で選んだ事業は1件(化石の観察会)であった。なお、表のなかで○印の付けられた事業(5件)は平成15年度企画展「外来生物」関連行事である。各事業のタイトル、日程、参加者数等は下表に示した。

2003年度 観察会・講座等一覧表

事業名	開催日	開催場所	参加者数 ^(人)	担当者
○春の田畑の植物を観察しよう	5月4日(日)	大津市堅田	18	布谷・井戸本
朽木の春を感じよう	5月10日(土)	朽木村	31	草加・野崎
博物館収蔵庫探検(2回/日)	5月17日(土) 5月31日(土)	博物館	80(延べ)	榎永・國分・中井 ^(人) ・ 小泉・山口
春の里山を歩こう	5月18日(日)	大津市仰木	26	楠岡・布谷・長崎
○姉川のヤナを見に行こう	5月25日(日)	米原町	30	秋山・井戸本・矢野
竹生島でカワウを観察しよう	6月1日(日)	長浜港(集合)	26	亀田・牧野 ^(博)
丸子船に乗ってみよう	6月7日(土)	博物館	35	牧野 ^(久)
○漁船に乗ってエリの漁を見に行こう	7月26日(土)	守山市	38	松田・牧野 ^(博) ・井戸本・ 亀田
○湖のほとりで水草を調べよう	8月3日(日)	烏丸半島	中止	芦谷
琵琶湖の水を調べにいこう	8月9日(土)	博物館	中止	芳賀
ミドリセンチコガネを探しに行こう	8月16日(土)	栗東市	26	八尋・榎永
○外国から来た植物を探そう	8月17日(日)		中止	布谷
化石の観察会	10月12日(日)	多賀町	26	高橋・山川・里口

ビワマスの採卵現場を見学してみませんか	10月26日(日)	マキノ町	19	桑原・井戸本
秋の木の実を観察しよう	11月3日(月)	高島町	中止	布谷
湖のまわりにある巨木を見にいこう	11月8日(土)	高月町	15	牧野 ^(原) ・布谷
博物館の森を調べよう(秋編)	11月15日(土)	博物館	12	草加
植物の冬越しを観察しよう	2004年 2月11日(水)	彦根市	21	布谷・長崎
水族展示の舞台裏	2004年 3月7日(日)	博物館	34	井戸本・前畑・秋山・ 松田・桑原



観察会「湖のまわりにある巨木を見にいこう」

(2) 博物館講座

当館が開催する講座は、大きく分けて 1) 当該年度に企画展示に関連した講座(企画展講座)、2) 研究部が主体となって実施する連続講座(連続講座)、3) 学芸員が専門テーマについて解説する講座(入門・専門講座)、4) 教員やアマチュアの研究者を対象とした講座(生き物飼い方講座)の4つに分けられる。

1) 企画展講座

平成15年度企画展示「外来生物 つれてこられた生き物たち」の主たるイベントの一つとして、中学生以上を対象として本企画展担当者が主体となって全6回シリーズで外来生物問題の現状と課題のほか、移入の歴史や利用とその功罪など、さまざまな角度から講義(於:セミナー室)を行うとともに、オプションとして企画展解説ツアー(於:企画展示室)を実施した。

回	開催日	内 容	参加者数 (人)	担当者
	2003年			
1	6月8日(日)	暮らしの中の外来生物	38	布 谷
2	6月15日(日)	生物の人為的な広がり歴史と現状	36	中 島
3	6月22日(日)	外来生物の積極的利用とその功罪	30	井戸本
4	6月29日(日)	移入のルールといちばん身近な外来生物 (ペット)	30	桑 原
5	7月6日(日)	外来生物問題の現状と課題	35	中 井
特別回	2003年 7月20日(土)	企画展オプションツアー	25	担当者 全 員

2) 講 座 [担当: 高橋・前畑]

2003 (平成15) 年度は、「環境史入門講座」、「回転実験室で水槽実験を! (入門講座)」「珪藻入門: 珪藻写真をみてみよう」の3件であった。日程、内容等は以下に示したとおりである。

a. 環境史入門講座

琵琶湖の環境史研究は、この数十年の間に飛躍的に進んでいる。本講座ではその概要を学芸員4名が全2回に分けてわかりやすく解説した。

開催日	事業名	開催場所	参加者数 (人)	担当者
9月6日(土)	琵琶湖の長期変動と人間の登場 考古学でみる琵琶湖	セミナー室・実習室	11	宮本 用田
9月13日(土)	街路樹でみる大昔の植物 実験でわかる災害の仕組み	セミナー室・実習室	11	山川 里口

b. 入門講座

上記の環境史入門講座以外の入門講座としては以下の2件がある。

開催日	事業名	内 容	開催場所	参加者数 (人)	担当者
8月5日(土)	回転実験室で水槽実験を!	C展示室にある回転実験室 で普段できない水槽をつかった実験	C展示室	11	戸田
7月12日(土)	珪藻入門: 珪藻写真をみてみよう	「たんさいぼうの会」が撮影した珪藻の写真を参加者とともに分類	セミナー室	20	大塚

3) 夏休み自由研究講座・夏休み相談室 [担当: 杉江・桑原]

子どもたちを対象に、夏休みに入って間もない7月下旬に研究の方法について指導する「夏休み自由研究講座」を、また夏休みが終わる8月下旬に「夏休み相談室」を開催した。前者は、2002（平成14）年度から開始し、本年度で2年目の事業である。日程、参加者数等を下表に示した。

2003年度 夏休み自由研究講座・夏休み相談室の内容詳細

開催日	コース名	会場	件数	担当
1) 自由研究講座 2003年 7月27日(日)	昆虫	実習室	32	八尋・榊永・山口・(武田)・(南) 布谷・(村瀬)・(石田) 高橋・里口・(磯部)・(長澤)
	植物	生活実験	12	
	化石	工房など	56	
2) 相談室 2003年 8月23日(土) 8月24日(日)	昆虫	セミナー 室	7	八尋・榊永・(武田)・(南) 中井 ^(外) ・布谷・草加・(村瀬) (石田) 桑原・前畑・秋山・井戸本 中井 ^(外) ・松田 楠岡・大塚・グライガー 芳賀 高橋・里口・宮本・(磯部)・(長澤) 矢野・用田
	植物		5	
	魚類		3	
	両生・爬虫類		2	
	貝類		1	
	浮遊生物		4	
	環境・水質		1	
	地学・化石		10	
	社会全般		1	

※ () 内は外部講師

4) 夏休み生き物飼い方講座 (担当: 西垣・谷口)

魚、ザリガニ、カエルなどについて、学芸員が講師となって、それぞれの生き物の特徴や飼い方、増やし方について、実物と資料を提示しながら解説した。その後、質疑応答の時間をとった。

参加者からは「今まであまりに知らなさ過ぎた」、「自分でも飼ってみたくなった」、あるいは「学芸員の話がとてもおもしろかった」などの声が聞かれ、たいへん好評であった。次年度も実施する方向で検討したい。

開催日	内容	開催場所	参加者数 ^(人)	担当者
2003年8月2日(土)	1) 魚の飼い方 2) ザリガニの飼い方 3) カエルの飼い方	実習室	15	秋山 前畑 松田
2003年8月5日(火)	1) カブトムシの飼い方 2) カメの飼い方 3) 水生昆虫の飼い方	実習室	28	八尋 桑原 榊永

(3) 田んぼ体験教室〔担当：杉谷・北川〕

博物館の生活実験工房および隣接する水田を利用し、1年間（全10回）の田んぼ体験教室を開催した。農作業の体験ばかりでなく、周辺の自然観察、田んぼの多面的な機能、そして冬には農家の仕事や生活も体験できるようプログラムを組んだ。

田んぼ体験教室の開催日と内容など（登録者34名：11家族）

回	開催日	内容	担当者
第1回	5月11日(日)	全体説明と田植え	杉谷・北川
第2回	6月8日(日)	水田の生き物	杉谷・北川・布谷・秋山
第3回	7月20日(日)	虫の話	杉谷・北川・八尋
第4回	8月17日(日)	かかし作り	杉谷・北川
第5回	9月28日(日)	稲刈り	杉谷・北川
第6回	10月19日(日)	脱穀	杉谷・北川
第7回	11月16日(日)	なわない	杉谷・北川
第8回	12月14日(日)	もちつき	杉谷・北川
第9回	1月18日(日)	わら細工	杉谷・北川
第10回	2月15日(日)	まとめ	杉谷・北川



「かかし作り」



「脱穀」

(4) 里山体験教室〔担当：長崎・青木〕

里山の重要性を見直すため、里山の手入れや暮らしを実際の活動を通じて体験する里山体験教室を下記により開催した。四季を通じて同じ里山で、計4回の手入れ作業とともに、山菜の試食会や昆虫、キノコの観察など五感を十分に使った体験活動を行った。なお、開催地は日野町大字上駒月の里山で、開催に際しては「里山の会」（はしかけ）と協力して実施した。

開催日と内容など 登録者 46名 (25家族)

回	開催日	内 容	担 当 者
第1回	4月26日(土)	春編 里山の山菜	長崎、青木、楠岡
第2回	7月26日(土)	夏編 里山の虫たち	長崎、青木、八尋、榊永、山口、前畑
第3回	10月25日(土)	秋編 里山のキノコ	長崎、青木、楠岡
第4回	12月6日(土)	冬編 里山の冬じたく	長崎、青木、楠岡



里山の夏 ～子ども達～



里山の秋 ～イモ掘り～

(5) 地域交流活動支援事業

2003(平成15)年度に当館学芸職員が地域の団体、機関等を対象として行った館内ガイダンス、講義、講演等は以下のとおりである。

1) 2003年度 一般団体への支援事業一覧表(館内対応)

月	日	曜日	団体名(学校以外)	対象(人)	タイトル・内容など	区分	場 所	担当者
4月	18	金	NTTドコモ関西	約70名	琵琶湖の環境	講義		布谷
	28	土	岡山公民館	大人 10名 子ども 30名	川の水生生物	講義	セミナー室	秋山 西垣
7月	6	月	生駒市さつき台南子供会 (生駒市)	子ども 45名	ヨシ笛づくり	体験 学習	実習室	青木 はしかけ
	9	水	国土環境緑化協会近畿支 部	大人 35名	展示説明、地球環境の 保全と創出	講義	セミナー室	布谷
	23	水	NPO法人 シニア自然 大学(大阪市)	大人 64名	琵琶湖の生態系	講演	セミナー室	布谷

	26	土	八幡水環境を守る生活協議会	子ども 27名	プランクトン観察	体験 学習	実習室	西垣
	31	木	竜王町教育委員会	子ども 40名	びわ湖の概要	講義	ホール	谷口
8月	3	日	子ども環境特派員事業	子ども 85名	魚の解剖・わら細工・ プランクトン観察	体験 学習	実習室	西垣 谷口 一瀬 岡
	7	木	大阪府水道サービス公社 (大阪市)	子ども 60名	プランクトン観察・魚 の解剖	体験 学習	実習室	谷口 西垣 中井 前畑
	17	月	若狭湾生物同好会	大人 約30名	琵琶湖の魚と田んぼの 機能	講演	セミナー室	前畑
	20	水	中主町教育委員会	子ども (小学生) 22名	ヨシ笛づくり・水族パッ クカード見学	体験 学習	実習室・ 展示室	はしか け・前 畑
	22	金	五個荘町教育委員会	子ども (中学生) 21名	プランクトン観察	体験 学習	実習室	谷口
	25	月	子ども環境会議	子ども 118名 大人 30名	博物館の概要説明	講義	ホール	谷口
	26	火	太子町子ども環境学習教室 (大阪府)	子ども 23名	プランクトン観察	体験 学習	実習室	谷口
	26	火	伊川を愛する会(小・中 学生)	子ども 40名	博物館ガイダンス・生 き物との関わり方	講義	ホール	中井
	27	水	伊吹町教育委員会「エコ カレッジ」	子ども 20名	プランクトン観察	体験 学習	実習室	(自校 指導)
	27	水	東京水産大学研修(東京)	子ども 14名	環境学習について	講義	実習室	西垣
9月	10	水	ときわ公民館女性学級	子ども 15名	琵琶湖の水かんきょう	講義	セミナー室	谷口
	18	木	淀川フォーラム(大阪)	大人 約60名	琵琶湖の魚と環境	講演	セミナー室	前畑

	23	火	新旭町教育委員会	子ども 32名	アドベンチャースクール (プランクトン観察)	体験 学習	実 習 室	谷 口
	27	土	五個荘町生涯学習課 小 学生	子ども 8名	ヨシ笛づくり	体験 学習	実 習 室	西 垣
10月	18	土	ジュニアユニバーサルス クール	子ども 74名	びわ湖の水環境	講義	ホ ー ル	西 垣
	18	土	金岡中学校区青少年健全 育成協議会	子ども 120名	びわ湖の概要、水環境	講義	ホ ー ル	谷 口
	24	金	独立U協合同セミナー、 びわ湖放送	大 人 18名	琵琶湖の環境と魚	講演	会 議 室	前 畑
11月	2	日	鳥取県関金町関金農事管 理組合	大 人 13名	琵琶湖博物館における 農業関係の取り組みに ついて	講演 ・ 案内	生実工房	杉 谷
	3	月	ひかり子供会珠算部(長 浜市)	小学生 14名 大 人 5名	ヨシ笛づくり	体験 学習	実 習 室	青 木
	20	木	県退職公務員連盟湖南支 部	大 人 40名	みずと森と生き物につ いて	講演	セミナー室	草 加
	24	月	湖州平子供会(大津市)	子ども 26名	びわはく秋いっぱい (オリジナルプログラ ム)	体験 学習	生実工房	青 木 中 藤 磯 野 はしかけ

2) 2003年度 一般団体への支援事業一覧表(館内ガイド)

月	日	曜日	団 体 名	対象(人)	タイトル・内容など	場 所	担当者
4月	12	土	京都橘女子大学日本語 日本文学科	学生 77名 教員 7名		ホ ー ル	西垣
	15	火	滋賀県立大学	学 生 約200名	展示解説	展 示 室	秋山
	25	金	近畿府県指定都市消防 学校長会議	20名	展示解説	会 議 室	中島
5月	16	金	滋賀県高等学校理科教 育研究会	教 師 約60名	展示解説	展 示 室	芳賀・前畑・ 秋山・矢野・ 松田・楠岡・ 高橋・桑原・ 榎永・小泉・ 國分・山口

	15	日	藤原岳自然科学館運営委員会	19名	博物館概要説明	会議室	前畑
	23	水	大津赤十字看護専門学校	1年 43名	博物館概要説明	セミナー室	布谷
7月	18	金	近畿ブロック砂防主管課会議	20名	博物館概要説明	会議室	前畑
	24	木	印旛沼流域水循環健全化会議	40名	博物館概要説明	会議室	布谷
8月	17	日	混声合唱団京都木曜会(宇治市)	小学生 25名	水と人びとの暮らし	展示室	牧野 ^(専)
9月	6	土	真野北公民館	子ども 20名	舞台裏見学	バックヤード	八尋
	10	水	青少年育成湖西地区連絡協議会	大人 8名	企画展示「外来生物一つれてこられた生き物たち」 解説・案内	企画展示室	前畑
	10	水	近畿労働金庫営業推進部	大人 40名	博物館の紹介	ILEC 会議室	前畑
10月	19	日	近畿大学農学部(奈良)	学生 73名	施設見学(博物館学実習)	展示室	松田 井戸本
	15	土	NPO法人 自然と緑	大人 50名	博物館概要説明	ホール	前畑
	15	土	立命館大学 大学院	学生 12名	博物館概要説明	セミナー室	グライガー

3) 2003年度 一般団体への支援事業一覧表(館外対応)

月	日	曜日	団体名	対象 ^(ウ)	タイトル・内容など	区分	場所	担当者
4月	2	水	大津東ロータリークラブ	大人 子ども 約50名	セタジミ漁、瀬田川の環境問題	講演	瀬田川 (大津市)	松田
	12	土	豊穰の里赤野井湾流域協議会(守山市)	大人 子ども 50名	水生生物調査	野外学習	守山市内河川	秋山 前畑
5月	15	木	淡海環境保全財団	大人 約150名	びわ湖の魚と田圃の役割	野外学習	滋賀県文化産業交流会館	前畑

7月	2	金	滋賀県レイカディア大学	学 生 240名	琵琶湖の魚と田んぼ	講演	草 津 市	前 畑
	3	木	滋賀県高等学校理科教育研究会	教 師 〇〇名	早崎内湖の魚類相の調査	野外 学習	湖 北 町	中 島
	8	火	NPO法人 シニア自然大学	大 人 66名	淡水魚に関する理論と実習	講演	梅田東生涯学習 ルーム(大阪)	前 畑
	20	日	水と文化研究会	大人・子 ども20名	新旭町 世代をつなぐ水の学校	野外 活動	針江大川、田 井川(新旭)	秋 山
	22	火	NPO法人 シニア自然大学(大阪市)	大 人 61名	淡水魚に関する理論と実習	講演	梅田東生涯学習 ルーム(大阪)	前 畑
	24	木	NPO法人 シニア自然大学(大阪市)	大 人 61名	淡水魚に関する理論と実習	講演	梅田東生涯学習 ルーム(大阪)	前 畑
	28	月	NPO法人 シニア自然大学(大阪市)	大 人 61名	淡水魚に関する理論と実習	野外 学習	大 戸 川 (大津市)	前 畑
	29	火	NPO法人 シニア自然大学(大阪市)	大 人 66名	淡水魚に関する理論と実習	野外 学習	大 戸 川 (大津市)	前 畑
	31	木	NPO法人 シニア自然大学(大阪市)	大 人 61名	淡水魚に関する理論と実習	野外 学習	大 戸 川 (大津市)	前 畑
8月	6	水	自然調査ゼミナール	子ども 10名	琵琶湖の貝を調べてみよう	野外 学習	烏 丸 半 島	松 田
	9	土	近江町はにわ館(近江町)	大 人 子ども 50名	近江町「ハリヨ研究会」・醒ヶ井養鱒場ハリヨ池について	講演	は に わ 館 (近江町)	井戸本 松 田
	10	日	京都精華大学(森と里と湖のミュージアムに関する地元学調査)	大 人 約30名	現地にて植物・魚類、環境について	野外 学習	高島郡マキノ 町	布 谷 前 畑
	19	火	黒田たんぼの学校	大 人 子ども 30名	黒田の川の黒い貝	野外 学習	木之本町黒田	中 井 松 田 杉 谷
	27	水	近江八幡ロータリークラブ	大 人 60名	琵琶湖の魚と環境	講演	ホ テ ル ニューオウミ (近江八幡市)	前 畑
	18	木	同志社大学(京都市)	学 生 35名	近江の自然	講演	同志社びわこ リトリート セ ン タ ー	松 田

	27	土	水環境クリーンウォーク	大人 子ども 約100名	魚の解剖	野外 学習	烏丸半島	秋山 松田 井戸本
9月	20	土	（助）滋賀県文化振興事業団	大人 15名	外来生物 つれてこられた生き物たち	講演	安曇川文化 芸術会館	桑原
	14	日	ぼてじゃこトラスト	大人 子ども 約80名	釣り大会、魚つかみ 体験教室	野外 学習	ウォーター ステーション 琵琶	秋山 うおの 会
10月	14		滋賀県理容生活衛生同業組合	約50名	チョキちゃん環境フェ スティバル	講演	烏丸半島	井戸本
	18	土	水と文化研究会	大人 子ども 15名	カワニナの生態、琵琶 湖固有種、淡水魚	講演	南郷市民 センター	松田
	26	日	マキノいきいき元気体 験推進協議会東小学区	大人 子ども 25名	現地にて魚類、外来 種、環境など解説	野外 学習	マキノ町地内	中井 杉谷 前畑
11月	1	土	豊稷の里赤野井湾流域 協議会（守山市）	大人 子ども 50名	守山川・目田川ウォッ チング	野外 学習	守山市内河川	前畑
	25	日	京都橘女子大学	学 生 約70名	博物館機能論Ⅱ	講演	京都市山科区	西垣 青木 体験 はしかけ
2月	4	水	湖南地域振興局	大人 45名	河川調査の実際理論 編（水守り講座）	講演	草津市	前畑
3月	6	土	草津市環境課	大人 50名	ゴミと水環境を考え るつどい	講演	草津市	前畑

(6) 質問コーナー・フロアトーク

当館では、開館当初から”学芸員の顔が見える博物館”づくりをめざしている。その一環として情報センターの図書室の一角に「質問コーナー」を設置している。開館日には、学芸職員が日替わりでここに常駐し、一般の方々からの質問に回答している。回答可能な質問には担当学芸職員がその場で答え、専門的な内容を含む質問については、それぞれの専門学芸員が回答することになっている。また、館長および副館長も、学芸職員にまじって、月一回程度、質問コーナーを担当している。受け付けた質問の内訳は別表の通り。

なお、当コーナーでは、学芸職員が来館者に展示解説を行う「フロアトーク」を1日1回実施して

いる。「フロアトーク」を行うのは、当日の質問コーナーを担当する学芸職員である。2003年度から来館者の多い土、日、祝日も実施を始めた。なお、2003年度試行した学校団体を対象とした「学芸員トーク」は、要望が少なかったため、2004年度は行わない。

当コーナーでは、図書室入り口の壁に、質問コーナー担当学芸職員の予定を掲示している。来館者に担当学芸員の専門分野と氏名を示すことにより、できるかぎり専門分野の担当者がある日に質問に来てもらえるよう配慮したものである。この担当学芸職員の予定表は、ホームページにも掲載しており、インターネットで閲覧できるようになっている。

質問コーナーにおける質問内容集計（2003年度）

質問総数					701件
質問内容	一般的な質問（総合案内で回答できるようなもの）				79件
	専門的な質問				622件
対 応	担当学芸員が対応				556件
	専門の学芸職員（または外部）が対応				145件
専門的な質問の内容（内訳）					
生 物	動 物	魚 類	206件	プランクトン	4件
		その他の水生動物	61件	動物一般	66件
	植 物	陸上植物			34件
		水生植物			9件
地 学	51件		図 書	7件	
物 理	2件		琵琶湖	69件	
歴史民俗	33件		環 境	36件	
博 物 館	44件		そ の 他	79件	

3. 学校連携事業および体験学習

(1) 教職員等研修および視察

平成15年度に行われた教職員等研修および視察は、合計36件（参加者：842名）であった。こうした研修では、博物館の基本理念や展示概要のほか、総合的な学習などにおける学校の博物館活用法についての解説も行った。また、実習室等を使って展示に関わる体験実習も実施した。

月 日	教 職 員 等 研 修 お よ び 視 察	人 数
5月3日	栃木県立真岡北陵高等学校研究員研修	1
6月12日	尼崎市小学校教頭会研修	40
6月26日	滋賀県総合教育センター生物講座	5
7月9日	香川県自然科学館視察	3

7月23日	伊丹市小学校理科教育研究員研修	7
7月29日	三菱総合研究所視察	1
8月1日	文部科学省生涯学習政策局生涯学習推進課民間教育事業室視察	3
8月1日	全国女性校長会研修会	29
8月2日	教員向け博物館講座「生き物飼い方講座」	15
8月4日	滋賀県総合教育センター理科教育講座	80
8月4日	兵庫教育大学自然系化学研究室夏季研修会	12
8月5日	教員向け博物館講座「生き物飼い方講座」	28
8月5日	草津市初任者教員研修	26
8月6日	自然調査法研修会「自然調査ゼミナール」	55
8月7日	自然調査法研修会「自然調査ゼミナール」	55
8月8日	滋賀県総合教育センター特色ある教育活動支援講座	70
8月18日	神戸市小学校校長会	23
8月21日	滋賀県学校教育課ALT視察	45
8月27日	東京水産大学研修	14
8月28日	茨城県高等学校教育研究会	28
8月28日	草津市社会科教員研修	20
9月11日	フィジー国研修員視察	5
10月3日	広島大学視察	2
10月17日	総合教育センター理科実習助手講座	20
10月23日	総合教育センター5年経験者研修	67
10月28日	総合教育センター5年経験者研修	59
11月11日	近畿地区通信制高等学校理科教員研修	15
11月13日	ザンビア国研修員視察	1
11月14日	静岡市教育委員会視察	1
11月19日	北九州市教育委員会視察	3
11月27日	呉市企画部海事博物館推進室視察	2
12月4日	東京学芸大学視察	1
12月5日	滋賀県工業高等学校総会	96
12月9日	静岡県志太郡大井川町教育委員会研修	6
3月4日	国立歴史民俗博物館視察	2
3月5日	千葉県立中央博物館視察	2
合 計		36件 842

(2) 学校団体向け体験学習

博物館と学校とが連携を保ちながら活動を進めていくことができるよう、学校のカリキュラムに沿った社会見学への対応のほか、各種体験学習、エコ草津、フローティングスクール等の受け入れを行った。特に、体験学習として下記のような活動を実習室、セミナー室、生活実験工房等を利用して行った。

校 種	主 な 活 動 内 容
小 学 校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について等）、ヨシ笛、化石のレプリカ、水質検査、プランクトン採集と観察、昔のくらし体験（石臼、脱穀、手押しポンプ）、わら細工、魚の採集（投網）と解剖、外来魚の調理、昆虫の観察、水生昆虫の観察、野外観察（ヨシ群落）、野外植物観察、貝の観察、水草の観察、水鳥の観察、火山灰の観察、大地のつくり、質問対応、バックヤード見学
中 学 校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について等）、ヨシ笛、水質検査、プランクトンの観察と採集、化石のレプリカ、魚の採集（投網・釣り）と解剖、外来魚の調理、わら細工、野外植物観察、貝の観察、水の汚れの測定、水鳥の観察、水生昆虫の観察、草木染め、質問対応、バックヤード見学
高等学校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚類、丸子船の研究）、プランクトンの採集と観察、魚の採集と解剖、水質調査、珪藻化石の観察、生体観察池での陸水学基礎学習、湖岸調査（地形、植生他）展示利用学習、課題研究、質問対応、バックヤード見学

校 種	県 内		県 外		合 計	
	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数
小 学 校	71	4843	23	1906	94	6749
中 学 校	24	1857	31	2702	55	4559
高 等 学 校	12	550	5	433	17	983
養 聾 盲 学 校	3	23	0	0	3	23
合 計	110	7273	59	5041	169	12314

(3) 一般団体向け体験学習

子どもたちの自然や文化への興味関心を高めるとともに、地域連携のあり方を探るため、子ども会やボーイスカウトなどの一般団体に対して体験活動を行った。

実施数	内 容
30団体 (747名)	講義(琵琶湖と環境、琵琶湖の生き物)、ヨシ笛、外来魚調理、プランクトンの採集と観察、魚の解剖、昔の暮らし体験(石臼で粉づくり)等

(4) 「体験学習の日」の活動

学校週5日制に対応する事業として、毎月第2・4の土曜日に当館を訪れる小・中学生を対象に、自然・環境・歴史・民俗への興味や関心を高めるため体験活動を行った。

午後1時半～3時まで。大変好評で、年間822名の参加者があった。

回	月 日	テ ー マ	参加者数
1	4月12日	春の草花でしおりをつくろう	45
2	4月26日	同 上	47
3	5月10日	化石のレプリカをつくろう	73
4	5月24日	同 上	69
5	6月14日	琵琶湖のプランクトンを観察しよう	31
6	6月28日	同 上	29
7	7月12日	レインスティックをつくろう	33
8	8月30日	同 上	20
9	9月13日	紙すきをしよう	55
10	9月27日	同 上	45
11	10月11日	草木染めをしよう	27
12	10月25日	同 上	25
13	11月 8日	木の実で遊ぼう	40
14	11月22日	同 上	57
15	12月13日	餅つきをしよう	72
16	1月10日	お正月の遊びで楽しもう	24
17	1月24日	同 上	29
18	2月14日	ヨシ笛を作ろう	31
19	2月28日	同 上	32
20	3月13日	わら細工を楽しもう	16
21	3月27日	同 上	22
合 計			822

(5) 科学技術振興機構委嘱事業 平成15年度地域科学館連携支援事業

「伯母川探検隊～地域の人とつくる伯母川博物館」

草津市立志津小学校（5年生：3クラス115名）および志津公民館との三者連携事業を実施した。そのねらいは、①館内ではなく地域で「博物館の良さ」を生かした学習支援の方法を探ること ②地域の価値の再発見の場・地域の交流の場となる博物館を地域につくることの2点である。

おもな項目	月 日	内 容
琵琶湖博物館で学ぼう	5月22日	児童が地域博物館をつくるという目的のため、琵琶湖博物館で研修した。15名の学芸職員が対応。
第1回伯母川生き物調査	5月27日	地域の川で、学芸員指導による年3回の生き物調査を実施。標本のつくりかたや調査の方法、生き物の生態について学んだ。のべ32名の学芸職員等が対応。
第2回伯母川生き物調査	7月3日	
第3回伯母川生き物調査	10月9日	
学芸員による授業	10月29日	「総合的な学習の時間」を利用して学芸員が授業を行い、展示の意味やつくり方のポイントについて講義した。
伯母川博物館準備活動	11月2日	学芸職員と児童が協力して、展示準備にあたった。
伯母川博物館	11月4日～12月5日	公民館内に開館。展示物は、児童が製作したパネルや伯母川の生き物の他、「伯母川1000人メッセージ」のコーナーなど。期間中、地域の方々を中心に約1500名の来館者があった。
志津地域ふれあい祭り	11月16日	大人と子どものパネルディスカッション「伯母川の良さって何だろう」を公民館で開催した。参加者は約200名。
地域環境グループ 「志津くらぶ」	5月17日～	「大人目から伯母川を考えよう」をテーマに発足した環境グループ。2004年度も活動継続中。
こどもエコクラブ 「伯母Q五郎」	7月22日～	「もっと伯母川のことを知りたい」という子どもたちが結成したこどもエコクラブ。2004年度も活動継続中。

4. 展示交流事業

・一般家族向け学習プログラム

屋外展示を利用し、昆虫を観察した後、生活実験工房でカイコのマユで気に入った昆虫を作った。

タイトル 「昆虫に親しもう」 2003年8月20日 10:45～12:15 参加人数 8人

・学校向け学習プログラム（交流センターと合同の新規プログラム開発）

京都府長岡京市の第七小学校3年生の総合学習の一環としてプログラムを行った。昆虫に焦点を当て、館内、屋外展示を利用し、昆虫の特徴、生息環境について学び、カイコのマユで昆虫を作った。

タイトル 「様々な昆虫とその環境」 2003年9月30日 10:00~14:00

参加人数 生徒66人+引率4人

・一般団体向け学習プログラム

異なる年齢の子ども間の交流や、リピーターの子どもたちに琵琶湖博物館をより好きになってもらうことを目的に、湖州平のこども会を対象として行った。富江家、生活実験工房を利用し、昔の道具を使いながら、昔のくらしについて考えるプログラムを行った。

タイトル 「琵琶湖博物館子どもオドロキ発見隊！」 2003年11月24日

参加人数 子ども21人+大人5人

- ・海外研修生サラフィナさん（ザンビア）との連携による、常設展示を利用した特別プログラムアフリカ、ザンビアに古くから伝わるお話をしながら、ディスカバリールームにて参加者と一緒にアフリカの歌を歌いながら楽器を鳴らした。 2003年11月29日 13:00~13:30 参加人数 15人
- ・ディスカバリーコーナーでのミニ体験プログラム

ディスカバリーコーナーカウンターを利用し、当日参加で短時間で行える、季節にちなんだ体験プログラムを実施した。

2003年5~6月 カイコのマユ昆虫を作ってみよう

2004年3月初旬 折り紙でお雛様をつくろう！

(1) 水族展示の交流

展示交流員を案内役として、トンネル水槽で潜水作業中の飼育員が水中マイクと水中TVカメラを使って作業の内容や魚の解説をしたり、ペットボトルを用いた簡単な水圧の実験などを行うなど、日常の給餌や水槽管理作業にあわせて水族飼育員が来館者と直接対話する機会を設けた（計6回）。水辺の鳥たちの水槽では、カイツブリが水に潜ってえさをとるようすやそのための体のつくりなどを解説した（計12回）。古代魚の水槽では、チョウザメやガーパイク、ヘラチョウザメにえさを与え、それぞれのえさの違いやそれにとりなす食べ方の違いなどの解説を行った（計13回）。

(2) 展示交流員と話そう

展示交流員は、琵琶湖博物館の案内だけではなく、展示を通して来館者と交流し、来館者に身近な自然や生活へ目を向けていただく「かけはし」となっている。展示交流員は、普段から展示室での交流を行っているが、さらなる交流業務の充実をはかるため、昨年度に引き続き、『展示交流員と話そう』を実施した。

本事業を実施するに際しては、展示交流員が各自でテーマを設定し、担当学芸員のアドバイスを受けながら、知識の習得、交流方法の検討、資料作成について、2ヶ月間の準備を行った。

本事業は、普段の交流から「きっかけ」をつかみ、できるだけ自然なスタイルで臨めるよう努力した。展示交流員は各自のテーマに沿って、展示だけの交流ではなく、化石を触ってもらう・自作の資料を見ってもらう等、来館者の興味を引き出す工夫も行った。

本事業の詳細は以下のとおりである。

1. 実施期間：2003年12月2日(火)～2004年3月31日(水)
(日曜日、祝・祭日は除く)
2. 実施人数：展示交流員 33名
3. 実施回数：2003年12月 83回
2004年1月 87回
2004年2月 67回
2004年3月 83回 計320回
4. 交流人数：計1,671名

『展示交流員と話そう』 実施内容一覧 (2003年度)

展示室	名 前	実 施 テ ー マ	実 施 場 所
A	芦田 弘美	トリの骨で恐竜骨格復元	脊椎動物化石の研究
	中村とく子	ギベオン隕鉄	コレクションギャラリー
	犬塚 菊美	「咽頭歯」って何でしょう？	魚類化石の研究
	斉藤 文子	ゾウの歯の化石	コレクションギャラリー
B	奥村 恵子	湖北に春が来る「おこない」	漁師の家
	岩見 勉	丸子船と連絡船	輸送の主役丸子船・旧長駅舎
	近藤 摩子	治水・利水	水利用の工夫・治水への取り組み
	森永紗江子	漁具「魚をつかまえる・食べる」	漁師の暮らし
	山本 孝子	大津今昔物語	湖上交通のうつりかわりと港町のにぎわい
	石川 寛子	縄文土器の文様	湖辺の縄文人の暮らし
	清水 聡子	草津川の歴史	治水への取り組み
	木村 美枝	万葉の古都 大津	湖と古代の交通・湖畔の都と万葉集
	村田 洋子	滋賀県内 朝鮮半島ゆかりの地	湖と古代の交通
	C	荒井 紀子	ホテルと共に15年、何故私はホテルにこだわっているのか
松岡 治子		アオコについて	環境の変化 減った生物増えた生物
今泉 美保		湖に描くエリ(漁)	窓の外には何が見えますか(C展渡り廊下)
北川喜美榮		葦葺き屋根について	葦葺き屋根
大川 篤子		空びわから湖西地方をみてみよう	空からみた琵琶湖
池畑 慎吾		思い出クイズ	空からみた琵琶湖
岡本 晴行		富江家いろいろ	農村の暮らし

	折中康子	琵琶湖の中に棲んでいる一目小ゾウさんて誰？	生き物コレクション
	橋本富栄	ミクロの世界でプランクトンを見てみよう	ミクロの世界
	西尾文里	里山のいきもの（イノシシ編）	くらしとむすびついた自然
	林 克子	竹生島のカワウ	琵琶湖のさまざまな環境と生き物
	柳原徳子	森林が私たちにもたらしてくれるもの	水をはぐくむ森林
水族	井出範子	チョウザメ・ガーの生態について	古代魚
	大林博子	チョウザメとガーパイク	古代魚
	杉本和子	ユリカモメ	水辺の鳥
	吉田治美	チョウザメ	古代魚
	愛須美由起	カイツブリ	水辺の鳥
	釜本敦子	タナゴの仲間	おもしろい習性の魚たち
	山元真里	声を出す魚「ギギ」	おもしろい習性の魚たち
ディスカバ	北田昌子	はくぶつかん おもしろはっけんガイドツアー	にんぎょうげきじょう

5. 博物館実習（期間：平成15（2003）年8月1日（金）～8月8日（金）；ただし8月3日は休日）

国内15大学30名の学生を対象に、琵琶湖博物館の理念および活動方針と、それにもとづく交流・サービス、情報、資料整備、展示などの活動について、講義・実習を行った。特に、交流の場としての博物館活動を理解してもらうために、来館者との交流の担い手となる展示交流員体験や、利用者とともに常に成長・発展するための博物館評価としての来館者アンケート調査とその分析・発表も行った。博物館活動の基本的考え方の理解を確認し、学生と学芸職員との意見交換を行うため、最終日にはディスカバリーボックスの企画とその発表を行った。実習の日程および内容、参加者内訳は下記の通り。

なお、7日以上の実習が必要な学生5名については、期間を延長して10日間の実習を行った。

実習の日程および内容

月日（曜日）	実習内容（午前）	実習内容（午後）
8月1日（金）	<ul style="list-style-type: none"> 全体オリエンテーション 博物館とは何か？ 	<ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖博物館の設置理念と概要 館内案内 ディスカバリールームの見学 ディスカバリーボックス製作ガイダンス
8月2日（土）	<ul style="list-style-type: none"> 資料整理（地学・歴史・生物など） 	<ul style="list-style-type: none"> 資料整理（地学・歴史・生物など）

8月3日(日)	＜休 み＞	
8月4日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・展示の概略 ・A・B展示室の見学 	<ul style="list-style-type: none"> ・C展示室・屋外展示案内
8月5日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・展示交流員体験 	<ul style="list-style-type: none"> ・展示交流員体験
8月6日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者アンケート調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・来館者アンケート調査のまとめ
8月7日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・交流活動の概要 	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館の情報システム ・博物館の画像資料 ・図書資料について
8月8日(金)	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカバリーボックス製作 	<ul style="list-style-type: none"> ・ディスカバリーボックス製作発表 ・修了式

参 加 者 内 訳

所 属	人 数	所 属	人 数
京 都 外 国 語 大 学	2	大 阪 女 子 大 学	1
東 京 農 業 大 学	1	追 手 門 学 院 大 学	1
大 阪 芸 術 大 学	1	龍 谷 大 学	1
京 都 府 立 大 学	2	九 州 東 海 大 学	1
成 安 造 形 大 学	5	滋 賀 県 立 大 学	4
京 都 精 華 大 学	1	帯 広 畜 産 大 学	1
京 都 教 育 大 学	2	京 都 橘 女 子 大 学	6
京 都 文 教 大 学	1		
合 計			30

6. 来館者との交流会

来館者の多い夏休み期間の8月は月曜日を休まず開館し、特別企画として「夏のひとときを楽しもう」をテーマに月曜体験コンサートや以下の事業を企画・実施した。また、3月にはギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」の関連事業として「春休み花のコンサート」を実施した。

1) 月曜体験コンサート

日 時：8月の毎週月曜日 午後2時より

会 場：アトリウム

① 8月4日(月)

「マリンバコンサート」 出演：宮本妥子、西岡まり子

② 8月11日(月)

「アトリウムコンサート～コントラバスの魅力」 出演：廣嶋嘉人、内田奈津子

③ 8月18日(月)

「ブラスアンサンブルの楽しみ」 出演：おくらしっくブラスアンサンブル

④ 8月25日(月)

「女声ヴォーカルアンサンブルコンサート」

出演：山本久代、太田智子、西あかね、神永強正

2) ビデオ上映とミニ解説ツアー

日 時：夏休み期間中毎週土・日曜日 午後1時30分より

会 場：ホール

内 容：「よみがえれ日本の淡水魚！魚たちにせまる危機」、「技の年輪 琵琶湖最後の帆走木造船・丸子船復元」ほか、日替りで実施

3) 水族飼育員と話そう

日 時：8月の毎週月曜日 午後1時30分より

会 場：水族展示コーナー

内 容：水族飼育員による魚、カイツブリ等への餌やり実演と楽しいお話

4) 春休み花のコンサート

日 時：3月27日(土) 午後1時からおよび午後3時から

会 場：アトリウム

内 容：草花や自然をテーマにした曲の演奏

出 演：アンサンブル ヴィーヴォ

3 情報活動

琵琶湖博物館は、コンピュータ技術を活用し、情報拠点として機能できる基本情報システムの完成をめざしている。来館者向け閲覧用図書や映像情報のデジタル化と研究支援を図り、地図情報や文字情報とを合わせての検索や利用ができるよう努めた。また、通信網を通じて博物館利用者や類似施設とのネットワーク化を進めた。

(1) 館内の情報センター(図書室・情報利用室)

図書室と情報利用室を来館者が自由に利用できるように整備している。両室は隣接させて互いに往来できるように設置し、かつ利用案内カウンターを共通にし、更に学芸職員による質問コーナー（ページ参照）を設け利用者の有機的な学習の場としている。

1) 図書室

単行本約9,000冊、および雑誌約72タイトルを開架式で閲覧できるようにしている。なお来館者の要望に応じて、閉架式資料も利用できるようにしている。また、コピーサービスを行い、利用の便宜を図っている。

2) 情報利用室

情報端末を利用者自身が操作することにより、常設展示室の体験ソフトのほか、約200タイトル以上のビデオライブラリーや博物館の案内を利用できるようにした。なおシステムは、動画情報、静止画情報、地図情報、文字情報と多種にわたる情報をデジタル化して一元的管理を行うことにより、利用者の側からは、メディアの違いをこえて、同一端末、同一画面からの検索や利用が可能となるようなシステムになっている。

(2) 通信網を利用した館外サービス

来館者や遠隔地の人からの情報の受信や、博物館からの発信、つまり双方向の情報交換を充実するために、次の3つのシステムを運用している。

1) ファックス・サービス

各家庭のファックスから電話回線で接続して操作することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報を受信することができる。2003年度のアクセス件数は下表のとおりであった。

ファックス情報提供サービスへのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
総アクセス数	40	25	13	44	37	2	21	10	0	6	4	16	218
目次アクセス数	11	7	6	18	17	1	8	4	0	2	1	6	81

総アクセス数：サーバから情報が取り出された件数

目次アクセス数：「総アクセス数」のうち、目次ページへのアクセス件数（通常、目次ページで目的とする情報

2) www (いわゆる「ホームページ」)

インターネットを經由して博物館のページに接続することにより、展示案内・行事案内・交通案内などの情報を受信したり、博物館資料の検索を行ったりすることができる。また、インターネット・メールで専門的な内容についての質問を受け付けている。2003年度のアクセス件数は下表のとおりであった。

インターネットページ（静的サーバ）へのアクセス件数

	総 ヒ ッ ト 数	ページヒット数	連続アクセス	表紙アクセス	表紙開始アクセス
4月	794,372	239,192	27,254	9,584	7,383
5月	1,046,937	309,038	35,153	11,098	8,354
6月	1,100,668	283,298	37,458	11,476	8,407
7月	1,245,573	364,046	41,821	13,237	10,053
8月	1,285,747	369,857	35,505	13,531	10,422
9月	947,588	279,098	33,811	11,058	8,372
10月	1,040,140	303,229	35,720	10,632	7,932
11月	827,825	242,040	33,729	9,616	7,195
12月	632,832	197,559	29,180	7,846	5,874
1月	884,286	265,210	37,247	9,457	6,877
2月	1,007,856	305,005	36,684	9,901	7,190
3月	847,192	260,314	34,570	9,961	7,551
計	11,661,016	3,417,886	418,132	127,397	95,610

総 ヒ ッ ト 数：サーバに対する全ての種類のデータ要求の総数（但し、博物館内部からの要求は除外）各ページの定義ファイルはもちろん、ページを構成する画像ファイルの要求も含まれる

ページヒット数：「総ヒット数」のうち、各ページの定義ファイルに対する要求の件数

連続アクセス：同一利用者が概ね1時間以内に再度アクセスしたと思われるものは合わせて1件と数えた場合のアクセス件数（博物館内部からのアクセスは除外）

表紙アクセス：「連続アクセス」のうち、ウェルカムページ（表紙ページ）を經由したアクセスの件数（「表紙から入った」と「表紙へ戻った」との合計）

表紙開始アクセス：「表紙アクセス」のうち、最初にウェルカムページにアクセスした件数

※「エリアキャッシュ」を利用して利用者側の組織内で情報を再使用している場合は、合わせて1件しか計数されない。

インターネットページ（動的サーバ）へのアクセス件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
セッション数	256	293	364	326	269	222	246	236	192	315	233	619	3,571
絞込検索回数	475	366	458	554	372	302	364	446	272	509	266	2,091	6,475
データ閲覧件数	1,745	3,186	1,968	1,880	2,699	1,922	2,935	1,944	2,846	4,648	1,745	9,865	37,383

セッション：サーバ側が絞込検索を実現するために認識している「同一ユーザによる連続した」アクセスの集合

※博物館内部からのアクセスは計数していない。

[インターネットページで案内している宛先へのメール受付状況]

全部で358通のメールがあり、情報センターの担当者またはメール内容に応じた学芸職員が回答した。メールの内容は以下のようなものであった。

内 容	件 数
専門的内容を含む質問など	192
施設利用・行事についての問い合わせ	17
リンク許可依頼・サイト登録依頼など	25
館に関する情報提供や連絡など	23
館の運営についての意見・感想・問い合わせ	9
印刷物・出版物についての問い合わせ	19
学習・視察・調査・撮影などの依頼や問い合わせ	17
職員個人あてのメール	4
画像使用の許可依頼など	23
採用・進路相談についての問い合わせ	18
資料の提供・借用、交換、寄贈などの問い合わせ	8
忘れ物の問い合わせ	3
合 計	358

* 膨大な数の広告メール、ウィルスメールは除外した。

* 一つの質問で継続したやりとりがある場合、原則1件と数えた。

(3) 電子交流システム (LBMNET)

各家庭のパソコンを博物館のシステムに接続することにより、博物館への質問や身のまわりのできごとに関する報告を書き込んだり、他の参加者の質問などに対応して議論したりすることができる。1999年より旧来型のパソコン通信からインターネットを経由して接続できるシステムへと移行した。

(4) 情報システムの更新

本年度は、前年度にネットワーク中枢部分の全面更新を行ったこともあり、端末機器の一部を更新したのみであり、サーバソフトウェアの追加開発も無かった。

(5) 収藏品データベースの整備および公開

琵琶湖博物館では、地質標本（化石、岩石・鉱物、堆積物、プレパラート）、生物標本（植物さく葉、魚類、貝類、昆虫液浸、昆虫乾燥）、画像、図書、逐次刊行物、文献、歴史資料、民俗資料などのデータベースを整備し、資料情報を整理・保管するとともに、その情報を利用者に提供してきた。

2003年度にはこのうち、未公開だった化石、岩石・鉱物、堆積物、プレパラート、植物さく葉、貝類、昆虫液浸、昆虫乾燥、逐次刊行物、文献の10件のデータベースについて公開のための準備を完了した。また、これらと操作上の統一性を保つため、魚類、画像、図書の3件の既公開データベースについても新システムへのデータ移行を行った。なお、公開準備を完了したデータベースについては、2004年度に入って5月に公開を実施した。資料データベースとは別に、気象観測データや電子図鑑（魚類・トンボ・外来生物）をインターネット上で公開しているが、このうち電子図鑑の部分に新しい分野として「珪藻」を追加する準備のため、その試作版を2004年3月に担当学芸職員の個人管理コンテンツとして公開した。

(6) 画像情報システムの整備

実物資料の収集整理と並んで、写真や動画そのものを収蔵資料として扱い、収集整備に力を入れている。収蔵資料の写真や標本採集地点の写真、琵琶湖や環境、生活文化の変遷などを伝える古い写真の収集、入力、管理を行った。これまでに、滋賀県在住の故前野隆資氏の写真を中心とした「昭和写真史」の整備を行い、「災害写真、写真でみる生活史」として一部インターネットで公開している。さらに、これまでの昭和写真史に少なかった湖西・湖北地域の古い写真を今津町教育委員会に協力いただいで整備を行っている。また、水環境の変遷に関する写真は、撮影場所(地図)、写真と文字情報をセットで管理するシステムを開発し「水環境カルテ」としてインターネットで公開した。

(7) 映像資料の貸出

静止画（写真）資料については、教育・文化・報道・広報目的の利用について、その貸出を行っている。2003年4月1日～2004年3月31日までの利用状況は、71件で内訳は下表のとおりであった。

承認日付	貸出先	内容・点数	用途	備考
4月2日	京都府企画環境部 環境企画課	魚類16点	小学生向き環境啓発冊子「環境まなぶっく」2003年版作成のため	転載
4月2日	山東町立西小学校	魚類・甲殻類39点	総合学習の資料作成のため	デジタルデータ
4月4日	竹市直彦	トトラボートの写真 1点	大覚寺の嵯峨御流華道総司所が発刊している教材に掲載	デジタルデータ
4月11日	サンライズ出版	前野コレクション 2点	『淡海文庫27 聞き書き里山に生きる』に掲載	紙焼き
4月22日	長浜み～な編集室	魚類9点	地域情報紙における琵琶湖の魚の紹介記事に掲載する	デジタルデータ
4月18日	B&G財団	前野コレクション (寄託資料) 2点	財団事業広報用（ちらし、ポスター）に使用	デジタルデータ

4月24日	株式会社エム・シー・アンド・ピー	魚類1点	水のみぐみ館 アクア琵琶発行「ビワズ通信」へ掲載のため	デジタルデータ
4月24日	滋賀県琵琶湖環境部自然保護課	魚類5点	湖岸緑地新旭浜園地における環境学習看板への掲載	デジタルデータ
4月30日	大塚真史	魚類写真1点	日本テレビ系列放送「爆笑問題のスヌメ」(月) 24:28~24:58 5/12放送分	デジタルデータ (Webページより取得)
5月7日	B&G財団	前野コレクション 2点	財団事業広報用(ちらし、ポスター)に使用	デジタルデータ (Webページより取得)
5月13日	湖南地域振興局環境農政部	前野コレクション(寄託資料)1点	守山市赤野井町内に設置する案内版に掲載するため	デジタルデータ
5月20日	滋賀県政策調整部広報課	琵琶湖博物館オリジナルポスター図案 1点	広報課において作成する小学生向け冊子「わたしたちの滋賀県」(平成15年版)への掲載	デジタルデータ
5月25日	滋賀県湖北地域振興局田園整備課	魚類1点	県主催シンポジウムの募集チラシに使用	デジタルデータ
5月25日	古谷桂信	グアテマラ「カディトラン湖」写真33点	精神障害者厚生施設「しそろ自立の家」オープンデイ(5/31)展示に使用	パネル(著作権者による使用)
5月28日	滋賀の食事文化研究会	魚類・甲殻類・漁業 4点	湖魚の伝統文化を紹介する書籍の挿入写真に使用	デジタルデータ
5月30日	テレコムスタッフ株式会社	魚類4点	テレビ番組「晴れたらイイねっ!」(フジテレビ)において使用	デジタルデータ
5月30日	滋賀県琵琶湖環境部水政課	魚類1点	生態学琵琶湖賞受賞式典参加者募集のためのチラシへの掲載	デジタルデータ
6月5日	大津市福祉事務所生活福祉課	魚類6点	生活保護世帯・民生委員に配布する広報誌「四季」表紙への掲載(年4回発行(7/1、10/1、1/1、4/1))	デジタルデータ
6月10日	株式会社ウィザード	魚類3点	テレビ番組「KSBスーパーJチャンネル」内にてアユモドキの生態を紹介する資料として使用	デジタルデータ
6月11日	NHK富山放送局	フナズシ写真1点	NHK富山「とやま夢・航海」番組内でナレズシの代表的なものとして写真で紹介 6/11放送	デジタルデータ (Webページより取得)
6月13日	財団法人千歳青少年教育財団	バイカル湖魚類・風景など22点	夏休み企画展「ロシア展」に使用するため	デジタルデータ

6月13日	滋賀民報社	丸子船資料写真3点	出版物への掲載	紙焼き
6月16日	財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構	イラスト・魚類写真など	作成パンフレット「琵琶湖の総合的な保全の推進」のHP掲載	転載
6月16日	(株)カルチャープロ	アケボノゾウ復元図	ベネッセコーポレーション「チャレンジ6年生9月号」で使用	ポジフィルム
6月20日	滋賀県漁業協同組合連合会流通改善部	魚類など10点	「琵琶湖産魚貝類の栄養と料理」テキストに使用	デジタルデータ
7月10日	財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構	魚類4点	財団発行「ジュニアリバーズスクール」テキストに使用	デジタルデータ
7月15日	町のオアシス	魚類21点	びわこの「魚のフィギア」展示の参考資料として	パウチ資料(環境学習用呈示資料)
7月15日	琵琶湖環境部エコライフ推進課	琵琶湖博物館パンフレット、ポスター図案、イラスト3点	子ども環境会議2003ガイドブック作成	紙焼き
7月18日	玉名市立歴史博物館こころピア	飼育室映像1点	シビンチャ展(玉名市を流れる菊池川とその水系の淡水魚を紹介展示)で使用	デジタルムービー
7月18日	琵琶湖環境部自然保護課	魚類12点	琵琶湖ルール小学生向け啓発冊子作成のため	転載
7月18日	琵琶湖環境部自然保護課	丸子舟2点	琵琶湖ルール小学生向け啓発冊子作成のため	紙焼き
7月19日	NPO蒲生野考現倶楽部	魚類16点	青少年に対する佐久良川・日野川の環境学習(説明資料)	パウチ資料(環境学習用呈示資料)
8月11日	滋賀大学附属中学校	魚類3点	校内学習「情報統計グラフの資料」として添付使用	デジタルデータ
8月11日	産経新聞社東京本社文化部生活班	魚類1点	産経新聞 河口湖オオクチバス漁業免許切り替え 記事に使用	デジタルデータ
8月21日	朝日新聞週刊情報誌	魚類1点	「あいあいAI滋賀」に掲載	デジタルデータ
9月1日	京都市青少年科学センター	魚類13点	京都市青少年科学センター常設展示「鴨川のいきもの」に使用	デジタルデータ
9月8日	湖北地域振興局長浜建設管理部	植物プランクトン2点	長浜港補助港湾環境整備事業の説明パンフレットに使用するため	デジタルデータ

9月11日	滋賀県総合教育センター	鳥類・魚類など10点	環境教育副読本「あおい琵琶湖」(中学校)作成のため	デジタルデータ
9月16日	川那部浩哉	魚類5点	三方町縄文博物館 第4回縄文講座(H.14.12.21)の講演記録に挿入する写真として使用	デジタルデータ
9月16日	旬竹内デザイン事務所	トンボ類(寄託資料)14点	「びわ湖を守る水環境保全県民運動」県連絡会議(びわ湖会議)機関紙「H20」に使用	デジタルデータ
10月1日	株式会社読売ライフ	魚類4点	読売ライフ2003年12月号「湖都いきもの歩記」掲載用	デジタルデータ
10月3日	滋賀県農政水産部環境こだわり農業課	うみっこ写真2点	滋賀の食文化(フナズシ)パネルの作成のため(小浜市で開催される「若狭路博2003」で展示)	デジタルデータ
10月21日	(株)エム・シー・アンド・ピー	トンボ類(寄託資料)1点、前野コレクション(寄託資料)1点	水のめぐみ館「アクア琵琶」発行「ビワズ通信」2003年秋号に掲載	デジタルデータ
10月23日	滋賀大学教育学部理科教育研究室	魚類15点	卒業論文内で資料として掲載、論文発表時に映写・ポスター掲示	デジタルデータ
10月28日	紀南河川国道事務所調査課	魚類1点	熊野川流域委員会資料としてWeb掲載	デジタルデータ(Webページより取得)
10月28日	群馬県立自然史博物館	魚類1点	群馬県立自然史博物館で行う移動博物館の中に展示する	デジタルデータ
10月28日	株式会社昭和堂	魚類9点	生き物文化誌学会誌「ピオストーリー」創刊準備号に掲載	デジタルデータ
10月28日	嘉田由紀子	前野コレクション(寄託資料)1点	日本河川協会『河川』2003年7月号に掲載のため	紙焼き
10月29日	スポニチ写真部	魚類1点	宮城県での同魚盗難事件の報道のため	デジタルデータ(Webページより取得)
11月1日	大津市立瀬田北中学校	前野コレクション3点	県発行の環境読本「あおい琵琶湖」に掲載	デジタルデータ
11月7日	国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所調査課	魚類4点	瀬田川広報誌「SETA NAVI」に掲載	デジタルデータ

11月25日	滋賀県学校教育課	琵琶湖博物館展示ガイド、HP電子図鑑、仮想見学より24点	滋賀県環境教育副読本「あおい琵琶湖」中学校版に掲載のため	デジタルデータ
11月27日	滋賀県自然保護課	魚類5点	ヨシ条例関連パンフレットに掲載のため	デジタルデータ
12月4日	株式会社マルチクリエイティブ	アオコ写真1点	東京書籍株式会社発行「中学社会（公民）教科書」に掲載のため	デジタルデータ
12月4日	八尋克郎	トンボ類（寄託資料）1点	『滋賀県の経済と社会』に掲載原稿	デジタルデータ
12月12日	国土交通省近畿地方整備局琵琶湖河川事務所水質調査課	魚類51点	水のめぐみ館 アクア琵琶湖流模型 常設展示映像の素材として使用	デジタルデータ
12月18日	滋賀県広報課	魚類2点	滋賀県ホームページのコンテンツ（民謡でたどる滋賀の風景）作成に使用	デジタルデータ
12月19日	滋賀県学校教育課	昆虫2点	滋賀県環境教育副読本「あおい琵琶湖」に使用	デジタルデータ
12月23日	有限会社くらむぼん出版	魚類2点	中学受験情報誌「閑塾タイムス」にて琵琶湖の紹介記事として使用	デジタルデータ
12月26日	（財）河川情報センター広報事業部	琵琶湖博物館外観写真1点	「PORTAL」1・2月号に掲載のため	デジタルデータ
12月26日	ワック株式会社	アオコ写真3点	東京メトロポリタンテレビジョン「ガリレオチャンネル」番組資料として	デジタルデータ
1月7日	（財）琵琶湖・淀川水質保全機構	前野コレクション（寄託資料）1点、中島コレクション（寄託資料）1点	（財）琵琶湖・淀川水質保全機構記念シンポジウム記録集に収録	デジタルデータ
1月11日	（財）千葉青少年教育財団	寄生虫写真4点	企画展示「寄生虫博覧会（仮称）」に使用のため	VHSダビングテープならびにデジタルデータ
1月22日	（株）エム・シー・アンド・ピー	鳥類1点	水のめぐみ館「アクア琵琶湖」発行「ビズ通信」冬号への掲載	デジタルデータ
1月26日	滋賀県 水政課	魚類2点、ポスター図案1点	冊子「滋賀の環境」の作成のため	転載
1月26日	京都府企画環境部環境企画課環境企画課	魚類16点	小学生向き環境啓発冊子「環境まなぶっく」（2004）作成のため	転載

2月12日	岡山県企画振興部 統計管理課	魚類1点	岡山県企画振興部統計管理課 ホームページ内統計クイズの ページへの掲載	デジタルデータ (Webより取得)
2月17日	嘉田由紀子	前野・古谷コレクショ ン(寄託資料)	環境共生住宅推進協議会、講 演会用チラシに使用のため	デジタルデータ
2月17日	京都新聞滋賀本社 編集部	魚類45点	新聞での琵琶湖の魚の紹介 (執筆は琵琶湖博物館学芸員)	デジタルデータ
2月18日	滋賀県金融広報委 員会	ポスター図案1点	広報活動(学校、講演会配布 用クリアファイルの作成)	デジタルデータ
2月18日	株式会社 昭和堂	魚類1点	民俗自然誌研究会会誌「エコ ソフィア」13号への掲載	デジタルデータ
3月5日	朝日新聞東京本社 出版本部 事典編 集部「朝日学習年 鑑」	魚類1点、貝類1点	「朝日学習年鑑」2004年版の 環境のページで外来種の説明 に使用	デジタルデータ
3月31日	湖北地域振興局木 之本建設管理部	魚類4点	河川整備計画に係る読本(解 説書)、パンフレット作成の ため	デジタルデータ
3月31日	テレビ東京	企画展「湖の魚・漁・ 食」資料VTR	テレビ番組内にてフナズシ作 りの説明VTRとして使用	VHSテーブ ー

(8) 資料整備

情報活動との関連が特に密接な図書・文献資料および映像資料について、下表のとおり整備した。
なお、動画資料の資料数が急増したのは、これまで仮保管していた資料の整理を緊急雇用対策事業の
一環として行った成果を反映したものである。

図 書

(単位：冊)

区 分	2003年度実績	累 積 数
購 入 図 書	847	20,661
図書データベース登録数	3,118	46,709

* 寄贈提供図書受入数 1,379 (2003年度実施)

文 献

(単位：件)

区 分	2003年度実績	合 計
文献データベース登録数	2,791	29,793

雑 誌

(単位：件)

区 分	2003年度実績	合 計
国内の機関が発行する雑誌	1,251	1,632
国外の機関が発行する雑誌	381	

映像資料

(単位：点)

区 分	2002年度までの合計	2003年度実績	合 計
動 画 資 料	1,821	25	1,846
静 止 画 資 料	71,962	3,804	75,766
(合 計)	73,783	3,829	77,612
デジタル化点数	70,722	3,820	74,542

4 資料整備活動

琵琶湖博物館で資料整備の対象としているのは、「琵琶湖とその集水域および淀川流域」およびその全体的評価にかかわるもの、ならびに博物館のテーマ「湖と人間」に関係する日本、アジア、世界の湖沼とその周辺地域におよぶものである。自然、人文、社会科学等にかかわる過去から現在までの実物の資料、生魚などの水族資料、映像資料、図書資料および博物館業務に必要な資料について収集・整理・保管および利用を図り、博物館活動の充実につとめている。

収集は、博物館職員による採集、受贈、受託、交換、購入、製作、提供、参加型調査等によって行われ、収蔵資料は必要なときに速やかに利用できるよう、各資料区分ごとの体系にしたがって整理し、長期間にわたり安全で良好な状態に保てるよう保管している。さらに収蔵資料は、保存に影響を与えない範囲で、展示、閲覧および貸出等に利用している。

以下に2003年度の資料整備について項目ごとにまとめる（映像資料、図書資料は除く）。

(1) 収蔵資料

2003年度末現在の収蔵資料数を資料分野ごとに示す。

登録資料数とは、琵琶湖博物館情報システムの資料データベースに登録されているものの総数をいい、収蔵概数とはさまざまな段階の未整理資料の概数である。

【地学】

1) 地学標本

	登録資料数(点)	収蔵概数(点)	2003年度整理・公開内容
化石	16,768	20,340	103件を登録
岩石・鉱物	4,993	5,433	941件を登録
堆積物	163	600	本年度の登録なし
プレパラート	194	400	本年度の登録なし
小計	22,118	26,773	

【植物】

1) 植物標本

植物収蔵庫				
資料分類	内 訳	登録資料数(点)	収蔵概数(点)	2003年度整理・公開内容
さく葉標本	桑島正二標本	19,892	19,950	・標本配架 14,201点 ・登録件数 1,303点
	村瀬忠義標本	48,751	85,000	

	橋本忠太郎標本	0	30,000	<ul style="list-style-type: none"> 資料目録10号「植物標本3 村瀬忠義植物標本目録」刊行 ギャラリー展示第2回博物館資料展「滋賀の植物標本・写真展－村瀬忠義植物コレクション－」開催
	北川良也標本	1,287	1,287	
	建部俊夫標本	1,496	1,496	
	谷元峰男標本	0	5,400	
	西田謙二標本	0	5,000	
	その他	816	1,650	
菌類			108	
木材			7 (箱)	
その他	レプリカ・トラ等			
小計		72,242	149,898	

【動物】

1) 動物標本（液浸標本を除く）

動物収蔵庫				
資料分類	内 訳	登録資料数 (点)	収蔵概数 (点)	2003年度整理・公開内容
昆虫乾燥標本		21,192	97,984	標本作製2882点、村山修一蝶類コレクションの整理、データベースの公開準備
鳥類：乾燥標本	鳥類本剥製、鳥類仮剥製、その他鳥類乾燥標本	0	224 (本剥製92、仮剥製132)	<ul style="list-style-type: none"> 本剥製標本製作9点 仮剥製標本製作49点
鳥類：巣	鳥類の巣	0	4	
骨格標本		0	168	
貝類		0	11,279	
魚類樹脂包埋		0	10	
小計		21,192	109,669	

2) 液浸標本

液浸収蔵庫 1				
資料分類	内 訳	登録資料数 (点)	収蔵概数 (点)	2003年度整理・公開内容
水生昆虫	内田臣一氏寄託標本 10,000本 (カワゲラ目など、うち模式標本 59本)	9,528	28,700	2003年度登録1,654件。Web公開に伴うDB改良95%完成。

	<p>河野光子氏寄贈標本 2,000本 (うち模式標本16本)</p> <p>川合禎次氏寄贈標本 1,000本 (うち模式標本57本)</p> <p>清水高男氏寄託標本 1,000本 (カワゲラ目など、うち模式標本 72本)</p> <p>谷田一三氏提供標本 2,000本 (トビケラ目など)</p> <p>吉田雅澄氏寄贈標本 500本 (トンボ目など)</p> <p>(助)滋賀県環境事業公社寄贈標本 800本</p> <p>その他の寄贈、寄託、提供、採集標本 11,400本 (うち模式標本 5本)</p>			<p>ソーティング (小分け・粗同定)、同定、データラベル添付および修正、収納整理作業1,209本。</p> <p>参照標本作成78本。</p> <p>アルコール液点検・補充 28,700本。</p>
魚類標本	<p>魚類乾燥骨格標本 2,310</p> <p>魚類DNA分析用標本 2,121</p>	4,431	4,431	咽頭歯標本の作成、登録、計測325件 (主に日本のコイ科魚類咽頭歯) 登録186件
微小生物		4,507	約7,000	<ul style="list-style-type: none"> 約500件の標本を受け入れ、約500件の珪藻殻洗浄資料を作成した (未登録) 静止画4,277カット (未登録)
プレパラート	珪藻プレパラート	944	約2,000	約500枚のプレパラートを作成した (未登録)
無脊椎動物	昆虫と貝類以外の無脊椎動物 (甲殻類、寄生虫など) (プレパラートを含む)	0	4,771 (2002年度以前の4,333点 + 2003年度の438点)	<ul style="list-style-type: none"> 受入標本29件438点: うち鉤頭虫の新種のタイプ標本 同定済み液浸標本491点: うち甲殻類大型鰓脚類338点、ダニ27点、鉤頭虫77点、他の寄生虫28点 プレパラート作成44点: うちダニ23点、寄生虫21点 仮データ入力411点: うち甲殻類大型鰓脚類317点、寄生虫94点

貝類	寄贈・収集標本など	9,435	約12,000	ソーティング（小分け・粗同定）約1,600点、データラベル添付および修正1,759点、仮データ入力1,048件、アルコール液点検・補充約11,000本、Web公開に伴うDB改良
植物	球果、種子、葉の化石など	0	900	伊吹山麓堆積物から産出した大型植物化石
両生・爬虫類	寄贈・収集標本など	0	150	昨年より変化なし
土壌等調査資料		0	500	昨年より変化なし
小計		28,845	60,452	

液浸収蔵庫 2

資料分類	内 訳	登録資料数 (点)	収蔵概数 (点)	2003年度整理・ 公開内容
魚類標本	魚類通常液浸標本	37,049	66,436	寄贈標本・受け入れ標本の同定、ラベル添付、配架、登録1167件。アルコール液点検、補充、ホルマリンよりの置換1350件

【歴史】

1) 考古資料

考古収蔵庫

	登録資料数	収蔵概数	2003年度整理・公開内容
粟津湖底遺跡 松原内湖遺跡 中畑遺跡 唐橋遺跡 葛籠尾湖底遺跡 丸木舟 灯籠 瓦 粟津貝塚剥ぎ取り	0	1箱 1151箱、他181点 2箱、他82点 148箱、石14点、他43点 11箱 5隻 3点 22箱 6枚	ギャラリー展示「楽石注意！」 展示公開 約100点
ガリラヤ湖関係	0	3箱	

B展示関係	0	8箱	
小 計	0	1,680	

2) 民俗資料

民俗収蔵庫 1

	登録資料数	収蔵概数	2003年度整理・公開内容
内生活生業用具 (漁撈用具を除く)	2803件 4381点 (IHDBによる)	4173件	<ul style="list-style-type: none"> 資料写真撮影20点 登録民具データ整理6000点

民俗収蔵庫 2

	登録資料数	収蔵概数	2003年度整理・公開内容
県内漁撈用具(船 関係用具を含む) 木造船模型	1167件 2133点 (IHDBによる) 0 (収蔵台帳は 作成済)	1830件 22点	<ul style="list-style-type: none"> 資料写真撮影1200点・実測図作成100点
体験学習用漁具 中国・韓国漁具		20点 9件	
小 計	2,133 (点)	1,881 (件)	

3) 歴史資料

	登録資料数(点)	収蔵概数(件)	2003年度整理・公開内容
古文書・絵図・絵画等 寄贈・提供・移管 購入	0 0	6 140	
小 計	0	146	

【環境】

1) 環境資料

環境収蔵庫

資料分類	内 訳	登録資料数(点)	収蔵概数(件)	2003年度整理・公開内容
水環境調査資料	海外		44	
	世界の水利用		23	
	C展示関連		5	
体験学習用民具	本庄地区		96	体験・展示利用あり
	本庄地区以外		64	
	酒井神社		288	

	その他 漁網		129 22 (箱)	
展示用生活用具	C展示関連 30年史		15 10	
展示用製作物	魚類レプリカ 料理レプリカ フナズシ製作 トロバコ ジャンボタツベ		12 (箱) 11 (箱) 4 20 1	体験・展示利用あり
	海外の湖沼の船		4	
小 計			748	

【水族資料】

	登録資料数 (点)	収蔵概数 (点)
水族資料 (生体)	0	21,104

【収蔵資料まとめ】

	登録資料数	収蔵概数
地 学	22,118	26,773
植 物	72,242	149,898
動 物		
(内訳) 乾燥標本	21,192	109,669
(内訳) 液浸標本	65,894	126,888
歴 史		
(内訳) 考古資料	0	1,680
(内訳) 民俗資料	6,514 (点)	6,054 (件)
(内訳) 歴史資料	0	146
環 境	0	748
水 族	0	21,104
合 計	187,960	442,960

※民俗資料については、単位の違いにより (登録資料数) > (収蔵概数) となる。

(2) 新規収集資料

2003年度には以下のとおり資料収集が行われた。

1) 採集資料

館員や研究プロジェクト、フィールドレポーター、はしかけ制度による収集。

- 【地学】・岩石 100点 里口保文
- 【動物】・昆虫液浸標本 90本 榭永一宏
- ・昆虫液浸標本 143本 上原千春
- ・昆虫液浸標本 18本 佐々木 剛
- ・昆虫液浸標本 37本 西垣 亨・秋山廣光
- ・寄生虫プレパラート標本 1点 Omar M. Amin
- ・甲殻類液浸標本 320点 「田んぼの生き物調査」の「はしかけ」グループとマーク・
ジョセフ・グライガーおよび井田三良
- ・他の無脊椎動物の液浸・プレパラート標本 34点 安川浩史
- ・寄生虫プレパラート標本 1点 中島経夫
- ・寄生虫液浸・プレパラート標本 4点 マーク・ジョセフ・グライガー
- ・寄生虫プレパラート標本 1点 マーク・ジョセフ・グライガー
- ・寄生虫プレパラート標本 1点 関 慎太郎
- ・貝類液浸標本 3点 井戸本純一
- ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 141点 松田征也
- ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 57点 松田征也・大谷.J. ウィリアム
石田未基・金尾滋史
- ・貝類液浸標本 51点 中井克樹
- ・貝類液浸標本 2点 芳賀裕樹
- ・貝類液浸標本 5点 前畑政善
- ・貝類液浸・乾燥・冷凍標本 3点 楠岡 泰
- ・貝類液浸標本 2点 益田芳樹・中井克樹
- ・貝類液浸標本（一部乾燥） 5点 松田征也
- ・貝類乾燥標本 2点 井戸本純一
- ・貝類乾燥標本 13点 松田征也
- ・貝類液浸標本（一部冷凍） 5点 松田征也・柴山弘史
- ・貝類液浸標本（一部乾燥） 4点 松田征也
- ・貝類液浸標本（一部冷凍） 6点 松田征也
- ・昆虫乾燥標本 1点 青木伸子
- ・昆虫乾燥標本 440点 佐々木 剛
- ・昆虫乾燥標本 267点 石田未基
- ・昆虫乾燥標本 13点 上原千春

- ・昆虫乾燥標本 14点 上原千春、佐々木 剛
- ・昆虫乾燥標本 60点 八尋克郎

(2002年度追補)

- ・昆虫乾燥標本 304点 山口幸江
- ・昆虫乾燥標本 15点 中井克樹
- ・昆虫乾燥標本 396点 八尋克郎
- ・昆虫乾燥標本 1点 桑垣 瑞
- ・昆虫乾燥標本 27点 榊 永一宏
- ・昆虫乾燥標本 2点 マーク・J・グライガー
- ・昆虫乾燥標本 3点 楠岡 泰
- ・昆虫乾燥標本 1点 秋山廣光
- ・昆虫乾燥標本 25点 西沢 崇
- ・昆虫乾燥標本 1点 里口保文

- 【植物】・植物さく葉標本 153点 石田未基
- ・植物乾燥標本 1点 石田未基

(2002年度追補)

- ・植物さく葉標本 147点 桑垣 瑞
- ・冷凍乾燥 1点 楠岡 泰

2) 寄贈資料

- 【地学】・現世ゾウ足型模型 2点 宝塚動植物園
- ・クジラ頭骨 1式 宝塚動植物園
- ・古生物復元模型 15点 宝塚動植物園
- 【動物】・日本産・外国産蝶類標本 412点 桐村信行
- ・日本産セミ類標本 1点 桐村信行
- ・外国産クワガタ標本 4点 桐村信行
- ・エゾジカ剥製 1点 山本まさゑ
- ・イタチ剥製 2点 山本まさゑ
- ・キタキツネ剥製 1点 山本まさゑ
- ・ミズダニプレバラー特標本 2点 松本典子
- ・イサザ液浸標本 60本 石田紀郎
- ・魚類液浸標本 1555点 柳原正男
- 【植物】・植物さく葉標本 9283点 村瀬忠義
- ・植物さく葉標本 10000点 渡辺定路
- ・水ガメ 1点 中正弘子

3) 提供資料

- 【地学】・化石 5点 加藤敬史
・岩石 2点 北林栄一
・岩石 5点 福井正男
・岩石 3点 杉野由佳
・岩石・鉱物 8点 中沢和雄
・鉱物 2点 中沢和雄
・鉱物 1点 中村豊美
・堆積物 1点 北林栄一
・現生 1点 石田志朗
・現生 1点 アンドリュー・ロシター
・現生 1点 野崎信宏
・アジアゾウ樹脂製足型(前後足) 2点 宝塚ファミリーランド
・現生 4点 岡村喜明
・現生 17点 亀田佳代子

(2002年度追補)

- ・岩石 2点 北林栄一
・堆積物 1点 北林栄一
- 【動物】・魚類液浸標本 88点 水族
・魚類液浸標本 3点 桑原雅之
・魚類液浸標本 71点 高橋鉄美
・魚類液浸標本 3点 高田昌彦
・魚類液浸標本 1点 金尾滋史
・魚類液浸標本 2点 秋山廣光
・魚類液浸標本 6点 前畑政善
・魚類液浸標本 1点 関 慎太郎
・魚類液浸標本 1点 武田 繁
・魚類液浸標本 2点 松田征也
・魚類液浸標本 162点 山本哲史
・魚類液浸標本 17瓶 山本哲史
・魚類液浸標本 1点 うおの会
・魚類液浸標本 412点 佐藤智之・山田康幸
・魚類液浸標本 1瓶 佐藤智之
・魚類液浸標本 140点 佐藤智之
・魚類液浸標本 2瓶 高田昌彦
・魚類液浸標本 70点 西日本コンサルタント

- ・魚類液浸標本 4点 関 慎太郎・安川浩史
- ・魚類液浸標本 高田昌彦
- ・魚類液浸標本 1点 岡田 隆・右川洋一
- ・魚類液浸標本 423点 大原健一
- ・魚類液浸標本 1点 マーク・ジョセフ・グライガー
- ・貝類液浸標本(一部冷凍・乾燥) 96点 石田未基
- ・貝類液浸標本(一部冷凍・乾燥) 53点 石田未基・大谷.J.ウィリアム
- ・貝類液浸標本(一部乾燥) 103点 石田未基
- ・貝類液浸標本 4点 水上二己夫
- ・貝類液浸標本 8点 大谷.J.ウィリアム
- ・貝類液浸標本(一部乾燥) 17点 石橋 亮
- ・貝類液浸標本(一部冷凍) 3点 増田 修
- ・貝類液浸標本 21点 志津小学校5年生
- ・貝類液浸標本(一部冷凍) 16点 石田未基・大谷.J.ウィリアム
- ・貝類液浸標本 51点 石田未基
- ・貝類液浸標本(一部冷凍) 86点 石田未基
- ・貝類乾燥標本 1点 魚の会
- ・貝類乾燥標本 4点 石田未基
- ・貝類液浸標本(一部冷凍) 6点 高橋
- ・貝類液浸標本 12点 志津小学校5年生
- ・貝類液浸標本(一部冷凍・乾燥) 10点 田中美貴
- ・貝類液浸標本(一部冷凍) 3点 上石富一
- ・貝類液浸標本 6点 秋山廣光
- ・貝類液浸標本 2点 金尾滋史
- ・貝類液浸標本 6点 関 慎太郎
- ・貝類液浸標本 2点 西森克浩
- ・貝類乾燥標本 1点 久野紫朗
- ・貝類乾燥標本 1点 松本和芳・河合敬紹
- ・貝類液浸標本 5点 金尾滋史
- ・貝類液浸標本 5点 西川興史
- ・貝類液浸標本 2点 上野武次
- ・貝類液浸標本 16点 佐藤智之・山田康幸
- ・貝類液浸標本 6点 佐藤智之
- ・貝類液浸標本 3点 荒井将人
- ・貝類液浸標本 9点 長田智生
- ・貝類液浸標本 1点 高橋貴行

- ・貝類液浸標本（一部冷凍） 9点 長田智生
- ・貝類液浸標本 10点 志津小学校
- ・貝類乾燥標本 1点 金尾滋文
- ・貝類液浸標本 6点 田中政之
- ・貝類液浸標本（一部冷凍・乾燥） 21点 出口武洋
- ・貝類液浸標本（一部乾燥） 30点 長田智生
- ・貝類液浸標本 5点 吉川慎一郎
- ・貝類乾燥標本 621点 池辺進一
- ・甲殻類液浸標本 6点 Stephen C. Weeks
- ・甲殻類液浸標本 1点 淀 真理
- ・甲殻類液浸標本 1点 マーク・ジョセフ・グライガー
- ・他の無脊椎動物の液浸標本 1点 中井克樹、出口武洋
- ・甲殻類液浸標本 4点 石田未基
- ・他の無脊椎動物の液浸標本 1点 関 慎太郎
- ・他の無脊椎動物のプレパラート標本 5点 川勝正治
- ・甲殻類液浸標本 1点 Shibahara-san
- ・甲殻類液浸標本 1点 鶴飼広之
- ・甲殻類液浸標本 2点 古谷愛子
- ・他の無脊椎動物の液浸標本 1点 有田重彦
- ・甲殻類液浸標本 1点 高山美子
- ・甲殻類液浸標本 12点 大八木 昭
- ・甲殻類液浸標本 1点 多影響者：大高昭史、採集者：市田忠夫
- ・甲殻類液浸標本 3点 宮崎一夫
- ・甲殻類液浸標本 1点 ShuPing Wu
- ・甲殻類液浸標本 2点 下村通誉
- ・他の無脊椎動物の液浸標本 1点 福田富美子
- ・昆虫乾燥標本 104点 中川 優
- ・昆虫乾燥標本 1点 門脇きみ子
- ・昆虫乾燥標本 13点 山口勇気
- ・昆虫乾燥標本 304点 矢野 健
- ・昆虫乾燥標本 3点 中西かよ子
- ・昆虫乾燥標本 1点 有田重彦
- ・昆虫乾燥標本 3点 南 博
- ・昆虫乾燥標本 1点 田中多恵子
- ・昆虫乾燥標本 13点 吉井 隆
- ・昆虫乾燥標本 1点 梶谷文崇

- ・昆虫乾燥標本 105点 武田 滋
- ・昆虫乾燥標本 1点 古谷清茂
- ・昆虫乾燥標本 1点 甲斐美弥子
- ・昆虫乾燥標本 110点 吉井 隆、八尋克郎
- ・昆虫乾燥標本 9点 桑原雅之
- ・昆虫乾燥標本 68点 細井正史
- ・昆虫乾燥標本 94点 遠藤真樹
- ・昆虫乾燥標本 1点 辻 美穂

(2002年度追補)

- ・鳥類本剥製 1点 森田孝一
- ・昆虫乾燥標本 6点 柴栄康雄
- ・昆虫乾燥標本 57点 石田未基
- ・昆虫乾燥標本 6点 箭野忠雄
- ・昆虫乾燥標本 796点 遠藤真樹
- ・昆虫乾燥標本 83点 桐村信行
- ・昆虫乾燥標本 141点 矢野 健
- ・昆虫乾燥標本 330点 藤本勝行
- ・昆虫乾燥標本 239点 佐々木 剛
- ・昆虫乾燥標本 117点 野原章宏
- ・昆虫乾燥標本 7点 上原千春
- ・昆虫乾燥標本 1点 中村光伸
- ・昆虫乾燥標本 16点 中川 優
- ・昆虫乾燥標本 4点 山口幸江
- ・昆虫乾燥標本 5点 坪井美智子
- ・昆虫乾燥標本 1点 中村かをる
- ・昆虫乾燥標本 2点 江本健一
- ・昆虫乾燥標本 6点 伴 康宏
- ・昆虫乾燥標本 1点 坪井美智子
- ・昆虫乾燥標本 3点 伊藤勇樹
- ・昆虫乾燥標本 1点 高橋鉄美
- ・昆虫乾燥標本 60点 博物館実習生
- ・昆虫乾燥標本 5点 山口勇樹
- ・昆虫乾燥標本 2点 加固啓英
- ・昆虫乾燥標本 1点 吉田雅澄
- ・昆虫乾燥標本 1点 後藤嘉治子
- ・昆虫乾燥標本 70点 中西かよ子

- ・昆虫乾燥標本 1点 山口賢太郎
- ・昆虫乾燥標本 72点 中島雅文
- ・昆虫乾燥標本 16点 氏家ちひろ
- ・昆虫乾燥標本 1点 ワイワイびおとーぶ
- ・昆虫乾燥標本 266点 保科英人
- ・昆虫乾燥標本 9点 桐村信行
- ・昆虫乾燥標本 32点 渡辺秀行
- ・寄生虫プレパラート 2点 嶋津 武

- 【植物】
- ・乾燥標本 10点 小原寿子
 - ・乾燥標本 1点 石田志朗

(2002年度追補)

- ・植物さく葉標本 1点 加 固 啓 英
- ・植物さく葉標本 7点 中川原正美
- ・乾燥標本 2点 小西寿子

- 【民俗】
- ・葉ない機 1式 木村 功
 - ・全自動粉摺り機および付属品 1式 市川義男
 - ・発動機 1点 市川義男
 - ・鴨猟の囀 1点 桑原正光

4) 購入資料

- 【地学】 岩石・鉱物 14点
- コロンビアマンモスの臼歯 1点
 - ケナガマンモスの臼歯 1点
- 【歴史】 花園院辰記20巻中1巻 1点

5) 水族繁殖生物

種 名	学 名	繁殖個体数
日本産魚類		
コイ科		
モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>	636
ウシモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila</i> sp.	138
シナイモツゴ	<i>Pseudorasbora pumila pumila</i>	108
タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	139
ミヤコタナゴ	<i>Tanakia tanago</i>	188
ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i>	39

スイゲンゼニタナゴ	<i>Rhodeus atremius suigensis</i>	190
カゼトゲタナゴ	<i>Rhodeus sinensis atremius</i>	152
ニッポンバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus kurumeus</i>	89
タナゴ	<i>Acheilognathus melanoguster</i>	90
アカヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira ssp.1</i>	133
シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i>	352
カネヒラ	<i>Acheilognathus rhombeus</i>	47
イタセンパラ	<i>Acheilognathus longipinnis</i>	13
ドジョウ科		
スジシマドジョウ大型種	<i>Cobitis sp. 1</i>	153
ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i>	3
ギギ科		
ネコギギ	<i>Pelteobagrus nudiceps</i>	76
メダカ科		
メダカ	<i>Oryzias latipes</i>	161
トゲウオ科		
ハリヨ	<i>Gasterosteus microcephalus</i>	115
ムサシトミヨ	<i>Pungitius sp.</i>	350
スズキ科		
オヤニラミ	<i>Coreoperca kawamebari</i>	16
外国産魚類		
コイ科		
ジャイアント・ダニオ	<i>Danio malabaricus</i>	110
ヘミククター・レウキスクルス	<i>Hemiculter leucisculus</i>	155
チャイニーズ・ワンライン・ペンシル	<i>Sarcocheilichthys parvus</i>	60
コウライハス	<i>Opsariüchthys uncirostris bidens</i>	193
トンキントゲタナゴ	<i>Acheilognathus tonkinensis</i>	32
オオタナゴ	<i>Acheilognathus macropterus</i>	215
ノーザンファットヘッドミノウ	<i>Pimephales promelas</i>	68
スズキ科		
ケツギョ	<i>Siniperca chuatsi</i>	18
カワスズメ科		
ジュリドクロミス・レガニ	<i>Julidochromis regani</i>	43
ネオランプロログス・レレウピィ	<i>Neolamprologus leleupi</i>	25
ネオランプロログス・オケラータス	<i>Neolamprologus ocellatus</i>	6
ネオランプロログス・トレトケファルス	<i>Neolamprologus tretocephalus</i>	90

サンフィッシュ科		
ロングイヤーサンフィッシュ	<i>Lepomis megalotis peltastes</i>	100
昆虫類		
タガメ	<i>Lethocerus deyrollei</i>	43
ゲンゴロウ	<i>Cybister japonicus</i>	18

(3) 資料の利用

1) 資料の貸出

2003年度には、以下のとおり資料の貸出を行った。

資 料 名	数量	貸 出 先	期 間
【動物】			
カワゲラ	3点	スロベニア自然史博物館 Ignac Sivec	2003.6.1-2004.5.31
ナガゴミムシ属標本	510点	東京大学久保田耕平	
ダニ	5点	筑波大学田神一美	2004.3.5-2004.9.5
シジミに寄生した楯吸虫	9点	福岡教育大学	2004.3.5-2004.9.5
オオナマズのダニ	5点	Karlsruhe大学(ドイツ) Tom Goldschmidt	2004.1.11-2005.1.10
カマキリに寄生したハリガ ネムシ	1点	千歳サケのふるさと館	2004.1.20-2004.4.10
	4本	Ecoanalysts Ins. (アメリカ) D. Christopher Rogers	2003.6.20-2003.12.20
アジアゾウ頭蓋標本	1点	多賀町立博物館	2003.7.17-2003.10.30
ニホンジカ	1点	京都教育大学教育学部附属中学校	2003.5.2-2003.5.16
イノシシ	1点		
キツネ	1点		
バイカルカジカビ液浸標本	1点	千歳サケのふるさと館	2003.7.1-2003.9.30
バイカルヨコエビ液浸標本	1点	千歳サケのふるさと館	2003.7.1-2003.9.30
アユモドキ	30点	志摩マリンランド	
ミヤコタナゴ	30点	トンボと自然を考える会	
イワトコナマズ	1点	かごしま水族館	2003.4.1-2003.7.31
【地学】			
コイ科魚類咽頭歯化石	5点	美濃加茂市民ミュージアム	2003.6.29-2003.9.14

【民俗】			
ビデオテープ「近江の国 中世なんでも探検隊」	1点	守山市立埋蔵文化センター	2004.1.13-2004.2.28
民具	34点	大津市歴史博物館	2003.5.10-2003.6.30
魚類・調理レプリカ	33点	滋賀の食文化研究会	2003.10.7-2003.10.18
化石レプリカ	26点	きしわだ自然資料館	2003.10.10-2003.12.28
展示解説パネル	13点	琵琶湖チャータークルーズ船ビアンカ	2003.9.16-2003.9.25

2) 資料の譲与

2003年度には、以下のとおり資料の譲与を行った。

【水族】	オスフロネームスグーラミー	1点	宮津エネルギー研究所水族館
	ロングイヤーサンフッシュ	20点	栃木県なかがわ水族館
	ニッポンバラタナゴ	50点	姫路市立水族館
	ハリヨ	35点	宮津エネルギー研究所水族館
	ヒナモロコ	10点	名古屋港水族移管
	アユモドキ	10点	江ノ島水族館相模原事業所
	ネコギギ	5点	江ノ島水族館相模原事業所
	パールン	2点	夫婦岩パラダイス
	ハス	3点	近畿大学農学部水産学科
	コウライハス	3点	近畿大学農学部水産学科
	タモロコ	3点	近畿大学農学部水産学科
	スゴモロコ	3点	近畿大学農学部水産学科
	イトモロコ	3点	近畿大学農学部水産学科
	オイカワ	3点	近畿大学農学部水産学科
	カワムツ	3点	近畿大学農学部水産学科
	ヌمامツ	3点	近畿大学農学部水産学科
	ワタカ	3点	近畿大学農学部水産学科
	モツゴ	3点	近畿大学農学部水産学科
	ムギツク	3点	近畿大学農学部水産学科
	ビワヒガイ	3点	近畿大学農学部水産学科
	アブラヒガイ	3点	近畿大学農学部水産学科
	ヒナモロコ	3点	近畿大学農学部水産学科
	カワバタモロコ	3点	近畿大学農学部水産学科
	スジシマドジョウ小型種琵琶湖型	10点	水道記念館
	ヒブナ	3点	島根県立宍戸湖自然館

ワタカ	10点	びわ湖こどもの国 虹の家
ホンモロコ	20点	
シロヒレタビラ	20点	
カネヒラ	20点	
メダカ	30点	

3) 特別観覧許可

2003年度には、以下のとおり特別観覧の許可を行った。

- ・民具（漁網） 6点 徳網克己
- ・松原内湖遺跡出土木製品（櫛） 40点 吉田知史
- ・龍尾車 2点 柳平則子
- ・村山修一コレクション蝶類標本 10点 千葉秀幸

4) 資料交換

2003年度には、以下のとおり資料交換を行った。

- ・植物さく葉標本 54点 大阪市立自然史博物館

5) 資料製作

2003年度には、以下のとおり資料製作を行った。

- ・カワウの分離骨格標本と仮剥製 8点

(4) 燻 蒸

資料に付着する害虫（成虫・卵・さなぎ蛹）およびかび黴等、資料の保存上、有害な生物の殺虫防除を目的に、収蔵庫燻蒸および燻蒸庫燻蒸を以下のとおり行った。また、平成11年度には小型燻蒸庫を設置し利用規程も整備し、平成12年度より本格的な運用を始めている。

・収蔵庫燻蒸

実施日 2003年8月31日～9月4日

対 象 植物収蔵庫、民俗収蔵庫2、環境収蔵庫

・燻蒸庫燻蒸

実施日 2003年7月10日～7月13日、11月4日～11月8日、11月27日～30日、
2004年3月9日～14日

対 象 植物さく葉標本、民俗資料、昆虫乾燥標本、魚類剥製、鳥類剥製など

・小型燻蒸庫燻蒸

実施日 2003年9月9～11日、10月21～23日、2004年1月27～2月2日

対 象 植物さく葉標本、昆虫標本、地学標本

(5) 資料有害虫類調査

収蔵庫ならびに展示空間に侵入する昆虫類、ゲジ、クモなどのトラップによる捕獲調査を行っている。

実施日 2003年6月23日～7月11日、11月4日～11月18日、
2004年2月25日～3月10日

(6) 資料評価委員

博物館として重要な資料の購入や受贈にあたって、博物館資料としての学術的評価と価格評価を行うため、あらかじめ選定しておいた33名からなる資料評価者名簿をもとにしながら資料評価委員を選任し、資料評価を依頼している。

5 展示活動

2003年度は、常設展示の展示物やデータの更新、展示手法の改善を行い、常設展示の内容を発展させた関連事業を行った。また、次のような企画展示、水族企画展示、ギャラリー展示、トピックス展示を開催し、関連事業を展開した。

(1) 常設展示の主な更新

・展示室A

「ポーリング地熱システム」：補修・更新を行なった。

「鉱物展示プレート」：作成と更新を行った。

・展示室B

「湖上交通のうつりかわり」：開館以来、琵琶湖の和船に関する情報を一般の来館者から集めてきたが、この情報を丸子船探検隊（はしかけ）の協力によってデータベース化し、新しいコーナー「丸子船見聞録」として追加設置した。

・展示室C

「環境とはなんだろう」：環境に対する来館者の思いが書かれた環境絵馬を展示更新した。

「タンガニーカ湖水槽」：タンガニーカ湖は、アフリカ大陸東部の大地溝帯にある世界第2位の規模（水深、貯水量）を誇る淡水湖で、琵琶湖とともに「古代湖」のひとつに数えられている。ここには、数多くの固有の魚類がすみ、多様な生態系をかたちづくっていることが近年の研究で明らかになってきた。今回のリニューアルは、当館専門学芸員だったアンドリュー・ロシター（2004年2月退職：現在、ワイキキ水族館館長）が、現地で行った潜水調査の経験と魚類の生態研究に基づいてデザインしたものである。これまでにくらべて、岩の造形（擬岩）を大幅に増やし、大地の裂け目にできた同湖の荒々しく切り立った岸辺のすがたを再現している。

・ティスカバリールーム

「世界の子どもたち」コーナーの展示更新（2003/12/17～）：「フィンランド・中国湖南省の子どもたち」から「フィンランドの子どもたち」へと展示更新を行った。大津市田上にある日本フィンランド学校や京都在住のフィンランド人の協力を得て、フィンランドの小学校の教室をイメージした「フィンランドの冬」の展示となった。

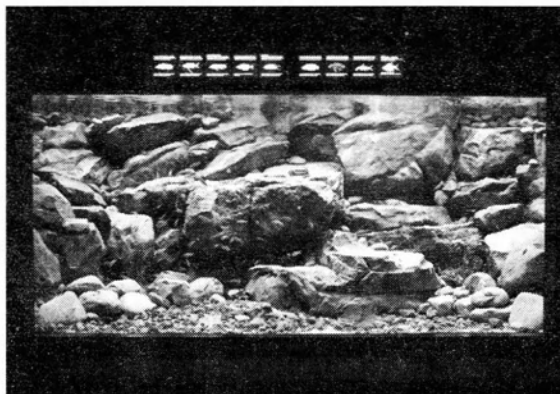
「カウンターでの生き物飼育展示」：2003/4月初旬～5月中旬イモリのタマゴ、2003/5月中旬～6月中旬カイコ、2003/6月下旬～9月下旬カタツムリ（ナミマイマイ）、2003/10月初旬～2004/3月下旬ヤモリとイモリ、2004/3月下旬ツクシ

「音の部屋展示更新」：2003/4月～7月本の楽器、2003/7月～12月竹でできた楽器、2004/1月～3月日本の楽器。

「おばあちゃんの台所」：2003/4月下旬～5月中旬 端午の節供、2003/6月下旬～7月上旬 七夕かざり、2003/9月 お月見、2004/1月中 お正月、2004/2月初旬 節分、2004/2月下旬～3月中旬 お雛飾り。

・その他

上記以外で、展示室全体の情報機器のデータ移植（MacからWindowsへ）を行ない、展示手法の改善を行った。



C展示室・タンガニーカ湖リニューアル



ディスカバリールーム・フィンランドの子どもたち

(2) 第11回企画展示「外来生物 つれてこられた生き物たち」

開催期間：2003年7月19日(土)～11月24日(月・祝) (112日間)

開催場所：滋賀県立琵琶湖博物館 企画展示室

観覧料：大人400円(300円) 高校生・大学生300円(230円) 小学生・中学生200円(150円)

(カッコ内は20人以上の団体料金)

総観覧者数：合計 59,549人

設計業者：(株)日展

館内担当者：中井、布谷、中島、野崎、井戸本

展示のテーマ：私たちの身のまわりにはおどろくほど多くの外来生物がいる。日々の生活に欠かせない食材のほとんどは外来起源の生き物に由来することから、私たちはむかしから外来生物の恩恵を受けながら暮らしてきたともいえる。里山や田園のなじみ深い風景のなかにも外来生物はたくさんいる。しかしその一方で、オオクチバス（ブラックバス）やアライグマなど予想外の影響をもたらした問題視される外来生物も増えており、なかには駆除が試みられ、そのことが人間どうしの新たな対立を引き起こしている場合もある。この企画展示は「私たちと外来生物」、ひいては「人間と生き物・自然」との望ましいかかわりかたを考えてもらうきっかけとなるよう期待して、企画したものである。

展示の特徴：展示室を「外来生物研究所」に見立て（展示コーナーに「資料室」「会議室」とあるのはそのためである。）、来館者には研究所の調査員となってもらうべく「調査員手帳」を配布し、手帳に記された6つの指令（Mission）を解きながら進んでもらう手法を用いた。このような手法は、従来、琵琶湖博物館の展示では意識的に用いてこなかったが、来館者のアンケート調査では非常に好評であることがわかった。また、常設展示の動線沿いに、学芸職員の名札を付けメッセージを印刷したTシャツを各所に設置し、常設展示から企画展示への導入も試みた。

展示空間の造作は特製のダンボール箱を並べる手法を用いた。それは、ダンボール箱そのものに

今回のテーマの背景にある「生き物の移動」を象徴させるという理念的な意図と、経費の節減化、造作の簡易化、かつ廃棄物の縮減など現実的な事情によるものであった。本企画展示のテーマは、現在、社会的にも注目を集めているため、紹介した内容を期間終了後も利用できるよう、映像資料の制作に力を注ぐとともに、できるかぎりデータをデジタル化したことも、大きな特徴である。

琵琶湖博物館は外来生物の標本資料の蓄積が少ないため、各機関・個人の協力によって展示用の標本類を確保した。とりわけ、ミュージアムパーク茨城県自然博物館とオランダ国立自然史博物館ナチュラリスからは、貴重な標本類を数多く借用した。

外来生物をテーマとした展示は、近年多くの博物館で実施されているが、今回の企画展示では問題点や危険性ばかりを強調するのではなく、むしろ外来生物が身近な存在であり、問題視される外来種の抑制が「よそ者排除」といった短絡的な事業ではないことを理解してもらえるような演出に努めた。また、来館者が外来生物の問題を知ること、人と生き物との関わり方を再考するきっかけとなることにも期待した。

展示項目：

0) 導入部

0-1. 導入演出ゲート（エリ漁の風景と外来魚で満ちた湖中景観で構成）

研究所入口（観覧券確認と調査員手帳等資料の配付）

〔映像〕『琵琶湖・水中調査映像』

0-2. あなたにとって生き物とは（日々の生活における生き物との接点を紹介）

1) 身近な外来生物

1-1. 身近な環境の外来生物（里山、水田、市街地、湖畔にすむ生き物をパネルで紹介）

〔Mission 1 在来種をさがせ〕

1-2. 暮らしのなかの外来生物

・学校編（展示ケース内外に小学校の教室風景を再現）

〔映像〕『暮らしの中の外来生物－学校編』

〔標本〕ヤギ、ドバト、スズメなど剥製

・家庭編（展示ケース内外に家庭の風景を再現）

〔映像〕『暮らしの中の外来生物－家庭編』

2) 資料室

2-1. 外来生物とは？（外来生物に関連した用語の定義）

2-2. 暮らしの変化と外来生物（おもな外来種の侵入時期を明治時代以降の年表に表示）

〔資料〕外来生物に関する新聞報道記事

2-3. 日本に侵入した外来生物2200（「外来種ハンドブック」掲載の2200種を列記）

〔Mission 2 侵入の時期をさぐれ〕

2-4. 滋賀県の外来生物（滋賀県で問題とされる主な外来生物を標本で展示）

〔映像〕『オオクチバスの生態－子育てに奮闘する父親』 『ブルーギルの生態－卵食魚も子育て』

てをする』 『館内中継・水族展示編』

[標本] おもな哺乳類・爬虫類・魚類の剥製標本、昆虫類の乾燥標本、植物のさく葉標本など

2-5. 侵入した植物たち（外来植物の原産地を世界地図で大陸別に示す）

[標本] 植物のさく葉標本多数

2-6. 海外へ出た日本の生き物（海外で問題を起こしている日本・アジア原産の生き物）

[標本] モクズガニ液浸標本、植物さく葉標本

・外来生物データベース（中央部の机上）

[情報] データベース閲覧用ノートパソコン（2台）

・[Mission 3 標本を完成させよ]（中央部の机上）

・調査デスク（入口の机上に陸上および水中の調査方法と器材類を紹介）

[映像] 『身近な魚類の調査ーうおの会』

3) 会議室：調査報告レポート

・外来生物の利用

・風景のなかの外来生物

・問題を起こしている外来生物

[情報] 『琵琶湖における外来魚：経緯と現状』（パワーポイントファイル）

4) 外来生物の実態

4-1. 日本各地からのレポート（全国50地域の問題事例を地図上に紹介）

[映像] 『外来生物の実態ー各地からのレポート』

[Mission 4 現場をチェックせよ!]

4-2. 海外レポート（海外の湖沼における代表的事例を紹介）

・北アメリカ・五大湖

[映像] 『外来生物の実態ー北アメリカ・五大湖』

[標本] オオクチバス、ブルーギル、マスクラットの剥製標本

・アフリカ・ヴィクトリア湖

[映像] 『外来生物の実態ーアフリカ・ヴィクトリア湖』

[標本] ヴィクトリア湖産魚類の液浸標本

5) ブラックバスシアター（大型液晶モニターでメイン映像（14分）のエンドレス上映）

壁面に「ブラックバス年表」を設置

[映像] 『琵琶湖の自然と侵入者たち』

[標本] オオクチバス、ブルーギルの剥製標本、コクチバスの液浸標本

[資料] 外来魚回収ボックス、各地のリリース禁止啓発ポスターなど

[Mission 5 キーワードをさがせ]

6) 生き物の移動を考える

6-1. 生き物の輸入（生き物の輸入にはさまざまな手続きが必要なことを示す）

6-2. ペットショップ（それでも多種多様な生物がペットとして売られている）

[映像]『ペットショップ・店長からのメッセージ』 『アライグマ物語』

[Mission 6 適性検査をうけよ]

6-3. 効用 vs 問題点 (コルトンボックスを用いて外来種利用の期待と問題点を紹介)

[標本] オオクチバス、ジャワマングース剥製標本

7) 外来生物問題を考える

7-1. みんなのとりくみ?市民活動の紹介? (外来生物に関係した7団体の取り組みを紹介)

琵琶湖博物館フィールドレポーター 草津市立志津小学校 うおの会

琵琶湖を戻す会 水と文化研究会 滋賀県立湖南農業高等学校 ふくろう世界

新聞

7-2. ビデオライブラリー (既存のビデオ素材テープを自由に閲覧)

7-3. 博物館の人のひとりごと (学芸職員全員の外来生物に関連した意見を紹介)

出口

メッセージプリクラ (企画展示にちなんだオリジナル画像の写真シールの作成が可能)

調査員認定カウンター (調査員手帳のMissionの成果を確認)

みんなの声 [メッセージウォール] (来館者アンケートを貼付して紹介)

全国で注目される外来生物 (各地の企画展等一覧・同時開催となった展示のポスター)



会場俯瞰



外来生物とは



各地の事例



植物標本

関連事業

1) 企画展講座「外来生物 つれてこられた生き物たち」(セミナー室)

第1回 2003年6月8日(日)「くらしの中の外来生物」(布谷知夫)

第2回 2003年6月15日(日)「生物の人為的な広がり歴史と現状」(中島経夫)

第3回 2003年6月22日(日)「外来生物の積極的利用とその功罪」(井戸本純一)

第4回 2003年6月29日(日)「移入のルールといちばん身近な外来生物(ペット)」

(桑原雅之)

第5回 2003年7月6日(日)「外来生物問題の現状と課題」(中井克樹)

特別回 2003年7月20日(日)「企画展オプションツアー」(担当者全員)

2) 観察会および体験教室(体験学習の日)

2003年度の企画展閉幕までに開催される観察会と体験教室のうち、外来生物に関連したものを「企画展示『外来生物』関連」として広報した。対象となった観察会は以下のとおり。

観察会 2003年5月4日(日)「春の田畑の植物を観察しよう」

2003年5月10日(土)「朽木の春を感じよう」

2003年5月18日(日)「春の里山を歩こう」

2003年5月25日(日)「姉川のヤナを見に行こう」

2003年7月26日(土)「漁船に乗ってエリの漁を見に行こう」

2003年8月3日(日)「湖のほとりで水草を調べよう」

2003年8月17日(日)「外国から来た植物を探そう」

体験教室 2003年4月12日(土)・26日(土)「春の草花でしおりを作ろう」

2003年10月11日(土)・25日(土)「草木染めをしよう」

3) 企画展シンポジウム

「いま、生き物とのつきあいを考える～外来生物から見えてくる課題～」

テーマ：外来生物とのかかわりのなかで思い悩むことがらに焦点をあて、自然や生き物とのこれからのつきあい方を考える。

日時：2003年10月19日(日) 13:00～17:00

場所：琵琶湖博物館ホール

基調講演 川那部浩哉(琵琶湖博物館館長)『『侵略の生態学』50年－旧くて新しい外来種問題』

パネル討論 パネリスト：阿部夏丸(作家)、太田英利(琉球大学助教授)

野上ふさ子(地球生物会議代表)

水野敏明(WWFジャパン)

進行役：中井克樹(琵琶湖博物館)

(3) 水族企画展示

第14回 水族企画展示

「外来生物 つれてこられた生き物たち－そのペット、あなたは飼い続けることができますか－」

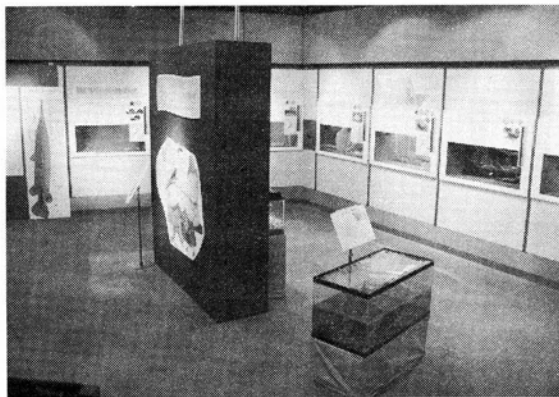
会 期：2003年7月19日(土)～11月24日(日)

常設展観覧券で入場

近年、世界中から多くの動物がペットとして輸入され、ペットショップやホームセンター、デパートなどで販売されている。それらのペット動物は、飼いきれなくなって野外に放逐されたり、不十分な管理のもとで逃げ出してしまうものも少なくないと思われる。その原因としては、飼育者のモラルによる点が大いなのだが、外国産の様々な動物を簡単に入手できる日本の現状も大きく影響しているのではないかと考えられる。

1999年11月に施行された植物防疫法の改正により、外国産クワガタムシやカブトムシ類の輸入が解禁された。それ以後、野外でこれらのクワガタムシやカブトムシが発見される例が急増しており、また在来種との交雑例も確認されている。これは、植物防疫法という歯止めが無くなったことが大きな原因と考えられる。このことは、動物を輸入するための法律(ルール)のあり方が、ペット問題に大きく関わっているということを示唆しているのではないだろうか。

今回の企画展では、滋賀県内を中心に野外で確認されたペット由来の動物を例示し、それらが引き起こす可能性のある問題について紹介した。あわせて、外国産カブト・クワガタ問題を例に、ペット動物の輸入に関してどのような法律(ルール)があり、どのように運用されているのかということを紹介することで、外国産のペット動物とのつきあい方について考えてみた。



水族企画展示全景

(4) ギャラリー展示

第1回博物館資料展「のぞいてみよう博物館の舞台裏」

主 催：琵琶湖博物館

会 期：2003年4月22日(火)～6月22日(日) (55日間)

会 場：本館 企画展示室

総観覧者数：40,874人

展示分野：地学、骨格、魚類、微小生物、水生昆虫、貝類、植物、陸生昆虫、水族、大規模コレクションの寄贈の様子、映像、データベース、鳥類、図書。

展 示 物：「資料整理の過程をパネルにより紹介」、「資料整理の体験コーナー」、「資料整理や標本作製の実演コーナー」、「資料整理や標本作製の風景を撮影したDVDビデオ放映」など。

展示内容：琵琶湖博物館では、およそ40万点もの資料を収集、整理、保管している。それらは研究や展示などにかされ、資料そのものも後世に引き継がれている。本展示では、普段は人目にふれない資料整理の様子について、パネルや実物展示、そして資料整理の実演を通じて、博物館の舞台裏である収蔵庫や水族バックヤードでどのような活動が行われているのかを紹介した。期間中に関連行事として、収蔵庫探検を2日間で4回を行った。

「滋賀県環境学習フェア」

主 催：滋賀県教育委員会

会 期：2003年12月3日(水)～12月11日(木) (9日間)

場 所：企画展示室(展示およびポスターセッション)

ホール(環境教育研究協議会)

参加数：県内小学校19校、中学校5校、高等学校3校、一般団体12団体

企画展示室総観覧者数：1,216人

27校の県内小中高等学校と12の一般団体が参加し、地域の特色を生かした環境学習の取り組みを発表した。企画展示室では、それぞれの学校や一般団体の取り組みをパネルで展示し、各代表者2名が、自分たちの取り組み内容や成果を観覧者に対して解説する活動を行った。最終日に行われた環境教育研究協議会では、環境教育の実践事例報告や、大学教授による講演が行われ、県内各学校や地域の環境教育担当者の研修の場とした。

「楽石注意！-石の愛し方・遊び方・楽しみ方-」

主 催：琵琶湖博物館

会 期：2004年1月14日(水)～2月22日(日) (35日間)

会 場：本館 企画展示室

総観覧者数：12,128人

展示内容：今回は、「石を楽しむ」という事にスポットをあて、宝石やきれいな鉱物の様に美しく目を引く珍しいモノではなく、一見なんでもないどこにでもあるような身近な石を題材にし、石の魅力に引きつけられた人々の紹介も含めて、いろんな側面から石を楽しむ方法を紹介し、興味をもってもらうことを目的に開催した。

展示会では「自然がつくる石の芸術と奇妙な石」「石とことわざ」「石と生活」「石と自然科学」「石とあそび」「石と伝承」「石と芸術」「石に魅せられた人々」など、様々な側面から石を紹介するコーナーを設置し、実物標本を間近に見てもらい、時には手に取りながら、石の魅力やその楽しみ方を紹介した。また、石をより多面的な視点で捉えるために、多くの外部協力者と一緒に展示を考え、作り上げた。また、同時期に関連した展示を行う他館との連携もとりながら運営を行った。

第2回博物館資料展「滋賀の植物標本・写真展-村瀬忠義植物コレクション-」

主 催：琵琶湖博物館

会 期：2004年3月9日(火)～4月4日(日) 24日間

会 場：本館 企画展示室

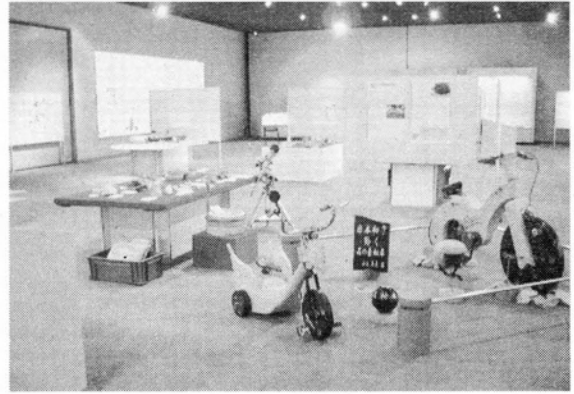
総観覧者数：6878人

展示内容：滋賀県は日本の中央部に位置し、日本海型や瀬戸内海型などの気候の影響を受け、標高約80mから1377mまで暖温帯から冷温帯に属する。また、中央に琵琶湖があり、それに続く平野部と周辺につらなる山々など、地形・地質・気候などが地域によりさまざま、そこに暮らす植物も多様性に富んでいる。しかし、近年、人間生活の営みの拡大で、自然環境の急激な変化が進み、姿を消してしまった植物も多い。このギャラリー展では、約50年にわたり滋賀県内で植物研究を続けてこられた、村瀬忠義氏が採集した貴重な植物標本に、採集当時の記録写真を添えて、県内を10地域に区分し、地域ごとに代表的な種類と貴重な種類の植物を展示解説した。この展示では、県内にこれほど沢山の、そして美しい貴重な植物があることを紹介することで、自然環境の大切さを認識する機会を提供できた。

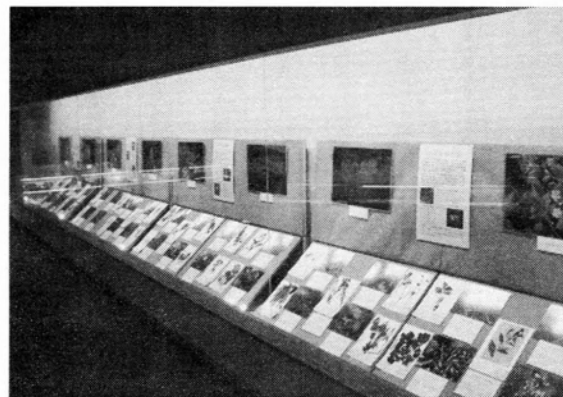
また、ポルトガルの宣教師が戦国時代の武将、織田信長の許可を得て、伊吹山で薬草園を開いたとする言い伝えを裏付ける植物として、イブキノエンドウやキバナノレンリソウなど当時ヨーロッパから薬草とともに持ち込まれたと考えられ、今なお伊吹山山麓だけに自生する植物の標本も展示した。



のぞいてみよう博物館の舞台裏



楽石注意！



滋賀の植物標本・写真展

(5) トピックス展示

松原内湖遺跡出土籠状木製品の展示

内 容：2003年4月に当館所蔵資料が滋賀県指定有形文化財に指定されたことを記念して特別公開を行なった。

展示期間：6月15日～7月13日

展示場所：アトリウム

水族トピック展示

水族展示室内のふれあい体験室前に設置した小型展示水槽をつかって、生まれたばかりの稚魚や話題性のある魚など、常設展示では観察することの難しい水生生物を展示した。内容と期間は以下のとおりであった。

展 示 期 間	テ ー マ	展 示 場 所
2003年		
4月22日～5月11日	スイゲンゼニタナゴ	ふれあい体験室
5月13日～5月25日	モツゴ	ふれあい体験室
5月27日～6月15日	ムサシトミヨ	ふれあい体験室
6月17日～7月6日	オヤニラミ	ふれあい体験室
7月8日～7月27日	シロヒレタビラ	ふれあい体験室
7月29日～8月17日	ムギツク	ふれあい体験室
8月18日～9月7日	ニッポンバラタナゴ	ふれあい体験室
9月9日～9月28日	ネコギギ	ふれあい体験室
9月30日～10月19日	メダカ	ふれあい体験室
10月21日～11月9日	タモロコ	ふれあい体験室
2004年		
1月4日～2月29日	ビワマスの卵と稚魚	ふれあい体験室
3月2日～4月25日	イサザ	ふれあい体験室

(6) 展示関連事業

・企画展「外来生物」関連事業 地域人形劇団による特別公演

企画展「外来生物」に関連して、地域人形劇団「にんたま」による創作人形劇「ぼくのおうちは？」を企画展示室前のアトリウムにて上演した。

2003/8/23(土) 11:00～11:30 観覧者数：約100人

2003/10/26(日) 14:00～14:30 観覧者数：約150人

2003/11/16(日) 14:00～14:30 観覧者数：約150人

6 国際交流活動

(1) フランス国立自然史博物館との相互協力に関する覚書の更新

琵琶湖博物館とパリ国立自然史博物館は、1998年9月25日に、博物館職員などの交流を奨励する目的で、相互協力に関する覚書を交わしているが、2003年9月25日に、この覚書を更新した。これにより、今後5年間の両館の協力関係が成立した。

これまでに、滋賀県で開催された2001年の世界湖沼会議の際に、写真展「今昔写真で見る世界の湖沼の100年」での展示協力や、パリ国立自然史博物館の研究員の受け入れなどの交流実績がある。

また、琵琶湖博物館で今後開催される企画展についても展示協力を依頼しているところである。

覚書で交わされた交流活動

- 1 研究者等博物館職員の交流
- 2 共同研究プロジェクト、シンポジウム、特別展等に関する交流
- 3 技術や方法論に関する情報交換
- 4 出版物、資料、標本の交換
- 5 博物館間で合意を得た博物館活動に関する他の事柄の交流

なお、これまでにロシア科学アカデミーシベリア支部バイカル博物館と1996年に、中国科学院水生生物研究所と2002年にそれぞれ相互協力に関する覚書の締結を行っている。

(2) 海外研修員の受け入れ

- ・Morkh Gunbileg（申請機関：滋賀県国際協会、所属機関：モンゴルハトグル村立博物館）

2004年2月2日～2月27日

(3) 海外からの視察

月 日	視 察 団 体 名	人 数
4月4日	JICA中部国際センター インドネシア国地方環境管理システム カウンターパート件数	3
4月16日	The Society for Promotion of Japanese Diplomacy 第5回 英国青年招聘事業「Pacific Venture 2003」	24
5月31日	全国市町村国際文化研修所 協力交流研修員研修コース	53
6月3日	JICA横浜国際センター 持続的増養殖開発コース	7
6月11日	駐日各国大使地方視察団	36
6月11日	大阪大学留学生センター 大阪大学短期留学特別プログラム	36
6月18日	第11回国際トビケラシンポジウム	29
6月24日	JICA東京国際センター 淡水魚飼育技術	7

6月26日	(米国) ピッツバーグ大学	2
7月2日	2003 Toyota International Teacher Program	52
7月4日	滋賀県教育委員会 ミシガン州派遣団	60
7月9日	韓国順天市長・市議会副議会議長一行	16
7月12日	3rd Conference on U.S.-Japan Public Understanding of Science and Research	15
7月18日	JSPS・韓国科学技術財団共催の日韓セミナー 韓国チーム	13
7月24日	滋賀県青年国際交流機構(滋賀IYEO)	43
7月25日	JICA九州国際センター 第5回フィリピン都市および産業環境における環境対処能力向上コース	12
8月21日	滋賀県教育委員会 外国語指導助手	44
8月31日	ラムサールセンター日本	58
9月5日	JICA中部国際センター インドネシア国地方環境管理システム個別研修	3
9月11日	滋賀県健康福祉部 JICA草の根技術協力事業 フィジー国研修員	4
9月11日	ILEC JICA研修 第4回水環境を主題とする環境教育コース	9
9月12日	日本国際協力センター大阪支所 博物館技術コース	11
9月23日	びわこビジターズビューロー 韓国全羅南道霊岩郡庁職員関西研修団	19
9月28日	びわこビジターズビューロー 海外バイヤー関西インパウンドツアー	16
10月3日	全国建設研修センター JICA研修 建設事業における環境保全対策コース	10
10月8日	ユネスコ・アジア文化センター JICA研修 第36回出版技術東京研修コース	14
10月9日	琵琶湖賞の受賞者一行	4
10月15日	韓国文化観光部職員、始興市職員一行	5
10月20日	滋賀県商工観光労働部国際課 中国湖南省政府代表団	10
10月21日	中国湖南省青年友好訪日団	20
11月5日	JICA東京国際センター 平成15年度養殖開発マスタープラン調査「養殖」国別研修	5
11月5日	在大阪イタリア総領事館の総領事	3
11月6日	北九州国際技術協力協会 JICA研修 産業廃水処理技術コース	10
11月7日	(台湾) 行政院文化建設委員会	30
11月11日	日本環境技術センター JICA研修 水環境モニタリングコース	12
11月12日	滋賀県商工観光労働部国際課 韓国光州広域市職員湖沼水質保全研修	4

11月12日	北方圏センター札幌国際センター JICA研修 地域環境保全技術コース	7
11月13日	UJNR有毒微生物専門部会 第38回日米合同部会	19
11月15日	立命館大学 国際先端社会科学プログラム	15
11月19日	京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科と同大学のJICA研修生	13
11月27日	金沢大学 国際ワークショップ 「陸域堆積物情報とユーラシア東部の長周期環境変動」	35
11月28日	(独国) バイエレン州環境大臣一行	8
11月28日	北九州国際技術協力協会 JICA研修 第4回生活排水対策コース	9
12月5日	びわこビジターズビューロー 台湾嘉義県長一行	22
12月5日	国際厚生事業団 第14回必須医薬品製造品質管理研修(GMPコース)	12
12月11日	琵琶湖環境部 JICA研修 中国水利人材養成プロジェクト	4
1月6日	(韓国) 国立慶州博物館学芸研究士	2
1月20日	京都府農林水産部	6
2月4日	びわこビジターズビューロー 韓国旅行会社ツアー	14
2月8日	(株)国際水産技術開発・JICA横浜国際センター JICA研修 環境と水産開発コース	12
2月11日	JICA筑波国際センター 太湖水環境修復モデルプロジェクト	5
2月19日	サイパン国際交流協会	30
3月2日	ILEC JICA研修 第14回湖沼水質保全コース	11
3月2日	JICA筑波国際センター 太湖水環境修復モデルプロジェクト	33
3月18日	びわこビジターズビューロー 韓国全羅南道靈岩郡庁職員関西研修団	20
合計		893

7 印刷物

平成15年度出版物一覧

品名	サイズ	ページ数	発行部数
研究調査報告書20号「滋賀県のオサムシの分布」	A 4	192	1,000
研究調査報告書21号「琵琶湖集水域における中世村落確立過程の研究」	A 4	312	2,500
研究調査報告書22号「アジア基層文化の探求」	A 4	100	1,000
資料目録10号「植物標本3」	A 4	303	800
業績目録7号	A 4	79	600
シンポジウム報告書「使える博物館をめざして」	A 4	79	500
うみんど 第27号	A 4	8	35,000
うみんど 第28号	A 4	8	25,000
うみんど 第29号	A 4	8	25,000
うみんど 第30号	A 4	8	25,000
うみっこ 第14号	A 4	4	60,000
うみっこ 第15号	A 4	4	50,000
もよおしもの案内(秋冬編)	A 4		50,000
もよおしもの暦(秋冬編)	A 2		1,300
もよおしもの案内(春夏編)	A 4		50,000
もよおしもの暦(春夏編)	A 2		1,300
年報7号	A 4	101	900
要覧第6版(日本語)	A 4	41	1,000
要覧第4版(英語)	A 4	34	500
英文展示ガイド第2版	A 4	124	1,000
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」展示解説書	A 4	161	2,000
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」チラシ	A 4		60,000
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」ポスター	A 2		1,500
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」JR駅用ポスター	B 1		100
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」JR駅用チラシ	A 4		25,000
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」調査員手帳			60,000
企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」号外チラシ	A 4		60,000
企画展シンポジウム チラシ	A 4		15,000
企画展シンポジウム ポスター	A 2		500
水族企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」チラシ	A 4		20,000
水族企画展示「外来生物つれてこられた生き物たち」リーフレット	A 4	7	30,000
ギャラリー展示「楽石注意!」ポスター	A 2		1,000
ギャラリー展示「楽石注意!」チラシ	A 4		10,000
ギャラリー展示「楽石注意!」JR駅用チラシ	A 4		15,000
ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」ポスター	A 2		800
ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」チラシ	A 4		10,000
ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」リーフレット	A 4	8	9,000
ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」JR駅用チラシ	A 4		15,000
ギャラリー展示「糸を紡いで布を織る」ポスター	A 2		800
ギャラリー展示「糸を紡いで布を織る」チラシ	A 4		10,000
研究発表会「水辺移行帯:生き物と人びとの暮らし」ポスター	A 2		1,000
研究発表会「水辺移行帯:生き物と人びとの暮らし」チラシ	A 4		10,000
夏休み自由研究講座チラシ	A 4		6,000
夏休み「生き物飼い方」講座チラシ	A 4		5,000
展示見学サポートシート	A 4	19種21P	各5,000枚
広報用「琵琶湖&川の魚」カレンダー	A 1		1,500
広報用「琵琶湖&川の魚」チラシ	A 4		215,500

Ⅱ 利 用 状 況

1 2003年度入館者数

期 間：2003年（平成15年）4月1日～2004年（平成16年）年3月31日

合 計：472,044人 開館日数：310日

1日平均：1,523人

月平均：39,337人

入館者の区分別内訳

単位：人

区 分	個 人 (人)	団 体 (人)	合 計 (人)	構 成 比 (%)
未 就 学 児	54,690	4,507	59,197	12.5
小・中学生	41,195	80,433	121,628	25.8
高・大学生	6,519	12,368	18,887	4.0
一 般	204,045	68,287	272,332	57.7
合 計	306,449	165,595	472,044	100.0

(1) 総入館者数

年 月	開 館 日 数 (日)	有 料 入 館 (人)				無 料 入 館 (人)								総 計 (人)	1日当 り平均 (人)		
		一 般	高大学生	小中学生	有料計	65歳以上	障害者	家庭の日	体験学習	こども の日	学校行事	その他	無料計				
2003 (H14)	4	27	16,602	3,985	8,274	28,861	398	329	837	49		352	5,348	7,313	36,174	1,340	
	5	27	23,154	3,068	17,744	43,966	576	541	733	167	405	1,720	5,476	9,618	53,584	1,985	
	6	25	20,914	804	11,169	32,887	740	545	1,010	138		1,975	4,770	9,178	42,065	1,683	
	7	27	29,380	1,045	7,898	38,323	675	488	970	147		788	7,120	10,188	48,511	1,797	
	8	31	45,314	2,051	16,456	63,821	722	682	1,194	119		419	11,341	14,477	78,298	2,526	
	9	22	20,229	1,371	4,997	26,597	372	517	878	80		1,638	5,488	8,973	35,570	1,617	
	10	27	18,717	1,053	16,856	36,626	599	513	656	31		7,724	4,544	14,067	50,693	1,878	
	11	26	23,102	1,691	7,369	32,162	428	465	730	157		3,002	9,512	14,294	46,456	1,787	
	12	23	5,576	557	1,868	8,001	148	152	227	53		795	2,858	4,233	12,234	532	
	2004 (H15)	1	24	9,157	371	2,628	12,156	231	224	617	35		604	3,606	5,317	17,473	728
		2	25	12,866	569	3,517	16,952	242	269	745	60		969	4,769	7,054	24,006	960
		3	26	14,394	720	3,965	19,079	399	343	722	55		914	5,468	7,901	26,980	1,038
計	310	239,405	17,285	102,741	359,431	5,530	5,068	9,319	1,091	405	20,900	70,300	112,613	472,044	1,523		

(2) 学校等入館者数

年 月		小 学 校		中 学 校		高 校		養 聾 盲 学 校	
		学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数	学校数	人 数
2003 (H15)・4	全 体	26	2,088	23	2,830	10	2,158	2	27
	県 内	0	0	1	119	2	200	1	18
5	全 体	121	9,305	59	7,614	14	3,098	3	38
	県 内	22	1,095	3	150	1	284	1	19
6	全 体	46	3,665	60	7,141	2	379	4	87
	県 内	19	1,433	9	611	0	0	0	0
7	全 体	29	1,786	16	1,132	9	418	2	34
	県 内	11	423	9	306	5	25	1	14
8	全 体	9	153	16	408	0	0	1	9
	県 内	7	92	11	66	0	0	0	0
9	全 体	38	2,514	6	660	5	735	6	111
	県 内	26	1,525	1	172	0	0	4	36
10	全 体	281	20,508	22	2,461	6	450	2	22
	県 内	103	6,799	12	762	3	80	0	0
11	全 体	65	3,922	33	3,651	7	1,165	3	67
	県 内	43	2,006	14	783	1	82	0	0
12	全 体	10	902	7	304	6	218	0	0
	県 内	3	119	7	304	3	63	0	0
2004 (H16)・1	全 体	17	1,511	1	19	5	273	0	0
	県 内	4	370	1	19	4	209	0	0
2	全 体	28	2,188	3	101	0	0	2	41
	県 内	11	912	1	25	0	0	1	8
3	全 体	14	1,182	5	155	4	520	0	0
	県 内	6	424	4	118	3	320	0	0
合 計	全 体	684	49,724	251	26,476	68	9,414	25	436
	県 内	255	15,198	73	3,435	22	1,263	8	95

(3) 月別・曜日別入館者数

年 月	日曜・祝祭日	土曜日（祝日除く）	そ の 他	計	
2003 (H15)	4	11,576	6,941	17,658	36,174
	5	19,568	5,835	28,181	53,584
	6	16,102	7,645	18,318	42,065
	7	19,517	8,162	20,832	48,511
	8	20,505	14,093	43,700	78,298
	9	17,925	6,648	10,997	35,570
	10	13,346	4,673	32,674	50,693
	11	22,070	8,215	16,171	46,456
	12	3,939	2,804	5,491	12,234
2004 (H16)	1	9,245	3,075	5,153	17,473
	2	12,867	4,510	6,629	24,006
	3	11,393	3,573	12,014	26,980
計	178,052	76,174	217,818	472,044	
構成割合%	37.7	16.1	46.2	100.0	

2 来館者アンケート調査結果報告

(1) 目的

来館者の動向や意見を把握することによって、今後の広報活動のあり方を考え、さらには利用者のニーズや満足度をはかりながら、今後の運営や企画に活かすため、アンケート調査を4回にわたって実施した。

(2) 実施時期

基本的には、平日と休日を含んで連続する3日間としている。アンケート用紙は、来館者への券売時に毎日1,000枚ずつを手渡し、別途、アンケート記入台を3個所に設けて、そこにもアンケート用紙を置いて実施した。

第1回	2003年5月2日(金)～4日(日・休)	回答者数	192人
第2回	2003年8月1日(金)～3日(日)	回答者数	198人
第3回	2003年11月1日(土)～3日(月・祝)	回答者数	259人
第4回	2003年3月26日(金)～28日(日)	回答者数	173人

(3) 項目

来館回数、博物館の情報源、企画展示・ギャラリー展示について、滞在時間、満足度などについて尋ねた後、不満点等があれば具体的に記入していただいた。また、記入者自身についてのおよその年齢、性別および住居地域を教えていただくという形式を基本に実施している。

(4) 傾向

毎回、アンケート結果はほぼ同じ傾向を示し、極めて安定したデータであるといえる。

第1回調査で過半数を超えていた「初めての来館」という方が、第2回調査以降は少なくなり、4回目以上という来館者は2割を超えている。また、来館のきっかけとなった情報源は、友人・知人や家族・親戚といった口コミの影響はかなり大きく、他をしのいでいる。湖周道路沿いに設けた大型案内看板も、ある程度効果を上げていると考えられる。

約7割の人びとがもう一度来たいという希望を持ちながら、観察会や体験学習に参加してみたいという人は1割程度と低くとどまっている。比率に置き換えると少ないが、実数は多いので、こうした機会の必要性は今後ともあると考えられる。また、アンケートに答えた方の半分は、企画展示やギャラリー展示を観覧しており、見なかったという人をわずかに上回っているが、見なかった理由の多くは時間がなかったということである。企画展示の集客は、企画以前の問題であるといえるかもしれない。

満足度は、「非常に満足した」と「満足した」が7割以上を占め、「普通」を加えると9割を超えている。数字で見ると琵琶湖博物館の満足度は非常に高いといえる。

一方、来館者の方の不満は、駐車場、レストラン、昼食場所に対するものが毎回多く、道路標識等の案内についても不十分であるといわれることが多い。これらについては、徐々にではあるが改善を図っているところである。ただ、駐車場が遠い、博物館までの道順がわかりにくいなど、根本的な解決が困難なものも多い。逆に、来館者から感謝や感動したとの言葉をいただくことも多く、それらに

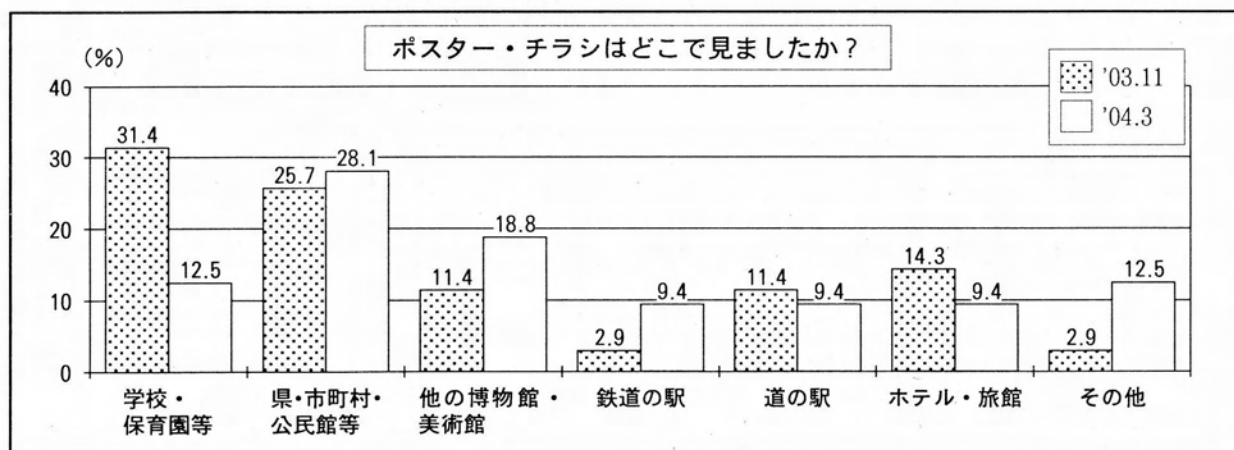
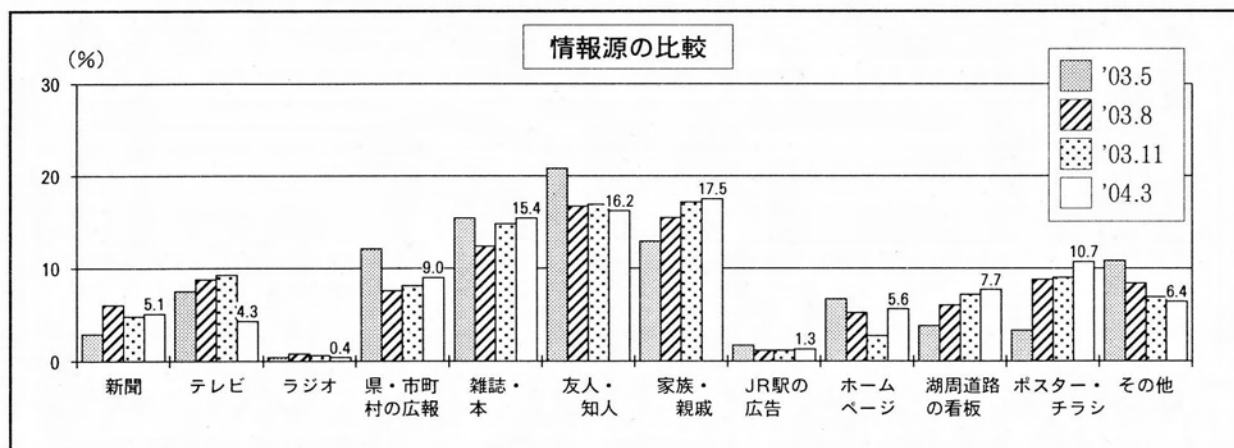
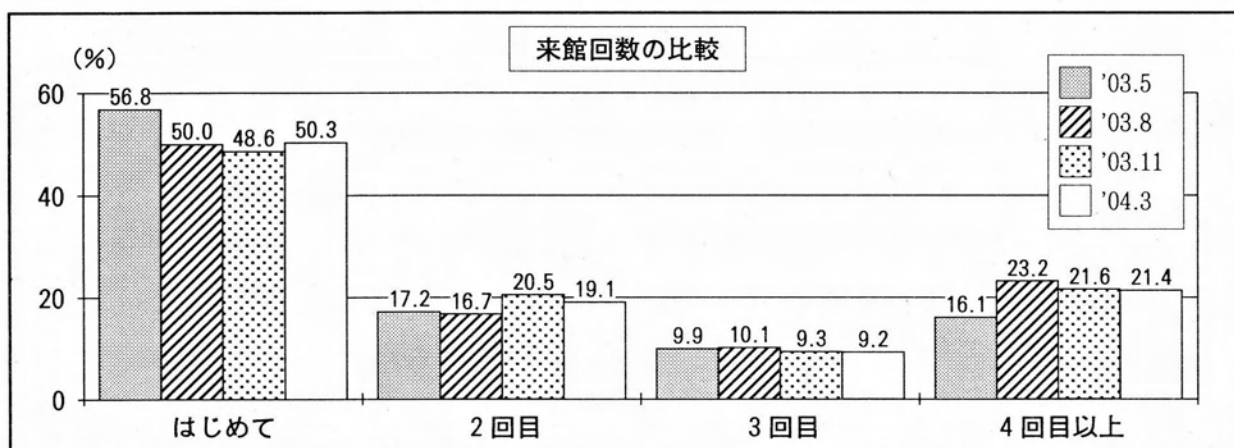
についても関係者に伝え、一層努力するようにしている。

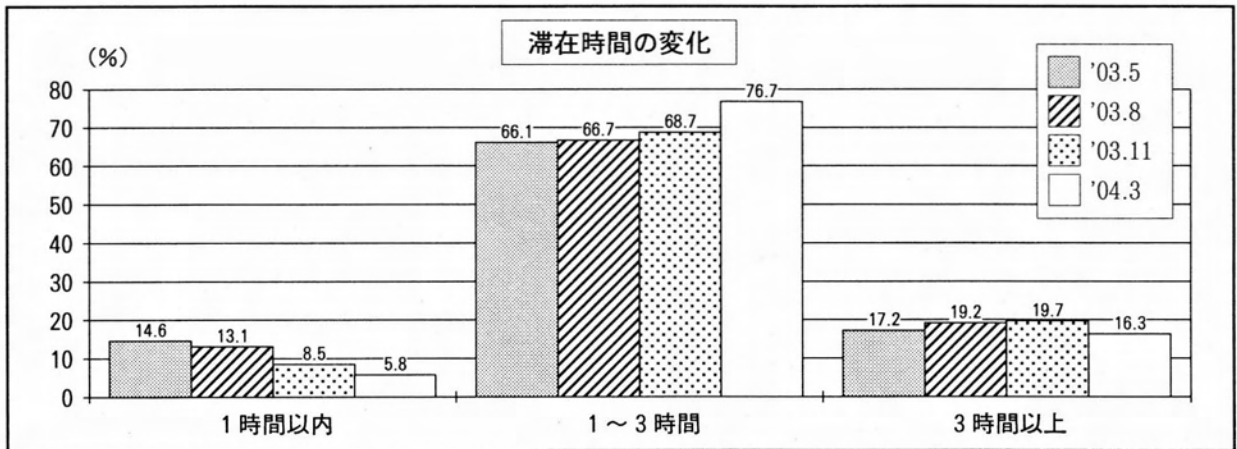
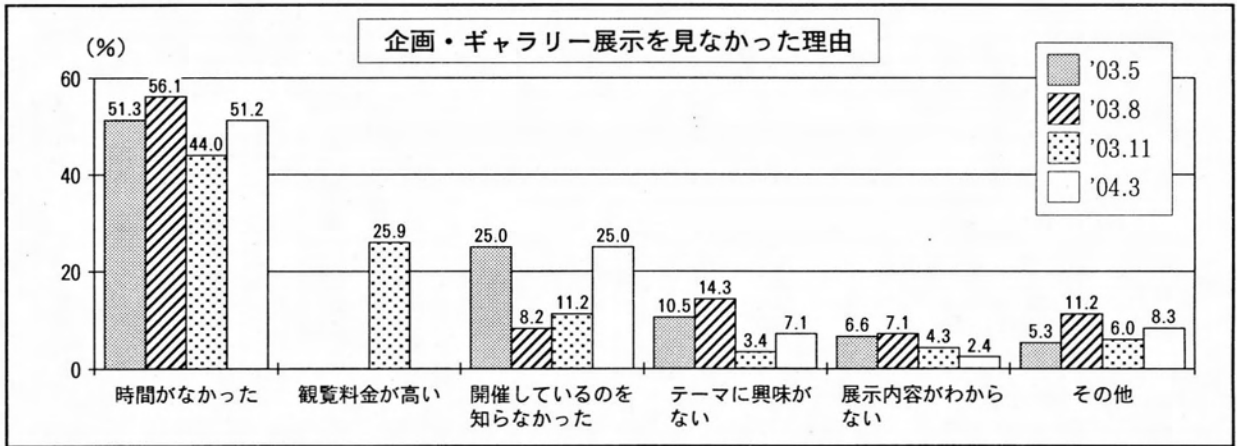
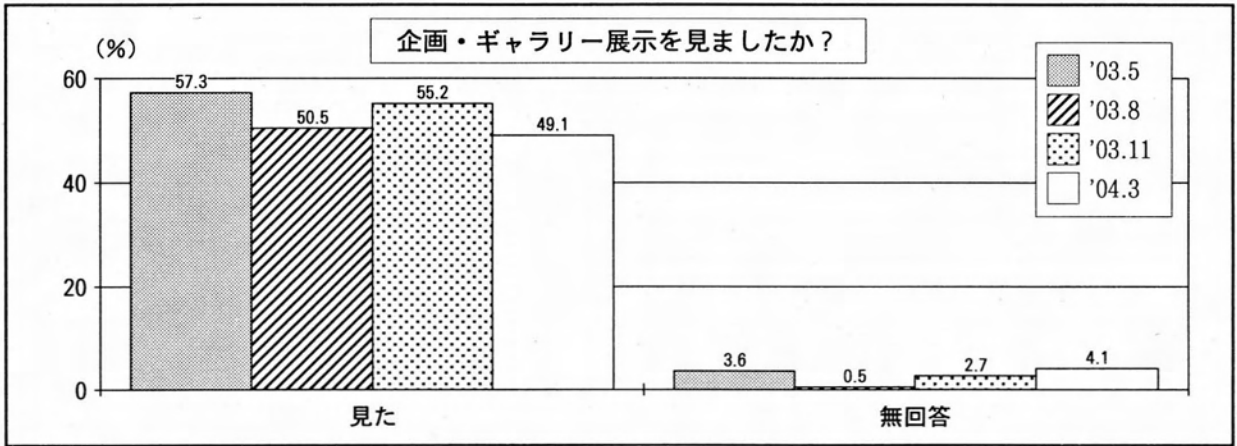
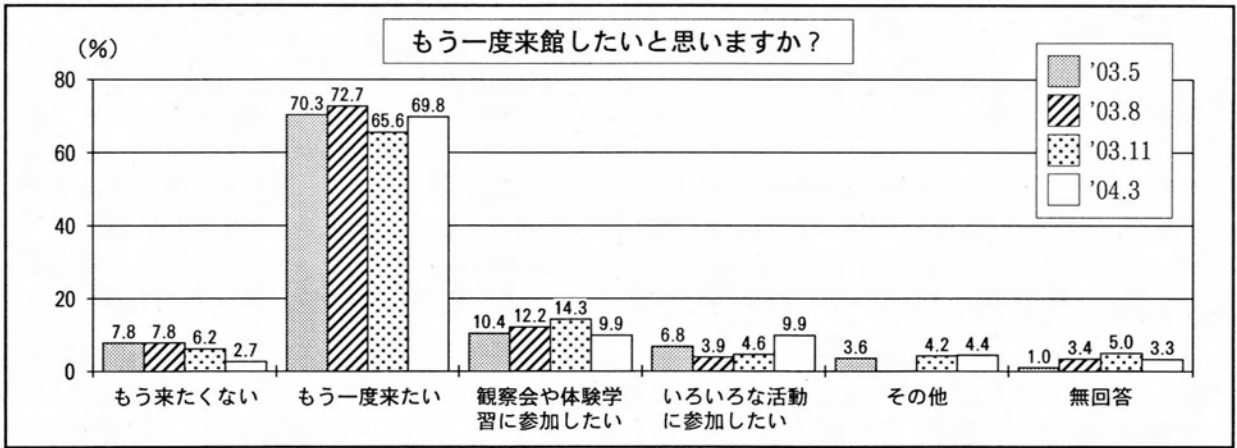
最後に、来館者の居住地域は、季節によって若干の違いはあるが、県内が2～3割、京都・大阪を含めると半分以上になり、更に近畿圏内に広げると約7割を占める。東海地方からの来館者は、5%～15%と、時期による変動がある。

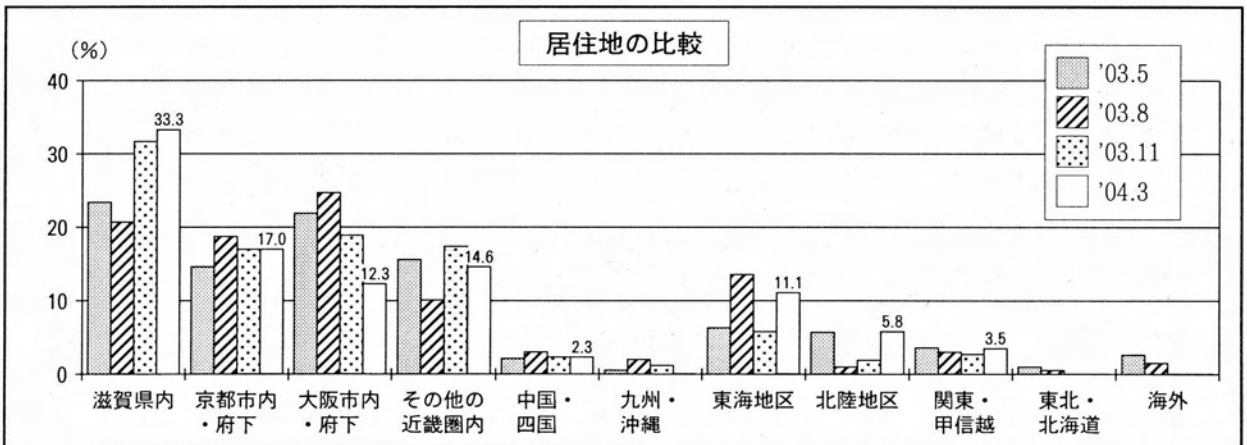
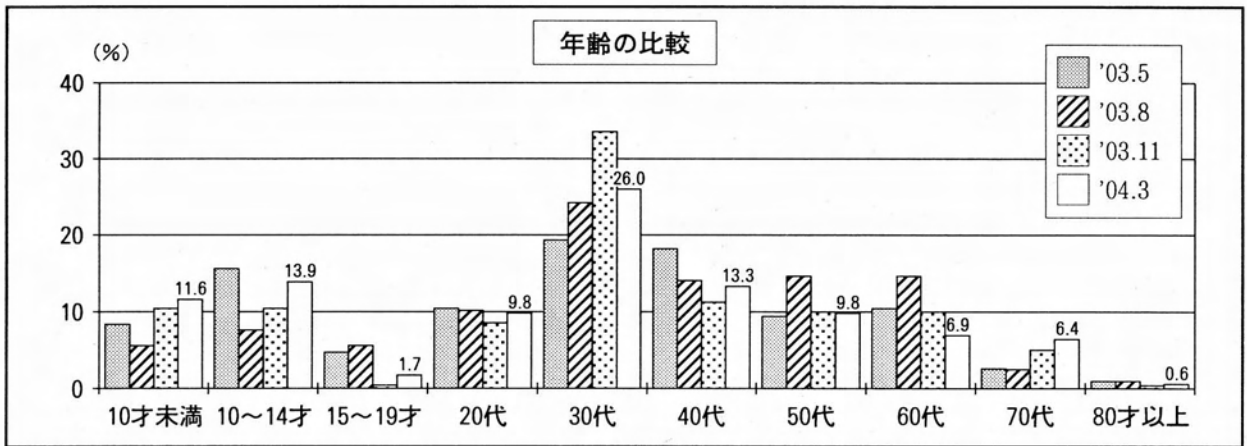
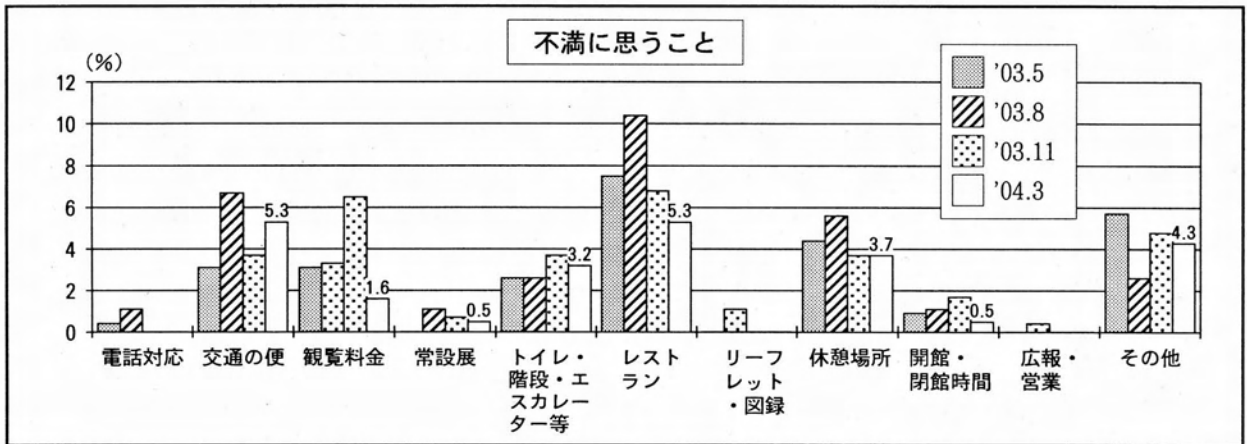
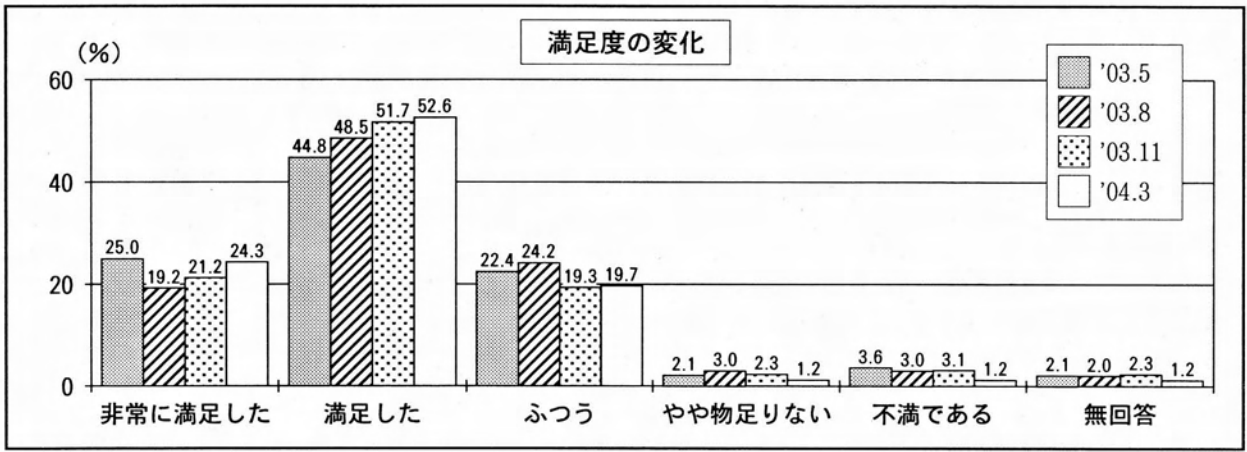
(5) 公表

今年度第3回目調査から、来館者の意見とそれに対する琵琶湖博物館の考え方をその都度とりまとめ、2003年12月より、博物館エントランスで掲示し、ホームページでも公表している。

2003年度来館者アンケートグラフ







3 新聞掲載記録

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
4 5	烏丸半島のすぐ近く湖岸道路に「道の駅」開業	京都新聞	5 15	「琵琶湖ラムサール条約連絡協議会」が9月に琵琶湖博物館にてシンポジウム開催を決定	京都新聞
8	琵琶湖博物館のすぐ近くに道の駅草津オープン	産経新聞	16	ビワコオオナマズの生態を紹介（ふるさとメディア）	産経新聞
10	立命館大が「近江・草津論」を開講し琵琶湖博物館研究員らが特別講義	京都新聞	20	内湖・湿地修復をと嘉田由紀子研究顧問の話	京都新聞
17	守山市教委シンポを冊子に 嘉田由紀子研究顧問らが掲載	京都新聞	21	体験学習「化石のレプリカを作ろう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいあい(滋賀第146号) 読売新聞
18	琵琶湖博物館でスイゲンゼニタナゴの稚魚展示	中日新聞	21	自然を守っていききたい 里山住人の思いつづつた「聞き書き・里山に生きる」を琵琶湖博物館(準備室)の協力で実施した環境調査で	産経新聞
19	ナマズの魅力たっぷり 琵琶湖博物館が本を出版	京都新聞	26	見せませす 博物館の舞台裏 琵琶湖博物館で企画展	産経新聞
19	ドジョウ、フナなどの雑魚が楽しい 中島経夫総括学芸員の話	京都新聞(夕刊)	6 4	シンポジウム「環境政策研究のフロンティア」が8日に開催 川那部浩哉館長の基調講演など	京都新聞
21	水産庁が「外来魚封じ込め」案 に対する中井克樹主任学芸員の話	朝日新聞	11	淀川水系流域委員会琵琶湖部会 丹生ダム建設目的追加を批判 嘉田由紀子研究顧問の意見	読売新聞
23	絶滅危機のスイゲンゼニタナゴ 繁殖させた稚魚公開	京都新聞	11	淀川水委琵琶湖部会 丹生ダムに疑問の声 嘉田由紀子研究顧問の意見	京都新聞
23	お出かけガイド 観察会「朽木の春を感じよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいあい(滋賀第143号) 産経新聞	11	体験学習「琵琶湖のプランクトンを観察しよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいあい(滋賀第149号) 朝日新聞
24	自然の重要性考えよう 琵琶湖博物館で絶滅危惧類スイゲンゼニタナゴ展示	京都新聞	14	琵琶湖博物館で29日にシンポジウム「外来魚リリース禁止-琵琶湖ルールを考える」開催 中井克樹主任学芸員がパネリストに	京都新聞
24	琵琶湖博物館が外来植物の観察会	京都新聞	14	湖上で学ぶ琵琶湖の水 エコ探検スタート	京都新聞
30	資料収集から展示まで博物館の舞台裏紹介	読売新聞	16	遊大な自然 琵琶湖へGO 博物館の紹介	サンケイスポーツ
5 2	チョウ標本国内最大級 3万6196点が琵琶湖博物館に寄贈	中日新聞	18	こども環境特派員今夏も琵琶湖で開催	毎日新聞
2	蝶標本 3万6000点 夢の贈り物 村山大阪女子大名誉教授が琵琶湖博物館に寄贈	京都新聞	24	「研究してます」南湖の水草を調査 芳賀裕樹主任学芸員	京都新聞
5	街を散策し植物観察 親子ら学芸員の解説受け楽しむ	中日新聞	25	観察会「漁船に乗ってエリの漁を見に行こう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいあい(滋賀第151号) 朝日新聞
7	県立琵琶湖博物館 職員の舞台裏知って 榎永一宏学芸員の話	毎日新聞	26	琵琶湖・外来魚リリース禁止、29日琵琶湖博物館でシンポジウム	朝日新聞(夕刊)
9	チョウの標本など寄贈 琵琶湖博物館に3万8000点	毎日新聞	26	「フナずし」の味 讃岐が救え！中井克樹主任学芸員の話	京都新聞
9	民博が「季刊民族学」で偉大な食文化フナズシを特集、井戸本純一主査の記事も掲載	朝日新聞	27	琵琶湖博物館が、文化財指定を記念して縄文期の木製品展示	毎日新聞
10	チョウの標本を琵琶湖博物館に寄贈	中日新聞	27	「エコ草津体験隊」が琵琶湖博物館などの施設見学や船上体験学習	読売新聞
10	トキメキ特派員 バス「キャッチ&イート」	産経新聞	27	琵琶湖博物館のレストラン、バスバーガーが登場	読売新聞
11	過剰伐採、蛾の大発生でモンゴルの森林ピンチ、草加伸吾主任学芸員が雑誌「グリーンパワー」で報告	毎日新聞	28	湖国探訪⑩ 烏丸半島 琵琶湖博物館の紹介と松田征也主任学芸員の話	読売新聞
13	チョウのコレクション、琵琶湖博物館へ寄贈 大量の3万6196点	産経新聞	29	「近江妙蓮」など観光地巡り バスで守山の旅	中日新聞
15	琵琶湖博物館の舞台裏を一般公開、パネルや実演で紹介	京都新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
7	1 25日から「近江妙蓮の旅」琵琶湖博物館などを巡回	産経新聞	8	8 22日にシンポジウム「魚のゆりかご水田シンポジウム」が琵琶湖博物館で開催 前畑政善総括学芸員が基調講演	朝日新聞
	3 琵琶湖・外来魚問題⑤ 中井克樹主任学芸員の話	毎日新聞(夕刊)		14 「魚と水田」考える 22日琵琶湖博でシンポ 前畑政善総括学芸員が基調講演	京都新聞
	5 川とまち再生へNPO立ち上げ 代表嘉田由紀子研究顧問	京都新聞(夕刊)		16 オサムシの分布報告書に 八尋克郎主任学芸員らがまとめる	京都新聞
	6 外来魚ノーリリース推進へ 地域通貨と交換始まる	産経新聞		20 小学生が捕らえた虫を「ミヤマダイコクコガネ」と八尋克郎主任学芸員が確認、来月展示へ	京都新聞
	8 シンポジウム「外来魚のリリース禁止—琵琶湖ルールを考える」詳細 講師に中井克樹主任学芸員	朝日新聞		20 メールコーナー	朝日新聞
	9 “近江妙蓮”見に行こう 25日からバス運行	京都新聞		22 県のオサムシの分布調査報告書を発刊 八尋克郎主任学芸員の話	中日新聞
	9 観察会「湖のほとりで水草を調べよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第153号)		23 琵琶湖博物館でシンポ 琵琶湖在来魚の生態探る 前畑政善総括学芸員が基調講演	産経新聞
	9 伯母川の生き物調査	毎日新聞		24 おうみ百景 県立琵琶湖博物館の紹介	毎日新聞
	11 自由研究知恵授けます 琵琶湖博物館で小中学生向け講座	中日新聞		24 琵琶湖博物館で自由研究相談会 児童が熱心に質問	京都新聞
	12 『瀬田橋の橋脚台遺構』写真資料提供	京都新聞		26 密放流に警備強化 県が罰則条例も検討 松田征也主任学芸員の話	読売新聞(夕刊)
	16 観察会「琵琶湖の水を調べに行こう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第154号)		26 こども環境会議で「湖の子」や琵琶湖博物館で学習	中日新聞
	19 淀川水系流域委 丹生ダム水位低下防止に否定的	読売新聞		27 外来生物の危機、松田征也主任学芸員の話	読売新聞(英字)
	21 はく製や標本で外来生物を紹介 企画展「外来生物つれてこられた生き物たち」琵琶湖博物館で開催	読売新聞		9 1 ラムサール条約10周年、琵琶湖博物館でシンポ	京都新聞
	23 観察会「ミドリセンチコガネを探しに行こう」「外国からきた植物を探そう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第155号)		7 「琵琶湖ラムサールシンポジウム」が琵琶湖博物館で開催、環境保全活動のあり方探る	毎日新聞
	25 琵琶湖博物館に行くには遠いという人に、湖北野鳥センターが水槽並べミニ水族館	中日新聞		8 伯母川で外来魚調査、秋山廣光専門学芸員らが協力	毎日新聞
	25 「平和祈念館」立地候補に烏丸半島など3カ所	京都新聞		9 地元の川で外来魚調査 秋山廣光専門学芸員の話	朝日新聞
29 児童、世界の水問題を学ぶ	京都新聞	10 県立琵琶湖博物館のレストランでバスバーガーが人気	日経新聞		
30 外来魚の生態影響は？県立琵琶湖博物館で企画展	毎日新聞	10 『ハリヨ』写真資料提供	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第161号)		
31 京都・滋賀の水遊び場 琵琶湖博物館の紹介	京都新聞	12 安易な外来飼育ダメ 琵琶湖博物館で企画展開催	京都新聞		
8	3 どんな生物たちが入ってきたのかな 外来生物 つれてこられた生き物たち展	中日新聞	12 川えり漁古墳時代から 守山で漁具跡出土 中島総括学芸員の話	京都新聞	
	4 こども環境特派員が琵琶湖博物館などで環境の大切さ学び修了証	毎日新聞	13 琵琶湖博物館などの県施設の入場・利用料上げ	京都新聞	
	5 毎週月曜日は音楽鑑賞を「月曜体験コンサート」を開催	京都新聞	24 体験学習「紙すきをしよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第163号)	
	5 琵琶湖博物館で「月曜コンサート」初回はマリimbaで軽快なリズム	中日新聞	25 ベット飼う責任と特性知って 県立琵琶湖博物館で外来生物の標本など展示	産経新聞	
	6 企画展「外来生物 つれてこられた生き物たち」紹介	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第157号)	27 草津市立志津小学校で生きもの調査 県立琵琶湖博物館の学芸員が同行	毎日新聞	
	7 丸子船の客船 個人向け運行も開始	京都新聞	28 水環境浄化願い外来魚も一掃 烏丸半島で市民クリーンウォーク	京都新聞	

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
10	1 親子80人雑魚つかみ体験 秋山廣光専門学芸員の講演も 琵琶湖博物館など施設使用料など値上げ 説明不足と紛糾	毎日新聞	11	7 社会に学ぶ27 県立琵琶湖博物館が歴史に触れる体験活動を展開	日本教育新聞
	1 来月京滋など116カ所で文化施設料を入场無料に	京都新聞	9	草津・志津公民館にオープン ミニ博物館交流の場に	毎日新聞
	1 体験学習「草木染めをしよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第164号) 京都新聞	12	小学生と地域住民ら連携 伯母川博物館オープン	京都新聞
	2 琵琶湖博物館がパリ自然史博との協力延長 楠岡泰主任学芸員の話	京都新聞	13	滋賀県むしの会会員がオサムシの新亜種発見 八尋克郎主任学芸員の話	朝日新聞
	4 湖周 シャクナゲについて布谷研究部長の説明	京都新聞	17	身近な生き物集め「伯母川博物館」川を通じて深まる交流 西垣亨主任主事のコメント	中日新聞
	4 県立琵琶湖博物館で開催中の「外来生物」展 担当している中井克樹主任学芸員の話	読売新聞(夕刊)	18	伯母川博物館オープン 児童捕獲の魚など展示	中日新聞
	16 琵琶湖博物館とパリの自然史博物館が覚書更新し協力関係確立	産経新聞	19	琵琶湖博物館でアフリカの魚類標本初展示	京都新聞
	17 ありがとう券課題などを議論	京都新聞	19	体験学習「木の実で遊ぼう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第170号) 京都新聞
	17 メールコーナー クサガメとイシガメの「あいのこ」が生まれ、琵琶湖博物館職員の意見	朝日新聞	26	本当の意味の「共生」考えて 前畑政善総括学芸員の話	京都新聞
	17 外来魚引換券事業 県の深い関与が必要	中日新聞	28	京都・嵐山桂川で藻が大量発生 芦谷美奈子主任学芸員の話	毎日新聞
	18 『シナイモツゴ』写真資料提供	スポニチ	29	琵琶湖のフナやナマズを湖岸の水田が“外敵”から守る 前畑政善総括学芸員の調査で明らかに	京都新聞
	19 企画展シンポジウム「いま、生き物とのつきあいを考える」案内	京都新聞	29	危ぐされる生態系への影響 中井克樹主任学芸員の話	毎日新聞
	21 野付半島でマンモスの化石発見 鑑定はゾウ鑑定の第一人者の高橋啓一専門学芸員	釧路新聞	12	1 水辺移行帯の研究成果披露 琵琶湖博物館の学芸員5人 前畑政善総括学芸員・牧野厚史主任学芸員の発表内容の紹介	読売新聞
	21 「里川」を通じ人と自然の関係修復をフォーラムで嘉田由紀子研究顧問ら発言	京都新聞	1	田んぼの生き物に焦点 琵琶湖博物館で研究発表会 川那部浩哉館長・前畑政善総括学芸員・牧野厚史主任学芸員・大塚泰介学芸員・	産経新聞
	22 観察会「博物館の森を調べよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第166号) 北海道新聞 全道版(夕刊)	4	「県環境学習フェア」(県教委主催)が琵琶湖博物館で開催	京都新聞
	23 ホタテ漁最中にマンモスの化石発見 高橋啓一専門学芸員が鑑定	北海道新聞 全道版(夕刊)	9	メールコーナー 企画展「外来生物・つれてこられた生き物たち」を見学して	朝日新聞
	24 琵琶湖博物館シンポで90人 外来生物の影響学ぶ	朝日新聞	10	体験学習「もちつきをしよう」紹介	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA(滋賀第173号)
	27 マキノの児童ら沼で外来種調査 前畑政善総括学芸員が指導	京都新聞	11	県施設使用料値上げ条例案について	中日新聞
	31 遠近 琵琶湖博物館の紹介	読売新聞(夕刊)	12	県施設使用料値上げを可決	京都新聞
11	5 手作り博物館オープン 滋賀県草津市の志津小学校5年生 西垣亨主任主事のコメント	朝日小学生新聞	13	環境社会学会の「河川行政の転換と地域社会」をテーマにした公開セミナーで嘉田由紀子研究顧問が講演	産経新聞
	5 伯母川博物館オープン 「探検隊」の成果を発表 オープニングセレモニーで嘉田由紀子研究顧問が講評、西垣亨主任主事の話	産経新聞	14	体験学習として昔ながらの方法でのもちつきを実践	産経新聞
	5 伯母川の生物展示 琵琶湖博物館の指導で児童達の博物館が完成 重野良寛副館長らがテープカット	京都新聞	17	「県環境学習フェア」(県教委主催)琵琶湖博物館で開催	毎日新聞
			18	企画展「フィンランドの子どもたち」琵琶湖博物館で始まる	産経新聞

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
12 19	滋賀県実習船「うみのこ」 情操教育に期待高まる、琵琶湖を一周途中、琵琶湖博物館を見学	産経新聞	2 5	家庭菜園感覚で雨水利用しタモロコ養殖 井戸本純一主査の話	朝日新聞
19	県公共施設を一部値上げ 琵琶湖博物館入館料600円に	産経新聞	11	観察会「水族展示の舞台裏」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいいA1(滋賀第181号)
24	冬至を過ぎても生きているキリギリス 大塚泰介学芸員の話	京都新聞	11	県内87の美術・博物館スタンプラリー開始	朝日新聞
27	目で見て触って楽しく学ぶ 琵琶湖博物館の施設紹介	読売新聞(しが県民情報)	12	87ヶ所巡ってみては 一県博物館協がスタンプラリー	中日新聞
31	水とのかかわり取り戻せ 嘉田由紀子研究顧問	京都新聞	15	「ヨシ笛を作ろう」琵琶湖博物館で児童ら40人が体験学習	産経新聞
1 4	復活した伝統木造船・丸子船を琵琶湖博物館の研修で利用	報知新聞	24	京の水文化発掘へ 環境やさしい水車見直そう 嘉田由紀子研究顧問と京都精華大の学生が調査	京都新聞
7	琵琶湖博物館の三が日の人出増	中日新聞	24	『ゲンゴロウブナ』写真資料提供	京都新聞
7	県立琵琶湖博物館ディスカバリールーム内でフィンランドの子ども暮らし体験	毎日新聞	25	体験学習「ヨシ笛を作ろう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいいA1(滋賀第183号)
8	カブト虫の越冬 中井克樹主任学芸員の話	読売新聞	29	「琵琶湖を守るための1万人の誓い」中身を電子データ化し、琵琶湖の形をした木製ケースに封印 琵琶湖博物館で展示	朝日新聞
13	イベント 「楽石注意！-石の愛し方・遊び方・楽しみかた-」	読売新聞(しが県民情報)第号	29	魚のすみよい環境を 八幡塾で川那部浩哉館長講演	中日新聞
14	展示「楽石注意！-石の愛し方・遊び方・楽しみかた-」の紹介	産経新聞	3 2	「琵琶湖を守るための1万人の誓い」タイムカプセルに収納 琵琶湖博物館で展示	産経新聞
14	観察会「植物の冬越しを観察しよう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいいA1(滋賀第177号)	4	「滋賀の植物標本・写真展一村瀬忠義植物コレクション」	毎日新聞(滋賀生活情報紙)オー！ミー-vol.13
15	石の楽しさ再発見を 企画展「楽石注意！」始まる 里口保文学芸員の話	京都新聞	5	「20年目の琵琶湖調査団」京都で公開学習会 「どうなる琵琶湖・淀川水系-淀川水系流域委員会の提言と経験」について 川那部浩	京都新聞
21	体験学習「お正月の遊びを楽しもう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいいA1(滋賀第178号)	5	しがガイド 「滋賀の植物標本・写真展一村瀬忠義植物コレクション」	中日新聞
22	琵琶湖博物館でフィンランドの教室再現	京都新聞	7	京都キャンパスプラザで公開学習会 「どうなる琵琶湖・淀川水系」をテーマに 川那部浩哉館長講演	京都新聞
22	体験学習「お正月の遊びを楽しもう」	毎日新聞(滋賀生活情報紙)オー！ミー-vol.7	8	「20年目の琵琶湖調査団」連続公開学習会に市民ら70人参加 「どうなる琵琶湖・淀川水系」をテーマに 川那部浩哉館長講演	中日新聞
26	カメラや人面を想像 奇妙な石など200点ギャラリー展示「楽石注意！」始まる	中日新聞	9	木造船つくり80年 堅田の松井さん制作の丸子船を琵琶湖博物館にて展示 「滋賀の植物標本・写真展一村瀬忠義植物コレクション」	読売新聞(しが県民情報)第44号
26	駆除最前線テーマに 「琵琶湖外来魚シンポジウム」琵琶湖博物館で開催	中日新聞	10	滋賀の植物…絶滅危く種や希少種120種類 「滋賀の植物標本・写真展一村瀬忠義植物コレクション」琵琶湖博物館で開催	京都新聞
27	「丸子船の構造を解明」 牧野久実主任学芸員	京都新聞	11	ペーパークラフトを作成して丸子船知って！組み立てセットを期間中の琵琶湖博物館来館者先着30名にプレゼント	滋賀報知新聞
28	「楽石注意！」に人目引く作品展	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいいいA1(滋賀第179号)			
29	「カワウと人がうまく共生できる道を見つけない」 亀田佳代子主任学芸員	毎日新聞(滋賀生活情報紙)オー！ミー-vol.8			
2 1	「全国ビオトープシンポジウムin滋賀」開催、琵琶湖博物館で基調報告	京都新聞			
2	「全国ビオトープシンポジウムin滋賀」琵琶湖博物館で開催	読売新聞			
3	何かに似てる？石200点を展示 「楽石注意！」開催	朝日新聞			
4	「生き物文化誌学会」発足 人との共生考える中島経夫総括学芸員の話	読売新聞			

月日	記事タイトル	新聞社名	月日	記事タイトル	新聞社名
3 14	アフリカに「エコトイレ」をマラウイの若者招き実現へ 「水と文化研究会」(代表 嘉田由紀子研究顧問) 水フォーラムきっかけ	京都新聞	3 24	「湖国に移り住んで」 里口保文学芸員 体験学習「わら細工を楽しもう」	朝日新聞(滋賀生活情報紙)あいあいA1(滋賀)第187号
20	日本古来のトイレ参考に アフリカ・マラウイの若者 「水と文化研究会」(代表 嘉田由紀子研究顧問)の招きで来日	京都新聞	25	体験学習「丸子船のペーパークラフトを作ってみよう」	毎日新聞(滋賀生活情報紙)オーミー vol.16
22	ブラックバス在来種の激減に影響も「駆除」「すみ分け」で意見対立 中井克樹主任学芸員のコメント	毎日新聞	27	「琵琶湖ルール」ってなァーに？ 「うおーたん」の似顔絵展とテレビ番組「こどもプラスワン」の公開収録のお知らせ	読売新聞(しが県民情報)第50号
23	イベント案内「わら細工を楽しもう」	読売新聞(しが県民情報)第50号	31	大学激変 法人化、改革の契機に 客員教員の枠を最大限利用し県内の研究機関との連携強化を図りたい 滋賀県立大学長の話	京都新聞
24	バス天井うまいよ 琵琶湖博物館レストラン ハンバーガーに続く第2弾	京都新聞			

4 雑誌等掲載記録

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等		
4	琵琶湖博物館の催し物案内	県広報誌 滋賀プラス1 vol.47	6	琵琶湖博物館行事紹介	文化情報誌 NEEDS 6月号		
	琵琶湖博物館の催し紹介	れいかる<春号>vol.28		体験学習「琵琶湖のプランク	にゅーすもりやま No.346		
	琵琶湖博物館の催し紹介	びいめーる vol.31		トンを観察しよう」紹介			
	びわ湖不思議発見、琵琶湖四方山話⑤	季刊 湖国と文化 103号		観察会「漁船に乗ってエリの	びいめーる vol.32		
	保養所めぐり 滋賀県立琵琶湖博物館の紹介	HAI! No.272 春号		漁を見に行こう」紹介			
	琵琶湖博物館・A展示室『亜熱帯の湖』リニューアル	展示学 35		琵琶湖博物館催し物紹介	そよかぜーエコライフ 通信-vol.87		
	自然の川や湖で出会う淡水魚との触れ合い 前畑政善魚類繁殖学・生態学総括学芸員の話	毎日ペット新聞 春号 vol.2		企画展示「外来生物」案内	博物館研究 No.421		
	全国博物館行事案内	科学技術週間 行事案内		観察会「丸子船に乗ってみよう」、体験学習「琵琶湖のプランク	こどもがくしゅうじょうほう 6月号		
	琵琶湖博物館の「のぞいてみよう博物館の舞台裏」紹介	リビング滋賀 989号		トンを観察しよう」紹介			
	琵琶湖博物館の「のぞいてみよう博物館の舞台裏」紹介	こがも通信 113号		琵琶湖博物館の催し物案内	県広報誌 滋賀プラス1 vol.50		
イベント&アミューズメント紹介	関西1週間 no.107	体験学習「琵琶湖のプランク	子供の科学 807号				
琵琶湖博物館催し物紹介	子供の科学 804号	観察会&講座 参加者募集	にゅーすもりやま No.348.				
琵琶湖博物館催し物案内	遊び・体験ワクワク情報誌 14号	びわ湖不思議発見、琵琶湖四方山話⑥	季刊 湖国と文化 104号				
京阪神から日帰りリゾート地湖畔で楽しむ至極の休日	冷凍食品を使った手軽でおいしい料理ブック	琵琶湖博物館紹介&催しもの	Discover&Science Paper NO.4				
琵琶湖博物館展示解説書など参照	季刊 民俗学 104	自由研究講座案内	滋賀リビング 999号				
湖畔ミュージアムを攻略	URALA 176号	水生生物と触れ合おう! 琵琶湖博物館紹介	トマトマガジン vol.6				
琵琶湖湖南～湖北	博物館研究 No.419	施設紹介	夏ぴあ 関西版				
体験学習「化石のレプリカをつくろう」案内	そよかぜーエコライフ 通信-vol.85	イベント&アミューズメント紹介	関西1週間 no.113				
琵琶湖博物館催し物紹介	そよかぜーエコライフ 通信-vol.85	それゆけ街角探検隊	レインボークラブ 夏号vol.20				
5	琵琶湖博物館の催し物案内	県広報誌 滋賀プラス1 vol.48	7	施設紹介	電車&ウォーク 日帰りハンディガイド(夏) 博物館研究 No.422		
	体験学習「春の草花でしおりをつくろう」紹介	子供の科学 805号		企画展示、観察会「外国から来た植物を探そう」案内	このゆびとまれ vol.13		
	琵琶湖博物館観察会参加者募集	にゅーすもりやま No.344.		魚写真提供と琵琶湖博物館催し物案内			
	沿線インフォメーション 滋賀県特集	週刊鉄道の旅 No.15		琵琶湖博物館の催し物案内	県広報誌 滋賀プラス1 vol.51		
	琵琶湖博物館だより	Relax 6～8月号		観察会「ミドリセンチコガネを探しに行こう」紹介	子供の科学 808号		
	琵琶湖博物館催し物紹介	そよかぜーエコライフ 通信-vol.86		企画展「外来生物 つれてこられた生き物たち」紹介	広報くさつ No. 872		
	ギャラリー展示「のぞいてみよう博物館の舞台裏」案内	博物館研究 No.420		琵琶湖博物館の紹介	修学旅行 8月号(通巻567)		
	体験学習「化石のレプリカを作ろう」、「博物館収蔵庫探検」の紹介	こどもがくしゅうじょうほう 5月号		琵琶湖博物館の催し紹介	れいかる<夏号>vol.29		
	6	琵琶湖博物館の催し物案内		県広報誌 滋賀プラス1 vol.49	8	琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀ガイドマップ2003年版
						琵琶湖博物館の催し物案内	にゅーすもりやま No.350
			琵琶湖博物館の催し物案内	びいめーる vol.33			
			琵琶湖博物館の催し物案内	いぬかみ元気っ子 vol.18			
			琵琶湖博物館の催し物案内	文化情報誌 NEEDS 8月号			
			琵琶湖博物館の催し物案内	滋賀リビング 1003号			
			琵琶湖博物館の催し物案内	博物館研究 No.423			
			琵琶湖博物館の催し物案内	Relax 9～11月号			
			琵琶湖博物館の催し物案内				
			琵琶湖博物館の催し物案内				

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
9	琵琶湖博物館の催し物案内 施設紹介	県広報誌 滋賀プラス1 vol.52 電車&ウォーク 日帰り ハンディガイド(秋)	10	企画展示「外来生物」紹介 企画展示「外来生物」案内 ミュージアムガイド2003 WINTER	ジオ・ワールド 通巻58号 博物館研究 No.425 au サービスエリア
	琵琶湖博物館の催し物案内 体験学習「紙すきをしよう」 紹介 『ゾウ』写真資料提供	れいんぼう 9月号 こどもがくしゅうじょう ほう 9月号 チャレンジ6年生 9月 号	11	体験学習 木の実で遊ぶ紹介 催し物案内	リビング滋賀 1013号 遊び・体験ワクワク情 報誌 16号
	琵琶湖博物館施設紹介	ハイマップ(関西エリ ア) vol.3		琵琶湖博物館の催し物案内 企画展、ギャラリー展紹介 今月の本 研究調査報告書20 「滋賀県のオサムシの分布」 紹介	れいんぼう 11月号 全科協ニュース vol.6 月刊むし 394号
	イベント&アミューズメント 紹介 『ピワコオオナマズ』写真資 料提供	関西1週間 no.116		体験学習「木の実で遊ぶ」 紹介、連続講座受講者募集 琵琶湖博物館だより	にゅーすもりやま No.356 Relax 12~2月号
	日本一の湖について学ぼう~ 草津市の琵琶湖博物館~ 琵琶湖の魚たち 滋賀県立琵 琶湖博物館を訪ねて	週刊GOO 東海版 vol.559	12	琵琶湖博物館の催し物案内 施設紹介	県広報誌 滋賀プラス1 vol.55 月刊ジパングツリー ング vol.56
	企画展「外来生物 つれてこ られた生き物たち」紹介	滋賀たびゅうど 秋号		琵琶湖博物館の催し物紹介 施設紹介	日経サイエンス 386号 電車&ウォーク 日帰り ハンディガイド(冬)
	企画展「外来生物 つれてこ られた生き物たち」紹介	PORTAL(ポータル) no.027		琵琶湖博物館行事紹介 琵琶湖博物館12、1月の行事 紹介	文化情報誌 NEEDS 12月号 びいめーる vol.35
	かけがえのない生命を守る湿 地 琵琶湖の取り組みを世界 が注視している 前畑総括学 芸員が対談	明日の淡海 vol. 9		体験学習 もちつきをしよう 紹介	にゅーすもりやま No.357
	体験学習「紙すきをしよう」 紹介	にゅーすもりやま No.352		体験学習 お正月の遊びを楽 しもう紹介	にゅーすもりやま No.358
	地球環境を考える 施設紹介 琵琶湖博物館催し物紹介	ミーサイマガジン vol.4 そよかぜーエコライフ 通信-vol.90		琵琶湖博物館催し物紹介	そよかぜーエコライフ 通信-vol.93 博物館研究 No.427
	企画展示「外来生物」案内	博物館研究 No.424		ギャラリー展示「楽石注意!- 石の愛し方・楽しみ方・遊び 方」案内	
10	琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館10、11月の行事 紹介	県広報誌 滋賀プラス1 vol.53 びいめーる vol.34	1	琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物案内 琵琶湖博物館の催し物紹介 琵琶湖博物館の催し紹介 琵琶湖博物館施設紹介	県広報誌 滋賀プラス1 vol.56 れいんぼう 1月号 日経サイエンス 387号 れいかる<冬号>vol.31 出光カードドライブ&レジャー 情報誌 MOKO 1月号
	琵琶湖博物館の催し紹介 施設紹介	れいかる<秋号>vol.30 秋びあ 関西版		ギャラリー展示「楽石注意!-石 の愛し方・遊び方・楽しみ方」紹介	にゅーすもりやま No.359
	琵琶湖四方山話⑦、湖国の博 物館いろいろ	季刊 湖国と文化 105号		琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の人込み(8月 ~10月)	三井グラフ vol.134 エンターテイメントビジ ネス 1月号別冊 No.03
	琵琶湖博物館行事紹介 施設紹介 『滋賀県のトンボ』写真資料 提供	文化情報誌 NEEDS 10月号 滋賀県中南部 エリアマップ H2O no.29		地域協働校「伯母川博物館」 の紹介	広報くさつ No.881
	体験学習 紙すきをしよう紹 介	子供の科学 810号		地域協働校「伯母川博物館」 の紹介	地域パートナー情報誌 第 25号(草津市立志津公民館)
	施設入館数入込み数	エンターテイメントビジネス no.2		琵琶湖博物館施設紹介 観察会「植物の冬越しを観察 しよう」、体験学習「ヨシ笛 を作ろう」案内	PORTAL(ポータル)no.031 博物館研究 No.428
	イベント&アミューズメント 紹介	関西1週間 no.119			
	体験学習「草木染めをしよう」 紹介	にゅーすもりやま No.354			
	琵琶湖博物館催し物紹介	そよかぜーエコライフ 通信-vol.91			

月	記事テーマ	掲載雑誌名等	月	記事テーマ	掲載雑誌名等
2	「楽石注意！-石の愛し方・遊び方・楽しみ方」紹介 琵琶湖博物館の展示交流員の役割 松岡治子展示交流員の話 琵琶湖博物館行事紹介 体験学習「ヨシ笛を作ろう」紹介 琵琶湖博物館2、3月の行事紹介 琵琶湖博物館の紹介 琵琶湖博物館の紹介とピワコオオナマズについて 琵琶湖博物館催し物紹介 ギャラリー展示「楽石注意！-石の愛し方・遊び方・楽しみ方」の紹介 琵琶湖博物館の催し物紹介 ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」、体験学習「わら細工を楽しもう」、はしかけ講座 案内	日経サイエンス 388号 モーニングくさつ vol.25 No.2 文化情報誌 NEEDS 2月号 にゅーすもりやま No.360 びいめーる vol.36 AQUALOG No.79 Pado No.001 3月号 そよかぜ-エコライフ通信-vol.95 子供の科学 814号 日経サイエンス 388号 博物館研究 No.429	3	琵琶湖博物館での学芸員実習の感想 催し物案内 観察会「水族展示の舞台裏」紹介 琵琶湖博物館の催し物紹介 はしかけ登録講座紹介 『外来生物展』とインターネット連携 戸田孝主任学芸員 ギャラリー展示「糸を紡いで布を織る」、体験学習「機織りを体験してみよう」「丸子船のペーパークラフトをつくろう」案内 ギャラリー展示「楽石注意！-石の愛し方・遊び方・楽しみ方」紹介 ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」案内 ギャラリー展示「滋賀の植物標本・写真展」紹介 琵琶湖博物館の紹介と前畑政善絵括学芸員の話 地域協働合校「伯母川博物館」の紹介	桃山学院大学博物館学芸員課程年報(2003年度)第7号 遊び・体験ワクワク情報誌 17号 子供の科学 815号 日経サイエンス 389号 にゅーすもりやま No.362 博物館研究 No.430 京阪神エルマガジン No.340 マンスリーガイド京都・滋賀・奈良 C・work 大阪市営交通沿線情報誌 vol.9 EARTH breeze vol.006 ABC「ガラスの地球を救え」事務局 草津市志津学区社会福祉協議会だより 第34号
3	琵琶湖博物館の催し物とうおーたんにお絵展の紹介 琵琶湖博物館の催し物案内 パワフル交流市民21でのヨシ笛づくりの紹介	県広報誌 滋賀プラス1 vol.58 れいんぼう 3月号 モーニングくさつ vol.25 No.3			

5 テレビ放映・ラジオ放送記録

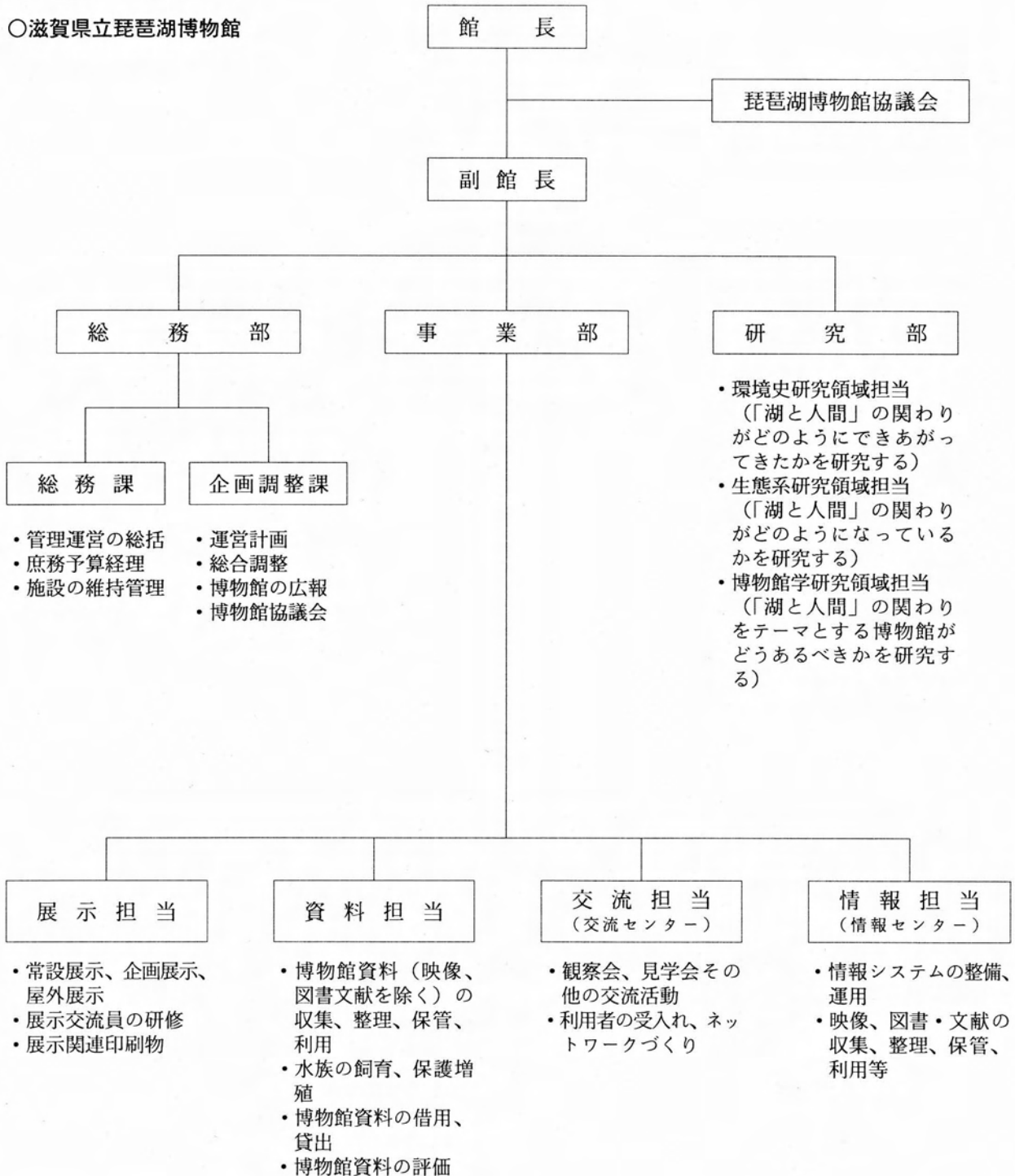
放送日	番組名	内容	媒体	
4	18	ニュースステーション	琵琶湖特集	テレビ朝日
	21	ニュースパーク関西	琵琶湖の魚	NHK
	22	かんさいニュース1番	ギャラリー展「のぞいてみよう博物館の舞台裏」紹介	NHK
		ニュースプラスワン	ギャラリー展「のぞいてみよう博物館の舞台裏」紹介	びわこ放送
		いきなり黄金伝説	竹生島のカワウ問題	テレビ朝日
5	5	教育ウィークリーレポート	体験学習「春の草花でしおりをつくろう」紹介	びわこ放送
	10	ニュースプラス1	竹生島でカワウが増えた理由について	日本テレビ
	12	爆笑問題のススめ		札幌テレビ
	16	知っとこ滋賀	ギャラリー展「のぞいてみよう博物館の舞台裏」紹介 榎永学芸員電話出演	KBSラジオ
	17	ウェークアップ	外来生物特集	読売テレビ
	21	おうみ発630 環境こだわり倶楽部	ビワコオオナマズについて 前畑総括学芸員出演	NHK大津
6	6	THE ワイド	竹生島のカワウについて	日本テレビ
	11	MBSニュースワイドアングル	レストランのブラックバス料理の紹介	MBSラジオ
	13	滋賀プラスワンインフォメーション	琵琶湖博物館6月行事	FM滋賀
7	1	ニューススクランブル	レストランのバスバーガーの紹介	読売テレビ
	4	滋賀プラスワンインフォメーション	琵琶湖博物館7月行事	FM滋賀
	4	かんさいニュース1番	水族トピック展の紹介	NHK大阪
	21	ごめんやす馬場章夫です	企画展「外来生物」と博物館の紹介	毎日放送ラジオ
	23	ちちんぷいぷい	「鯉はええわ」コーナー 秋山専門学芸員出演	毎日放送
	30		企画展「外来生物」と博物館の紹介	滋賀ケーブルテレビ
		世界水の年“水の大切さと水管理の重要性を考える”	マザーレイク21計画と博物館の紹介	韓国KBS
8	1	田淵岩夫の得ダネてれび	企画展「外来生物」と博物館の紹介 中井主任学芸員生出演	KBS京都
	4	かんさいニュース1番	カイツブリの解説 桑原主任学芸員声出演	NHK
	11	かんさいニュース1番	月曜体験コンサート(コントラバス)の紹介	NHK
	20	かんさいニュース1番	企画展「外来生物」紹介	NHK
		県政テレビ 夕刊プラスワン	夏休みの宿題特集	びわこ放送
9	7	県政テレビ 夕刊プラスワン	伯母川探検隊の紹介	びわこ放送
	16	かんさいニュース1番	琵琶湖ヨット事故当日の風速について	NHK大津
		撮れたて!かわら版	体験学習「紙すきをしよう」紹介	滋賀ケーブルネットワーク

放送日	番組名	内容	媒体	
10	5	J R東海プレゼンツ ふれあい見つけ旅	博物館の紹介	東海テレビ
	8	湖岸に咲き乱れる満開のハスの花	烏丸半島の紹介	スカイパーフェクトTV
	10	いくよくるよのはりきりフライデー	博物館の紹介	KBS京都ラジオ
	17	ふれあい見つけ旅	博物館の紹介	東海テレビ
	23	かんさいニュース1番	レストランバスバーガー、魚の解説	NHK
	31	ニューススクランブル	レストランの紹介	読売テレビ
	31	県政テレビ 夕刊プラスワン	企画展紹介	びわこ放送
11	4	県政テレビ 夕刊プラスワン	伯母川博物館開館	びわこ放送
	25	県政テレビ 夕刊プラスワン	伯母川博物館の紹介	びわこ放送
12	25	滋賀プラスワンインフォメーション	琵琶湖博物館1月行事	FM滋賀
1	13	(催しもの案内)	ギャラリー展示「楽石注意！」の紹介	NHK
	21	かんさいニュース1番	ギャラリー展示「楽石注意！」の紹介	NHK大阪
	23	田淵岩夫の得ダネ!しが	体験学習「お正月の遊びを楽しもう」 「よし笛を作ろう」・ギャラリー展示 「楽石注意」・観察会「水族展示の舞台裏」の紹介	KBS京都
	23	ぐるっと関西おひるまえ	ギャラリー展示「楽石注意！」の紹介	NHK大阪
	23	県政テレビ 夕刊プラスワン	ギャラリー展示「楽石注意！」の紹介	びわこ放送
2	18	ぐるっと関西おひるまえ	ギャラリー展示「楽石注意！」の自転車について	NHK大阪
	20	知っとこ滋賀	ギャラリー展示「楽石注意！」・「滋賀の植物標本・写真展」の紹介草加主任学芸員電話出演	KBSラジオ
	25	滋賀プラスワンインフォメーション	琵琶湖博物館3月行事	FM滋賀
	27	県政テレビ 夕刊プラスワン	体験学習「よし笛を作ろう」の紹介	びわこ放送
3	5	きらめきStory	琵琶湖の移動とA展示室の紹介	KBS京都
	12	いくよくるよのはりきりフライデー	ギャラリー展示「楽石注意！」・「滋賀の植物標本・写真展」の紹介	びわこ放送
	14	きらめきStory	琵琶湖の移動とA展示室の紹介	KBS京都
	19	きらめきStory	琵琶湖の移動とA展示室の紹介	KBS京都
	28	きらめきStory	琵琶湖の移動とA展示室の紹介	KBS京都
		里山Ⅱ～命めぐる水の流れ(仮題)	ヨシについているプランクトンの種類や生態系での役割について 楠岡主任学芸員の話	NHK
		ガリレオチャンネル	カワウによる物質輸送について 亀田主任学芸員出演	東京MXテレビ
		アリゲーターガー捕獲関連	湖内で確認されている外来生物について	NHK大阪
			ギャラリー展示「楽石注意！」の紹介	滋賀ケーブルネットワーク
			カワウの生態について	NHK福岡
		湖国の春の風物詩について	テレビ東京	

Ⅲ 組織および運営

1 組織

○滋賀県立琵琶湖博物館



職員構成（2003年4月1日現在）

区分	館長(非常勤)	行政職	研究職	教育職	小計	嘱託等	合計
人数(名)	1	12	29	2	44	17	61

2 職 員

- 館 長 川那部 浩 哉
- 副 館 長 重 野 良 寛

総 務 部

- 部 長 川 原 慎 一 (～H15.10.14)
- 上 原 正 男 (H15.10.15～)

◇ 総務課

- 課長(兼) 川 原 慎 一 (～H15.10.14)
- 上 原 正 男 (H15.10.15～)
- 課長補佐 白 川 重 義
- 主 幹 久 保 一 吉
- 同 奥 野 昭 子
- 主任主事 田 中 順 子
- 同 谷 口 ゆかり
- 主 事 井 上 裕 士

◇ 企画調整課

- 課長(兼) 用 田 政 晴
- 課長補佐 杉 野 和 彦
- (兼) マークJグライガー
- (兼) 松 田 征 也
- (兼) 牧 野 久 実
- (兼) 牧 野 厚 史
- (兼) 芳 賀 裕 樹
- (兼) 里 口 保 文

事 業 部

- 部長(兼) 中 島 経 夫

◇ 展示担当

- G.L.(兼) 山 川 千 代 美
- (兼) アンドリュウ ロンター (～H16.2)
- (兼) 野 崎 信 宏
- (兼) 井 戸 本 純 一
- (兼) 中 井 克 樹 (～H15.9.9)
- (兼) 戸 田 孝 (～H15.9.9)
- (兼) 亀 田 佳 代 子
- (兼) 中 藤 容 子
- (兼) 芦 谷 美 奈 子 (H15.9.10～)
- (兼) 高 橋 啓 一 (H15.9.10～)

◇ 交流担当 (交流センター)

- G.L.(兼) 前 畑 政 善
- 主査(併任) 谷 口 雅 之
- 主任主事(併任) 西 垣 亨
- (兼) 杉 谷 博 隆
- (兼) 高 橋 啓 一 (～H15.9.9)
- (兼) 長 崎 泰 則
- (兼) 草 加 伸 吾
- (兼) 桑 原 雅 之
- (兼) 宮 本 真 二

◇ 資料科

G.L. (兼) 秋山 廣光
 (兼) 楠岡 泰
 (兼) 橋本 道範
 (兼) 榭 永一 宏

◇ 情報担当 (情報センター)

G.L. (兼) 八尋 克郎
 (兼) 芦谷 美奈子 (~H15.9.9)
 (兼) 矢野 晋吾
 (兼) 大塚 泰介
 (兼) 中井 克樹 (H15.9.10~)
 (兼) 戸田 孝 (H15.9.10~)

研究部

○部長 (兼) 布谷 知夫
 研究顧問 嘉田 由紀子
 総括学芸員 中島 経夫
 総括学芸員 前畑 政善

◇ 環境史研究領域

G.L. 専門学芸員 高橋 啓一
 専門学芸員 用田 政晴
 主任学芸員 牧野 久実
 同 山川 千代美
 同 橋本 道範
 学芸員 里口 保文
 同 宮本 真二
 同 榭 永一 宏

◇ 博物館学研究領域

G.L. 総括学芸員 布谷 知夫
 S.G.L. 主任学芸員 八尋 克郎
 専門学芸員 秋山 廣光
 主任学芸員 戸田 孝
 主任学芸員 芦谷 美奈子
 (兼) 谷口 雅之
 (兼) 西垣 亨

◇ 生態系研究領域

G.L. 専門学芸員 アンドリュー ロンター
 S.G.L. 主任学芸員 亀田 佳代子
 専門員 (兼) 杉谷 博隆
 専門学芸員 マーク J. グライガー
 主任主査 (兼) 野崎 信宏
 主査 (兼) 長崎 泰則
 主査 井戸本 純一
 主任学芸員 草加 伸吾
 同 楠岡 泰
 同 中井 克樹
 同 松田 征也
 同 桑原 雅之
 同 牧野 厚史
 同 芳賀 裕樹
 同 矢野 晋吾
 学芸員 大塚 泰介
 同 中藤 容子

注) G.L.はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

臨時的任用職員・嘱託員

伊藤知香	総務事務	山口幸江	昆虫標本整理
堤信雄	同(～H15.9)	國分政子	歴史民俗資料整理
小菅由有子	館長秘書	中井大介	植物標本整理
宮田輝美	同	杉江鉄之介	実習補助・団体利用受付
磯野なつ子	ディスカバリールーム運営	北川峰男	屋外展示運営
松尾知	同	青木伸子	交流事業
大澤勉	展示物の製作・維持補修	天野好美	メディアラボ業務機器保守管理
小泉誠	地学標本整理	中西美智子	図書情報利用室運営・図書資料整理

県職員以外の職員等およびフィールドレポーター・はしかけ登録者

◇ 特別研究員

高橋 鉄美、大原 健一、高橋 大輔、Cédric Crémère、辻 彰洋、Dave Roberts、
Jens Th. Høeg、Charity N. N. Salasini

◇ 研究補助

阿刀陽子、上山宏志、打越崇子、宇野美香、大橋正敏、大久保その子、大島輝美、
甲斐朋子、岸 妙子、北川直子、熊谷悦子、坂口和世、佐々木行忠、白井幸子、
鈴木恭子、瀬川也寸子、田尾稲子、高田千都子、高須佳奈、谷川真紀、辻川智代、
坪井美智子、中村優介、中村和代、中山法子、西山順子、花田美佐子、平野文子、
細川真理子、松井美津子、八尋由佳、山中裕子、山本亜紀、山崎暢子

◇ 図書資料整理・図書情報利用室運営

後藤嘉治子、野口比佐江、奥田学美

◇ 情報システム管理

佐本 泉、津田厚弘

◇ 資料整理保存維持管理業務員

石田未基、上原千春、太田 学、日下部麻理、黒田耕平、佐々木 剛、辻 美穂、
出口武洋、中川千夏、西川佳子、山本真彩子

◇ 公開業務員

安藤文夫、池田泰子、大川 聡、奥田学美、片山裕貴、加藤明美、菊地さとみ、
北村明子、小東 藍、近藤智美、戸崎吉子、中村優介、沼田修吾、根岸抄代、
松浦鉄三、三谷博美、山中智子

◇ 水族飼育員

乾 沙織、右川洋一、岡田 隆、岡本博仁、佐藤智之、柴山弘史、関 慎太郎、
長田智生、中本巨樹、深野絢子、布施幸江、丸尾有美、安川浩史、山田康幸、
吉川真一郎、岡田勇馬

◇ 展示交流員

斉藤晶久、木下真一、愛須美由起、芦田弘美、荒井紀子、池畑慎吾、石川寛子、
井出範子、犬塚菊美、今泉美保、岩見 勉、大川篤子、大林博子、大山綾子、
大山智子、岡本晴行、奥村恵子、奥村麻衣子、折中康子、金盛美和、釜本敦子、
北川喜美榮、北田昌子、北村美香、近藤由美子、近藤秀憲、近藤摩子、坂井純子、
澤 淳子、清水聡子、霜野ゆかり、杉本和子、田村芳子、寺井さやか、土井博子、
中澤真由美、中村とく子、中村瑞穂、橋本富栄、広谷ちひろ、福井明美、本城徹也、
松岡治子、三輪尚子、森永紗江子、山本孝子、山元真里、吉田治美、今泉圭恵、
木村美枝、斉藤文子、澤井秀之、浪江伊都子、西尾文里、西脇実代、林 克子、
村城早織、村田洋子、柳原徳子

◇ 常設展示補修

緒方久美

◇ 企画展示・ギャラリー展示運営

貝増千賀子、北川道之、坂本 卓、佐々木みき、里口ひとみ、新町明日香、
高田美恵子、高橋綾子、野田佐知子、服部祥子、服部尚子、村田洋介、吉田隆徳、
高田裕子

◇ 警備員

赤澤正弘、宮城光夫、和田秀隆、久保 均、谷 清三

◇ 清掃員

勝島道子、北川智子、滝 勇男、中井寿美子、平井千代子、堀井加代、天野泰宏、
伊藤知子、笹 まち子、中嶋里志

◇ 設備管理員

甲斐幸夫、北村康彦、黒川 勲、近藤武夫、酒井芳樹、瀬川 満、竹内和雄、
田中聰徳、萩原昌弘、福井 勇、松原 茂、吉浦 修、北川 宏、土居都義

◇ ミュージアムレストラン

飯田昌子、伊藤雅美、井上ゆき子、岡田真弓美、奥野香代子、佐々木友江、芝田明美、
清水令子、下園美栄子、千足ひろ子、平井芳章、堀川勝義

◇ ミュージアムショップ

中島千賀子、森 薫、中島里世子、中谷由紀子、山本 泰子、宇那木千佳
飯田昌子、伊藤雅美、井上ゆき子、岡田真弓美、奥野香代子、佐々木友江、芝田明美

◇ フィールドレポーター

青井千佳世、青山喜博、肥土マサ子、有田重彦、井谷和美、伊東貴美子、江尻清子、
大住光生、大住純子、奥村 勤、大橋義孝、大町千恵子、岡崎直純、岡田さゆり、
尾形 勇、岡田幹夫、奥村恵津子、小倉市子、小原比良司、加固啓英、加藤広康、
門脇きみ子、椛島昭紘、椛島奈美子、北川幸雄、北川孝美、北側忠次、桑村邦彦、
久保穂子、雲川弘子、口分田政博、小林光子、阪口 進、澤島 篤、白井幸子、
杉江ミサ子、楢本さつき、高瀬喜久男、高田正一、高田節子、田中昭一、津田國史、
土田正文、寺田 誠、豊永志津子、中川徳司、中後佐知子、中島いずみ、中村かをる、
西野 薫、平井政一、古谷善彦、堀野善博、前田雅子、松本 勉、水相修躬、
水戸涼乃、水戸基博、水戸涼介、村上博史、森 擴之、安井加奈恵、矢原 功、
山崎千晶、渡辺克彦、渡辺秀美、渡邊康子

◇ はしかけ

青野邦彦、青山喜博、芦田弘美、天野優子、有田重彦、池田克子、池田彩名枝、
池藤佳子、池藤孝彦、池藤仁美、石川寛子、犬塚菊美、井花保奈美、井花弥生、
今橋克寿、植村友美、植村公則、植村真由美、梅景義高、遠藤吉三、大崎淳子、
大住光生、尾形 勇、岡田聖美、岡田滉平、岡田悠香、奥村恵津子、小野あゆみ、
甲斐朋子、片山好彦、金山 耕、金山雅幸、金山美佐子、金山玲子、亀田洋典、
木瀬昭子、北側忠次、北村明子、北村美香、木戸美知留、木下多津江、桑垣 瑞、
桑木光信、小坂育子、後藤真吾、小西春次、小林悟郎、小林隆夫、小原寿子、
斎藤真琴、斎藤眞由美、佐藤義信、佐橋保司、澤村武雄、嶋村のぞみ、清水聡子、
杉江博明、角田典久、瀬尾好英、瀬川也寸子、高瀬喜久男、高田昌彦、竹内正吾、
竹内芳子、武田 繁、武田広志、竹谷満弘、立石文代、谷口貴也、田室圭一、
辻 美穂、津田國史、坪井美智子、中井大介、中川 修、中川光榮、中後佐知子、
永野麻也子、中山法子、西川 学、西村義隆、西脇実代、野々口つかさ、花田美佐子、
平尾 武、福田真耶、古谷善彦、前田雅子、松岡治子、松本 勉、水上二巳夫、
水戸基博、水戸涼介、村上五十三、村上靖昭、森永紗江子、森本和征、安井加奈恵、
矢原 功、山中裕子、山本 篤、山本恵美子、山本和良、吉井 隆、吉崎奈央、
吉崎美穂、吉田順子、吉田 洋、吉田和加、吉野千栄子、吉村仙二郎、吉本直之、
米田秀之、和田善一郎、渡邊 一郎、渡邊康子

3 予 算

2003年（平成15年）度歳入状況 (円)

科 目	決 算 額
使用料及び手数料	170,949,726
財 産 収 入	2,012,480
諸 収 入	360,925
合 計	173,323,131

2003年（平成15年）度歳出状況 (円)

事 業 名	事 業 内 容	決 算 額
管 理 運 営 費	施設維持費、烏丸半島整備費、事務費	316,884,240
調査資料収集事業費	研究費、研究備品、資料収集製作、資料整理保管、 水族飼育	219,633,308
展 示 事 業 費	企画展示、常設展示、展示維持管理、展示用印刷物	190,590,183
情 報 交 流 事 業 費	情報システム管理、データ入力、図書整備、交流事 業開催、フィールドレポーター	65,761,195
	合 計	792,868,926

4 滋賀県立琵琶湖博物館協議会

第1回

開催日時 2003年11月11日(火) 13:30~16:30

場 所 琵琶湖博物館 会議室

第2回

開催日時 2004年3月2日(火) 14:00~16:30

場 所 琵琶湖博物館 会議室

第4期委員

(任期:2002年9月1日~2004年8月31日)

氏 名	区 分	現 職 (2002年4月現在)
大 町 一 仁	学校教育	草津市立玉川小学校 教諭
澤 裕 子	学校教育	高島町立高島中学校 教諭
西 尾 久 美 子	社会教育	エコ村ネットワーク 副会長
佐 藤 祐 子	社会教育	全国旅館生活衛生同業組合連合会青年部 経営者育成委員
荻 野 和 彦	学 識 者	滋賀県立大学環境科学部 教授
西 野 嘉 章	学 識 者	東京大学総合研究博物館 教授
内 田 紘 臣	学 識 者	串本海中公園センター 館長
染 川 香 澄	学 識 者	ハンズ・オン・プランニング 代表
岡 村 恵 子	学 識 者	毎日新聞大津支局 記者
横 山 俊 夫	学 識 者	京都大学大学院地球環境学堂 地球環境学舎 三才学林長、(併任) 人文科学研究所 教授
西 野 麻 知 子	学 識 者	滋賀県琵琶湖研究所 総括研究員
木 上 秀 保	学 識 者	滋賀県脊椎損傷者協会 副会長
ブライアン・ ウィリアムズ	学 識 者	風景画家
藤 丸 厚 史	学 識 者	公募委員
山 本 真 知 子	学 識 者	公募委員

IV 博物館利用のご案内

■開館時間 AM 9 : 30 ~ PM 5 : 00 (入館は PM 4 : 30 まで)

■休館日 毎週月曜日 (休日である場合を除く) ・年末年始 (12月28日 ~ 1月3日)

■観覧料金 (常設展)

(2004年4月1日現在)

	個人	団体 (20人以上)	年間観覧券	共通券 (*)
小学生・中学生	250円	200円	750円	320円
高校生・大学生	400円	320円	1,600円	520円
大人	600円	480円	2,400円	730円

※未就学児、障害のある方、県内居住の65歳以上の方ならびに県内の学校行事としての観覧は無料です。
(詳細についてはご確認ください。)

※年間観覧券は、購入後1年間、常設展示、企画展示を何回でも観覧できます。

※企画展は別途料金となります。(開催期間中)

*草津市立水生植物公園「みずの森」との共通券。なお、団体は取り扱いません。

■交通案内

●JR新幹線「京都駅」「米原駅」からJR琵琶湖線(東海道)線に乗り換え「草津駅」「守山駅」で下車。

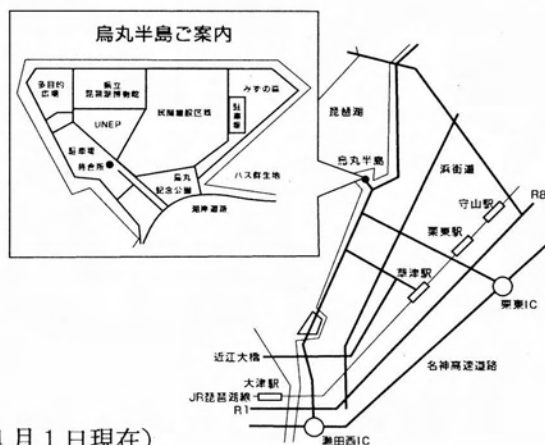
・「草津駅西口」から、近江鉄道バス「烏丸半島」行きで「琵琶湖博物館前」下車(約22分)。タクシーで約20分。

・「守山駅西口」からタクシーで約20分。

●車では、名神高速道路「栗東I.C.」から国道1号線を草津方面へ。信号2つ目「上鉤」で右折。湖岸道路につき当たって(「湖岸志那中町」)再度右折し、約1kmで「烏丸半島」へ。

●航路では、琵琶湖汽船のシャトルボートが「大津港」「びわこ大橋」 「雄琴温泉港」から「草津烏丸半島港」へ

(問い合わせ先: 琵琶湖汽船 077-524-5000)



■駐車料金

(2004年4月1日現在)

大型バス	1,700円	マイクロバス	1,100円
普通車	550円	二輪車	200円

*博物館観覧者が使用する普通車と二輪車は無料扱いとなります。

【館内でのご案内】

質問コーナー: 学芸職員が図書室のカウンターでみなさんからのご質問にお答えしています。

フロアトーク: 原則としてAM11:00から学芸職員が担当の展示コーナーで説明を行っています。

【催し物案内】

ミュージアム観察会: 博物館のまわりで自然観察したり、館内の施設で実験・実習を行います。

フィールド観察会: 県内各地のフィールドで地域の自然や人々の暮らしを見つめ直します。

博物館探検: 普段は見ることのできない博物館や展示室の裏側を学芸職員が紹介します。

博物館講座: 一般の方を対象に専門的な内容をわかりやすく数回連続でお話しします。

博物館入門セミナー: 琵琶湖博物館の活動や展示を幅広く知ることのできる連続講座です。

(事前に往復ハガキで申し込んでください。詳しくは、Faxサービス (077-568-4844)、

インターネットホームページ (<http://www.lbm.go.jp/>) で案内しています。)

2004（平成16年度） 職員紹介

職員

(2004年4月1日現在)

- 館長 川那部 浩 哉
- 副館長 金 森 保 明

総務部

- 部長 上 原 正 男
- ◇ 総務課
 - 課長(兼) 上 原 正 男
 - 課長補佐 上 白 井 莊一郎
 - 主 幹 久 保 一 吉
 - 同 奥 野 昭 子
 - 主 査 田 中 順 子
 - 主任主事 西 田 千 恵 子
 - 主 事 井 上 裕 士

企画調整課

- 課長(兼) 用 田 政 晴
- 課長補佐 杉 野 和 彦
- (兼) 杉 谷 博 隆
- (兼) マーク J. グライガー
- (兼) 孝 橋 賢 一
- (兼) 松 田 征 也
- (兼) 芳 賀 裕 樹
- (兼) 亀 田 佳 代 子
- (兼) 里 口 保 文

事業部

- 部長(兼) 中 島 経 夫
- ◇ 展示担当
 - G.L.(兼) 牧 野 久 実
 - (兼) 布 谷 知 夫
 - (兼) 武 部 強 一
 - (兼) 金 子 修 一
 - (兼) 中 井 克 樹
 - (兼) 八 尋 克 郎
 - (兼) 芦 谷 美 奈 子
 - (兼) 榭 永 一 宏
- ◇ 資料担当
 - G.L.(兼) 秋 山 廣 光
 - (兼) 桑 原 雅 之
 - (兼) 山 川 千 代 美
 - (兼) 橋 本 道 範
 - (兼) 大 塚 泰 介

交流担当(交流センター)

- G.L.(兼) 牧 野 厚 史
- (兼) 前 畑 政 善
- 主査(併任) 谷 口 雅 之
- 主査(併任) 西 垣 亨 吾
- (兼) 草 加 伸 吾
- (兼) 楠 岡 泰

情報担当(情報センター)

- G.L.(兼) 戸 田 孝 吾
- (兼) 矢 野 晋 二
- (兼) 宮 本 真 子
- (兼) 中 藤 容 子

研究部

- 部長(兼) 高 橋 啓 一
- 総括学芸員 布 谷 知 夫
- 総括学芸員 中 島 経 夫
- 研究顧問 嘉 田 由 紀 子
- ◇ 環境史研究領域
 - G.L.総括学芸員 高 橋 啓 一
 - S.G.L.主任学芸員 里 口 保 文
 - 専門学芸員 用 田 政 晴
 - 主任学芸員 牧 野 久 実
 - 同 山 川 千 代 美
 - 同 橋 本 道 範
 - 学 芸 員 宮 本 真 二
 - 同 榭 永 一 宏
- ◇ 博物館学研究領域
 - G.L.専門学芸員 マーク J. グライガー
 - S.G.L.主任学芸員 八 尋 克 郎
 - 専門学芸員 秋 山 廣 光
 - 主任学芸員 戸 田 孝 吾
 - 同 芦 谷 美 奈 子
 - 学 芸 員 中 藤 容 子
 - 主査(併任) 谷 口 雅 之
 - 主査(併任) 西 垣 亨

生態系研究領域

- G.L. 総括学芸員 前 畑 政 善
- S.G.L. 主任学芸員 亀 田 佳 代 子
- 専門員(兼) 杉 谷 博 隆
- 主任主査(兼) 武 部 強 一
- 主 査(兼) 金 子 修 一
- 主 査 孝 橋 賢 一
- 主任学芸員 草 加 伸 吾
- 同 楠 岡 泰
- 同 中 井 克 樹
- 同 松 田 征 也
- 同 桑 原 雅 之
- 同 牧 野 厚 史
- 同 芳 賀 裕 樹
- 同 矢 野 晋 吾
- 学 芸 員 大 塚 泰 介

注) G.L.はグループリーダー、S.G.L. はサブグループリーダーを示す。

館長 兼 滋賀県顧問 川那部 浩 哉 (かわなべ ひろや)

略歴 1960年京都大学大学院理学研究科博士課程修了・京都大学理学博士。同年京都大学助手、1961年同講師、1967年同助教授、1977年同教授、1991年同生態学研究センター長を経て、1996年退官。同年4月より現職。

賞罰 1960年朝日奨励賞、1995年カナダ国ゲルフ大学 (U. of Guelph) 名誉理学博士、1996年京都大学名誉教授・日本学士院賞エディンバラ公賞、1997年アメリカ芸術科学アカデミー (AAAS) 外国人名誉会員・世界科学協会 (IMS) 会員、1999年京都新聞文化学術賞、2001年世界芸術科学アカデミー (WAAS) 会員、2002年京都府自治功労賞、2003年日本生態学会功労賞・応用生態工学会名誉会員。

役員 日本生態学会元会長、国際生態学連合 (INTECOL) 元副会長・第5回大会会長、応用生態工学会前会長、国際古代湖生物学会 (SIAL) 前会長、国際理論応用陸水学会 (SIL) 生物多様性委員会委員長・前日本代表、生物多様性科学国際研究計画 (DIVERSITAS) 科学委員会前委員・西太平洋アジア地域ネットワーク (DIWPA) 前委員長、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「アジア地域の環境保全」研究推進委員会前委員長、世界自然保護基金ジャパン (WWFJ) 常任理事、第9回世界湖沼会議企画委員会委員長、第3回世界水フォーラム運営委員会委員、など。

専門分野 生態学

研究テーマ 社会と群集の生態学 文化多様性と生物多様性との歴史的関係

1995年以来、アユの社会構造や川や湖の魚の種間関係を、おもに調べてきたつもり。京都府宇川の魚について50年間毎年調査してきた愚直さを、本人は大いに誇りにしている。また、アフリカ大陸のタンガニイカ湖などで、1977年ごろから国際共同研究を進めてきたが、極端なまでに地域主義的な発想を持ち、「当該地域の人々が調査のリード役を果し、さまざまな決定はその地域の人々が行うべきだ」との考えのもと、現地の研究者のアドバイザーの役割に徹することに努めてきた。「生物間の関係の総体」の研究が重要だと、40年以上言い続けてきたところ、近年の生態学の国際的流れはこの方向にかなり近づいており、いささか満足している。「生物の多種共存機構を促進する相互作用機構」すなわち「地球共生系」の共同研究に引き続いての、「生物多様性を促進する生態複合」すなわち「共生生物圏」の共同研究は、国内的には2002年3月に一応終わったが、その国際共同研究はさらに続いている。

琵琶湖博物館に来てからは、従来からの「生物間の関係の総体」を拡張して、「湖と人間の関係の総体の歴史性」を自分なりに考え直しており、「古代湖は生命文化複合体」などと、奇妙な用語を口走っ

てもいる。『原色日本淡水魚類図鑑』(1963、76)、『川と湖の魚たち』(1969)、『生物と環境』(1978)、『カラー名鑑日本の淡水魚』(1989、2001)、『生物界における共生と多様性』(1996) など、比較的題名のおとなしい著書もあるが、『偏見の生態学』(1987)、『曖昧の生態学』(1996)、『魚々食記』(2000) など、鬼面人を驚かすような題のものもある。また、私淑していたイギリスの研究者エルトンさんの本を3冊翻訳し、『シリーズ地球共生系』(全6巻)、『共生の生態学』(全8巻)、『ビジュアル科学講座生命の地球』(全13巻) を監修したりもした。近年編集したのものには、『古代湖：その文化的・生物的多様性』(1999、英文)、『古代湖：生物多様性・生態・進化』(2000、英文)、『博物館を楽しむ：琵琶湖博物館ものがたり』(2000)、『生物多様性の世界』(2003) などがある。また、『日本の魚類生物学：川那部浩哉に捧げる』(1998、英文) や『川の自然を残したいー川那部浩哉先生とアユ』(2000) などを贈って頂き、光栄に思うと同時にいささか恥ずかしい気もしている。

研究顧問 嘉 田 由紀子 (かだ ゆきこ)

略歴 1975年米国ウィスコンシン大学大学院修士課程修了、1981年京都大学大学院農学研究科博士課

程単位取得、同年琵琶湖研究所入所。1985年農学博士（京都大学）取得、1991年より滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室、1997年琵琶湖博物館総括学芸員を経て、2000年より現職。2000年より京都精華大学教授。

専門分野 環境社会学、文化人類学

研究テーマ 琵琶湖周辺の水と人のかかわりの環境史、水域資源管理の比較文化論的研究、シロウトサイエンスの方法論的研究

中学校の修学旅行で京都・近江にはれこんだのがこちらに住み着くきっかけになる。大学時代にアフリカ調査、大学院ではアメリカに留学し、途上国の経済発展と社会変動の問題を勉強。アメリカでの修士論文で近江の農村社会研究をとりあげる。昭和56年、琵琶湖研究所に入所。人と琵琶湖のかかわりを文化人類学的に行うことを目的とし、滋賀県内での聞き書きをベースに、県内3000自治会と120水系を対象に環境情報データベースづくりも行う。地域で出会った人たちに教えられながら、水や土地など環境資源管理の智恵とその文化を学ぶ。昭和60年代初頭から、琵琶湖をめぐる歴史や自然、文化を一般にひろく伝達する施設の必要性を強く感じ、当時うごきはじめて琵琶湖博物館づくりに参加。地域の人たちとともに調査や資料づくりを行う参加型の博物館を理想とし、県内各地のフィールドワークを続ける。最近ではアフリカなど海外湖沼との比較文化研究にも取り組み始める。著書に『水と人の環境史』（共編著）、『滋賀県地域環境アトラス』（共編著）、『環境民俗学の試み』（共著）、『私たちのホタル』（1号?7号）（共編著）、『生活世界の環境学』、『水辺遊びの生態学』（共著）、『共感する環境学』など。

◇環境史研究領域

総括学芸員 中 島 経 夫（なかじま つねお）

略歴 1972年東京都立大学理学部化学科卒業、1980年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、同年日本学術振興会奨励研究員、岐阜歯科大学歯学部、1982年理学博士（京都大学）取得、1990年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1997年より現職。1997年生態学琵琶湖賞を受賞。

専門分野 魚類形態学

研究テーマ コイ科魚類の咽頭歯の研究

コイ科魚類に特有な咽頭歯の形の美しさに魅かれて、研究を始めた。コイ科魚類の仔稚魚の数10ミクロンの小さな歯からコイ科の進化をさぐり、化石のデータと合わせながらユーラシア大陸や日本列島の数千万年の大地の歴史を紐解いている。その一端を「東アジアの化石コイ科魚類の時空分布と古地理学的重要性」に著した。また、小さな咽頭歯は化石としてよく残り、琵琶湖やそこにすむコイ科魚類の生い立ちを語っている。そのささやきから、明らかにされた琵琶湖の環境の移り変わりを「琵琶湖の自然史」（八坂書房）に著した。最近では、遺跡に残された咽頭歯化石から当時の人の活動やそのフィルターを介した古生態系の復元に興味をもち、「縄文時代遺跡から出土したコイ科のクセノキプリス亜科魚類咽頭歯遺体」（地球科学）、「赤野井湾遺跡から出土した絶滅種を含むコイ属咽頭歯遺体」（COPEIA）を著し、歴史時代にも琵琶湖魚類の絶滅したことを明らかにしている。

統括学芸員 高 橋 啓 一（たかはし けいいち）

略歴 1979年日本大学文理学部応用地学科卒業、1979年?1980年京都大学理学部研修員、1980年?1990年日本歯科大学新潟歯学部口腔解剖学教室助手、講師、1990年歯学博士（日本歯科大学）取得、同年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職。

専門分野 古脊椎動物学

研究テーマ ゾウ化石を中心とした東アジアの古脊椎動物の変遷

大学入学と同時にいった野尻湖発掘調査団をきっかけに、幾つかのゾウ化石の発掘を経験し、ゾウ化

石の研究を行うようになった。大学に就職してからは、比較解剖学に興味を持ち、人体解剖や歯の形態を学生に教育する傍らで基本的な体制を堅持する軟骨魚類の頭部解剖を実体顕微鏡下で毎日続けた。学位論文は「軟骨魚類の口腔底を支配する顔面神経の解剖学的研究?鼓索神経の相同性について?」。

ゾウ化石の研究を始めたのは、単なる偶然のように思っていたが、実はここに日本の鮮新?更新世という地質時代にみられる日本列島の動物相の特徴があることに気づいた。それは、この時代の脊椎動物化石は、非常にゾウが多いのである。そのために、私は度々ゾウの発掘にめぐりあうことになったのである。いわば、日本列島の動物相がもつ特異性によって、必然的に私の研究対象が決定したのである。

古琵琶湖層群からは、多量の足跡化石や比較的豊富な脊椎動物化石が産出する。脊椎動物化石の産出する地層で、400万年間も連続し、地質学的に詳細に調査された地域は他ではみられない。このようなよいフィールドを活用して、古琵琶湖から産出する脊椎動物化石がどのような意味をもつのか東アジア全体の中で位置づける仕事を現在続けている。

専門学芸員 用田 政 晴 (ようだ まさはる)

略歴 1979年岡山大学法文学専攻科史学専攻考古学コース修了、岡山県総務部県史編纂室、滋賀県教育委員会文化財保護課、琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 考古学

研究テーマ 古代国家成立前史

遺跡は文化財であり、国民共有の財産であるといわれている。永く後世に伝えることは、人類の義務でさえあるといわれている。では、何のために残し、伝えようとするのか。将来の研究のため、歴史学習の素材として活用するため?

私をはじめ古墳の上に立った時、土器のかげらを手にした時、城跡の石垣に触れた時、いい知れぬ思いがこみあげてきた記憶がある。人は、生まれながらにして、時間をさかのぼって感動をおぼえる能力を潜在的に備え、また、その権利ももっている。これは歴史環境享有権、あるいは文化環境甘受権と言いかえられるかも知れない。

私は、こうした感動を、みんなが受けられる世界を残しておきたいと考えている(琵琶湖博物館C展示室『考古学徒からみた歴史環境』より)。

主任学芸員 牧 野 久 実 (まきの くみ)

略歴 1988年慶応義塾大学大学院文学研究科修士課程修了、文学修士、1989~91年テルアビブ大学考古学研究所留学、同期間日本学術振興会特別研究員、1991年慶応義塾大学大学院博士課程単位取得、1991年国立民族学博物館外来研究員、1992年国立民族学博物館共同研究員、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 民族学

研究テーマ 湖環境の比較文化史的研究

私は水辺が好きだ。育った神戸では瀬戸内海を、留学先のテルアビブでは地中海を、そして今は琵琶湖を、日々眺めながら暮らしている。オーストラリアの先住民が描く絵に砂漠とオアシスを描いたものがあるが、私の頭の中にもちょうどあの様な水辺を中心にした心の地図がある。各地の水辺の文化にはさまざまなものがある。通常歴史学ではその地域性に目を向けるが、地域性と同時に普遍性にも目を向けていこうとするのが民族考古学の立場である。一見異なるものに潜んでいる同じもの、一見同じものに潜んでいる異なるもの、そういった事象を比較研究することで、琵琶湖の文化により深く迫って見たいと思う。

主任学芸員 山 川 千代美 (やまかわ ちよみ)

略歴 1987年北海道教育大学釧路分校中学理科課程卒業、1989年兵庫教育大学修士課程学校教育自然系コース修了、教育学修士、1989年滋賀県教育委員会事務局文化部文化振興課を経て、1996年より現職。

専門分野 古植物学

研究テーマ 新生代における植物化石の研究

私は、新生代の大型植物化石を対象に、過去の植物相を解明し、その変遷や古環境を紐解いていく研究をしている。大学時代、研究室の教授に私の郷里で化石採集をするから、よかったら来てみないかと誘われたのが、きっかけであった。もともと、幼少の頃から植物に接することが好きだったので、訳なくのめり込んだ。また、「博物館大好き子」だったので、博物館へ出入りするようになり、気がつけばこの道を歩んでいた。今後、古琵琶湖層群をはじめ、日本や東アジアにおける新生代の植物群の変遷や古植生、さらに種の移り変わりを形態学的な視点から系統進化を究明していきたいと思っている。

主任学芸員 橋 本 道 範 (はしもと みちのり)

略歴 1993年京都大学大学院文学研究科博士後期課程国史学専攻中退、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 文献史学

研究テーマ 13世紀における社会経済構造の変動

私の手元にはいま、1963年に撮影された一枚の空中写真がある。現在の写真と見比べてみると、ここ数十年の間に一変した景観に驚かされる。私たちは伝統的なたんぼの姿、日本の農村の姿を見ることができた最後の世代である。

ところで、そうした「伝統的な」たんぼの姿や村の景観は、決して大昔からかわらずあったわけではない。それぞれの時代の人々が、それぞれの自然条件や社会的条件に応じてそのときどきでもっとも望ましい形に変化させてきたのである。それは、どのような変化であったのであろうか。過去の人々の達成と限界を捉える作業は、現在を相対化し、常に未来をみすえるという姿勢を我々に与えてくれるはずだ。

いま私の手元にある空中写真は、犬上川中流域のものである。たんぼの規格化が進み、かつての様子はもはや空中写真や地形図などと実際にその場所で生活をしてきた方々の記憶の中にしか残されていない。今後、それらの方々から聞き取り調査を行い、過去の変化を捉えるための基礎資料としたいと考えている。また、過去の記憶をよびおこすこの調査が、身近な自然や文化の変化を見つめ直してもらうきっかけとなればと願っている。

主任学芸員 里 口 保 文 (さとぐち やすふみ)

略歴 1997年大阪市立大学理学研究科後期博士課程地質学専攻学位取得後修了、理学博士、同年より現職。

専門分野 層序学

研究テーマ 古琵琶湖層群の火山灰層と他地域の鮮新?更新統中の火山灰層との関係

“滋賀県の近くに火山なんか無いのに火山灰をやっているんですか?”この問に対する答えは、“琵琶湖周辺に火山は無いが、火山灰層は多く存在する”である。この事実はあまり一般の人に知られていない。火山灰は火山の爆発的な噴火活動によって広域に拡散する。それが堆積し、地層中に残っている。その拡散範囲は火山噴火の規模や形態にもよるが、最大級のものになると本州全土を覆うものもある。日本全国どこにでもあるのではないかとと思われるほど火山灰はある。

古琵琶湖層群には、多くの火山灰層が挟まっている。これらはどこから来たのか。また、他の地域に同じ火山灰があるのだろうか?それぞれの火山灰はどんな特徴があるか?それらはいつ、どこで、どの

ように噴火して、どこまで拡散したのか？自然が残してくれたヒントを頼りにその答えを解明するにはどうすればよいのか、それを考えていきたい。

学芸員 宮本 真二 (みやもと しんじ)

略歴 1993年立命館大学文学部地理学科地理学専攻卒業、1996年東京都立大学大学院理学研究科地理学専攻博士課程中退、理学修士、同年5月より現職。

専門分野 微古生物学

研究テーマ 堆積物試料の各種分析（おもに花粉化石）・測定による第四紀の古環境変動の復原
まだ過去を振り返るほど老いていないが、今の研究の原点は幼年期にあったと思う。田舎だったので、美しい自然に囲まれて成長してきた。それが、そもそものきっかけだったと感じている。

おもに堆積物中に含まれている花粉化石の分析から、自然環境の変化と人との関係の歴史を復原するという、研究をやっている。

自然のイメージを色にと考えると、私は森の緑と答える。その緑は、世界的に急速に減少している。その破壊の一番の原因が、我々人類なのだ。

中東、アフリカ、ヒマラヤ、オーストラリアなど、海の外のフィールドから感じる日本の森は、とても、とても美しい。自然の偉大さを痛感せずにはいられない。

博物館では研究から展示という流れを通じて、自然の偉大さ、大切さ、また恐さも知っていただける活動を行ってゆけたら、と思っている。

学芸員 榎 永一 宏 (ますなが かずひろ)

略歴 1994年九州大学農学部農学科卒業、2000年九州大学大学院比較社会文化研究科博士後期課程単位取得、同年より現職、2002年九州大学博士（理学）取得。

専門分野 水生昆虫学

研究テーマ 水生昆虫の分類、系統進化、生物地理

小学生の頃からの新種を見つけたいという思いが、昆虫の研究ができる大学を選択させた。なぜ、ハエを研究しているのかと聞かれることがよくある。理由は2つある。一つに小型の昆虫はほとんど研究されておらず新種が多いこと、もうひとつは人に話してもなかなか理解されにくいのだが、アシナガバエは非常に美しいということである。

大学学部時代から現在まで双翅目アシナガバエ科の系統分類学的研究を行ってきた。現在は分子系統学的手法を用いた系統推定も行っている。アシナガバエ科は150属6000種からなる、双翅類のなかでも大きな一群である。本科の成虫は淡水域から海水域まで、様々な水辺環境への進出に成功し、適応放散により進化してきたグループである。大学院時代には海岸の岩礁域に棲むイソアシナガバエの研究に力を入れ、日本中の海岸線をなぞるようにテントを積んだ原付きバイクで走ったことがある。中国大陸の海岸も中国人の大学院生と2人でバスと自動車を利用し、中華料理を楽しみながら、分布調査をした。また日本周辺の離島の調査数も30島に及ぶ。

今後は、滋賀県において双翅目を中心とした水生昆虫相の解明を進めたい。また代表的な世界の古代湖の水生昆虫を収集し、各古代湖における歴史的、地理的、気候的環境を踏まえて、それぞれのもつ動物相の固有性や類似性に関する分類学的・進化学的研究を行いたい。世界の古代湖の生物相の成り立ちの比較研究により、琵琶湖の特殊性や重要性を浮かび上がらせるような研究活動をしたいと考えている。

◇生態系研究領域

総括学芸員 前畑 政善 (まえはた まさよし)

略歴 1974年高知大学大学院農学研究科修士課程栽培漁業学専攻中退、1974年滋賀県立琵琶湖文化館

を経て、1997年より現職。2002年理学博士（京都大学）取得。

専門分野 水族繁殖学

研究テーマ 日本産ナマズ類の産卵生態

魚類を選んだのは、小さい時から魚を取ったり食べたりするのが大好きだったから。高知大学在学中は、ダムのない大河・四万十川の下流部で、アユの産卵生態や生理を研究していた。もちろんアユはたらふくたべた。1974年4月から1996年の3月まで滋賀県立琵琶湖文化館に勤務し、この間、日本産希少淡水魚の繁殖やブラックバスの食性、それから最近ではビワコオオナマズをはじめイワトコナマズ、ナマズなど日本産ナマズ類3種の繁殖生態・行動等を研究している。特に、ナマズ類の研究のきっかけは、1988年にたまたまビワコオオナマズの産卵を間近に見、ひどく感動したことから始まり、それは現在の研究のテーマともなっている。昔からそうだが、感動しないものに対しては、研究対象としないという性分らしいと本人は考えている。最近では、種の保全、あるいは生態系の保全は地域の人びとの関心なしではありえないと確信するに至っているが、その各論のありかたになやんでいる。

専門員 杉谷博隆（すぎたに ひろたか）

略歴 1981年京都大学農学部農業工学科卒業、1981年滋賀県職員（農業土木技術吏員）採用、耕地課、水産課、湖西地域振興局田園整備課勤務を経て、2002年4月より現職

専門分野 農村計画

研究テーマ 住民参加による農村環境保全活動

滋賀県が平成8年度に策定した「みずすまし構想」は、「水・物質循環」「自然との共生」「住民参加」の3つの大きな理念から成り立っている。この構想推進に4年間現場で携わった経験をもとに、農村地域における水質保全・生態系保全といった活動に住民自身が主体的に関わり、そうした活動が地域の魅力の再発見となり、新しい町づくり・村づくりへと発展していくことを願っている。その活動を支援する有効な制度や手法について研究を進めていきたい。

専門学芸員 マーク ジョセフ グライガー (Mark J. Grygier)

略歴 1984年米国カリフォルニア大学サンディエゴ校スクリップス海洋学研究所海洋生物学博士取得。コペンハーゲン大学及びワシントンD.C.のスミソニアン研究所国立自然史博物館研究員、1988年から90年、1992年から93年、1996年から97年琉球大学研究員。日本学術振興会特別研究員として京都大学瀬戸臨海実験所、團国際生物科学基金を得、広島大学研究員。この間オーストラリア、ロシア、フランス、米国、オーストリアの博物館及び大学で短期研究、スミソニアン研究所国立自然史博物館では独立研究。1997年より現職。

専門分野 生物多様性学

研究テーマ 甲殻類分類学、魚類寄生虫調査、田んぼにおけるエビの生態発生学、海洋寄生虫

大学院の論文には囊胸類の分類学、比較形態学、幼生の生育を扱った。このグループの研究は現在も続けている。コペンハーゲンでは“y 幼生”の研究に着手し、瀬戸臨海実験所では、著名な甲殻類研究学者、故伊藤立則博士の研究課題を引き続いて研究した。沖縄の瀬底島では珊瑚礁寄生虫を研究、又多様な甲殻類グループの幼生生育を比較研究した。広島大学では主としてカイアシ類モンストリラ目の研究に専念、スミソニアン研究所では棘皮動物の寄生性の研究を中心に行った。

大学院では囊胸類をテーマに選んだ。今まで知らなかった分野だったからだ。13歳から海洋生物学や無脊椎動物学の教科書を読んでいたが、これに関しては未知であったため、研究に値するフィールドであると思い、これを選んだ。その後、甲殻類の系統学に関する多くの疑問が徐々に解明出来始めたことから、将来は同じようにまだ解明されていない無脊椎動物に焦点を当ててみようと思った。この内の多くが寄生虫であることを強調したことが、日本で研究を始めるきっかけとなった。1997年までは海洋動

物だけを研究対象としてきたが、淡水の琵琶湖や水田ではほぼ同じテーマで未知の分類群に取り組み、系統学的な謎を解明して行きたい。特に、カイエビという甲殻類に興味を持っている。

主任主査 武部 強 (たけべ つよし)

略歴 1983年 舞鶴工業高等専門学校土木科卒業、同年滋賀県職員(土木技術吏員)採用、大津土木事務所、河港課を経て、2004年4月より現職。

専門分野 河川工学

研究テーマ 多自然型川づくりに関する研究

滋賀県職員として、22年目を琵琶湖博物館で迎えることになりました。

これまでは、河川改修や道路改築事業を県の地方機関で直接実施する業務に携わる事が多かったのですが、昨年度は県庁河港課で「河川整備計画」の策定に関する業務に携わっていました。

滋賀県では、今後概ね20年間の具体的な河川の整備の内容を示す「河川整備計画」の策定を進めています。

この計画に、流域の皆さまの生の声を反映させるため、公募によるメンバーから構成する「川づくり会議」を開催し意見や課題を提案して頂き、これを学識経験者等で構成する「淡海の川づくり検討委員会」で議論し、その結果を河川整備計画に反映させるものです。

しかし、近年川づくりに対する住民の意見は、価値観の多様化も相まって多岐にわたっています。これは、川づくり特に「多自然型川づくり」が、河川工学のみならず生物、生態、社会、景観面等、様々な要素を含んでいるからであり、多自然型川づくりを計画するに当たっては、その効果を総合的・客観的・定量的に評価する必要があると考えています。

博物館では、川づくりに対する様々な要望に対し実施事例を検証評価することで、今後活かせるような「多自然型川づくり」の方向性を探ると共に事業効果・影響を客観的に評価できる手法を探っていきたいと考えてます。

主査 金子 修一 (かねこ しゅういち)

略歴 1988年鳥取大学農学部林学科卒業、同年滋賀県職(林業技術吏員)を経て、2004年より現職。

専門分野 林学

研究のテーマ 里山の再生と活用に関する研究

山や公園で木々を見るたびに「不思議だなー」と思います。どうしてこんな樹形をしているのだろうか？

(答:枝の出方が樹形を決める)そして、どうして樹種によって枝の出方が決まっているのだろうか？と、また、同科同属の木を見ても花がよく付くもの・付かぬもの、害虫に強いもの・弱いものなど、いろいろ個体差があり「何でだろー」と頭の中が？で満ちてきます。

そして思うのです、ひょっとして、一つの「不思議=？」が解明出来れば大きなお金にならないか？

と。まあこんな夢物語は置いておいて、現実的には、山へ植える苗木の家系特性を調べ解明し、苗木生産種子の改良を行うことにより、災害等に強い山をつくることを目標にしています。

主査 孝橋 賢一 (こうはし けんいち)

略歴 1990年近畿大学農学部水産学科卒業、1992年三重大学大学院生物資源学研究科修了、同年滋賀県水産試験場、水産課、再度水産試験場を経て、2004年より現職

専門分野 水族環境学、水産微生物学

研究テーマ エリ網汚損原因糸状藻類の生理・生態について

大学には、理工学部建築学科へ入学したものの、パース(建物の完成イメージ図みたいなもの)の講

義で芸術家肌の同級生たちにセンスの違いを見せつけられ、子供の頃から釣りが好きだったということ、ちょうどその頃、近大水産研究所がキンダイ（イシガキダイとイシダイの交雑種）を作り出したというニュースをテレビで見たという単純な理由で農学部水産学科へ転学部した。

滋賀県に来てからは、重要漁獲対象魚種であるニゴロブナ、アユの資源調査などでは、真夏の炎天下に胴長をはいて湖岸を歩き回り、調査は「体力」ということを実感した。その後水産課で行政を経験し、再び水産試験場で大正15年から連綿と続き、琵琶湖における水質等調査の先駆である琵琶湖定点定期観測や、漁業者からの聞き取り等によって、実際に直面している漁場環境上の問題（農業濁水、北湖のエリ網に大量の藻類が付着し、操業困難にしている等）を抽出し、その現状把握から原因検討まで一連のプロセスを経験した。これらの経験から毎日、琵琶湖に出ている漁業者の「眼」が、いかに鋭いかということに今更ながら気づかされた。また、それら情報が最も受けやすい位置にある水産関係職場の琵琶湖に対する責任を痛感した。

博物館にいる間も、なるべく多くの時間を琵琶湖に足を運び、漁業者との対話を大切に、自らも漁業者の「眼」になって琵琶湖を見つめていきたい。

主任学芸員 草 加 伸 吾（くさか しんご）

略歴 1990年大阪市立大学大学院理学研究科博士課程単位取得、学術修士。同年滋賀県教育委員会事務局文化振興課を経て1996年より現職。

専門分野 森林生態学、森林水文学

研究テーマ 植生の水質調節機能、森林土壌での水質形成過程と伐採前後の変化

「空青し山青し海青し・・・」と歌われた自然豊かな熊野の地に育ち、おいしい水を飲んで育った。山歩きが好きであったことも手伝って、森と水の両方に興味を持つようになった。そして、これまで、森林と水の関係を解きほぐす研究を中心に行ってきた。南アルプスの山々を歩き回り、大学時代には、寸又川流域の植生調査・植物相調査などを手がけた。その後、広島江田島では山火事が森林の水や栄養塩類など物質の循環に与える影響を調べ、また貴重な原生林の残る奈良春日山地域では、植生の発達度の違いが水質調節にどのように影響するかなど、主に森林の水質調節機能に関する研究を手がけてきた。現在は琵琶湖の安曇川流域で、森林伐採が環境に及ぼす影響について、伐採前後の水質や土壌の変化などの解明を担当し、あわせて、博物館の環境展示に役立つ新しいデータを得るため、調査を続けている。

これらの研究を通して、人間の森林に対する管理・働きかけが、森林の物質循環や水質調節機能にどのような影響を及ぼすか、水量・水質調節機能の大きい森林とはどのようなものか、また下流域の河川や琵琶湖、海などの水環境に対する負荷の少ない森林管理の方法を探ってきたい。

博物館の展示では環境展示の「水をはぐくむ森林」や「森林、農地、市街地を通る水」、「多雪地の植物」等、野外展示全体のとりまとめと森の育成計画および植栽を担当した。

主任学芸員 楠 岡 泰（くすおか やすし）

略歴 1985年東京都立大学理学研究科博士課程生物学専攻単位取得、理学博士（東京都立大学）取得、日本学術振興会特別研究員を経て、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室、1996年より現職。

専門分野 微生物生態学

研究テーマ 繊毛虫の生態学

物心ついたころから、虫やカエル取りが大好きな少年。横浜市立大学では授業をさぼって大学の裏山をほっつきまわる。チョウと食草の関係について卒業研究をおこなう。筑波大学修士課程では、水生昆虫と付着藻類の関係について研究するつもりが、水中の石をおおっている付着藻類のマットにハゲができていたのをたまたま見つけ、その原因を探っているうちに、アメーバが付着藻類にあたえている影響

について研究。博士課程では毎日どぶ川にかよい、原生動物のツリガネムシを個体識別して、その生活史を追っかける。

現在は琵琶湖の繊毛虫と共生藻類について、研究している。

主任学芸員 中井 克樹 (なかい かつき)

略歴 1992年京都大学理学研究科博士課程動物学専攻単位取得、日本学術振興会特別研究員(1990～1992年)を経て、1992年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室、1996年京都大学博士(理学)取得、1996年より現職。

専門分野 魚類生態学

研究テーマ 湖沼沿岸域の生態系、外来水生生物の生態、陸生貝類の地理的変異

大阪のベッドタウン、豊中市の団地に生まれ、物心ついたときには捕虫網を振り回していた。幼稚園の時、南紀白浜の海岸でタカラガイを拾ったことで貝にも興味を持ち始め、小学校低学年以来、だんだんと陸貝に染まっていき、昆虫からは遠ざかる。大学の卒業研究では溪流の水生昆虫、修士1年では比叡山麓のカタツムリの変異を扱う。修士2年にアフリカ・タンガニーカ湖の調査に参加させてもらい、魚類に寄生する甲殻類の生態と、魚類のなわばり行動を潜水調査する。博士課程でもタンガニーカ湖に丸1年潜り続け、魚の繁殖生態を研究する。1990年からは、琵琶湖の北端部でオオクチバスとブルーギルの繁殖生態を調べ始め現在も継続している。勤め始めた1992年に琵琶湖で見つかったカワヒバリガイも、継続して追い続けている。「虫屋」のいなかった博物館準備に関わって、長年眠っていた虫への関心もよみがえり、開館までの3年ほどは、県内の公衆便所にも捕虫網を手に出没した。

主任学芸員 松田 征也 (まつだ まさなり)

略歴 1983年近畿大学農学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 底生動物学

研究テーマ 淡水産貝類の滋賀県内における分布状況調査。琵琶湖湖底に生息するビワコミズシタダミ、水田に棲むマルタニシ、移入種のカワヒバリガイの生態調査。

滋賀県下にはおよそ60種類の淡水棲貝類が生息しているが、その分布状況および生態については一部の種類を除いてほとんど分かっていない。また、環境変化に伴い淡水棲貝類の中にも絶滅の危機に瀕する種類が見られるようになった。このようなことから、知られないうちにいなくなる種類が一つでもいなくなり、貝類が人間と共存できるような環境を提案できるよう研究を進めたい。

主任学芸員 桑原 雅之 (くわはら まさゆき)

略歴 1982年愛媛大学理学部生物学科卒業、1984年三重大大学水産学研究科修士課程中退、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族生理学

研究テーマ 琵琶湖固有亜種であるビワマスと、琵琶湖流入河川に生息するアマゴとの関係

海に囲まれた長崎県で育ったため、もっぱら海水魚に興味を持っていたが、ひょんなことからサケ科魚類であるイワナとアマゴの関係について卒業研究を行った。それ以来淡水魚(というよりもサケ科魚類)にのめり込み、三重大学修士課程ではアマゴの成長と社会行動の関係について研究を進めていた。しかし、中退して滋賀県に来てからは、琵琶湖の固有亜種とされるビワマスと流入河川に生息するアマゴとの関係、さらにはビワマスの成立機構に興味を持ち、現在はその前段階として、十分に解明されたとは言い難いビワマスの生活史に焦点を当て研究を進めている。

主任学芸員 牧野厚史 (まきの あつし)

略歴 1984年関西学院大学経済学部卒業、1990年関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程単位取得退学、関西学院大学社会学研究科研究員を経て、1999年より現職。

専門分野 地域社会学

研究テーマ 環境問題についての地域社会学的研究

最近の環境問題の研究には、生活や生活者ということばがやたらに使われるようになってきた。それはとてもよいことだろうけど、生活という言葉を使うとき、私は少しばかり考えこむことがある。琵琶湖博物館には「湖の環境と人々の暮らし」をテーマとした展示室があり、ごく最近まで琵琶湖の周囲で人々が営んでいた日常生活が紹介されている。この展示室は、琵琶湖博物館の特色をよく表していると同時に、みる人によって評価が分かれる展示室でもある。たとえば、実際の暮らしの中で、展示の世界を経験してきた人々が、展示をみて常識的と判断するのは理由のあることだ。けれども新興住宅地で生まれ、物心ついた頃から、水道の蛇口をひねれば水がでて、トイレは水洗という生活をおくってきた私にとって、展示されている「生活」は、全く経験したことのない未知の世界である。このように、博物館の展示を常識とうけとめる人々の暮らしがある一方で、展示の内容を未知の世界とを感じる人たちの生活がある。それらのことなる暮らしを営んできた人々によって生活世界が成り立っているならば、私たちは、地域環境に生じてくる問題について判断をどのように下していくことになるのだろうか。また私たちの下す判断は、私たち自身の生活を変えていくけれども、それはどのような方向へと向かっているのか。ここに私の基本的な研究テーマがある。

主任学芸員 芳賀裕樹 (はが ひろき)

略歴 1994年名古屋大学理学研究科博士課程大気水圏科学専攻単位取得、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館開設準備室を経て、1996年理学博士(名古屋大学)取得、1996年より現職。

専門分野 陸水化学

研究テーマ 湖水中の生態系と環境の相互作用

私たちの体の中には無数の細胞がいて、それぞれが大切な仕事をしている。私たちが健康な日々を送るためには、各細胞がバランスよく働いていなければならない。なにかの病気になったときには、どのようにバランスが崩れたのかを調べることで、病気の原因や直し方、予防法がわかる。こうしたバランスを研究する分野は、人間を対象にする場合には生理学(代謝学)、そしてその応用の医学ということになる。

「湖沼代謝学」というのは、湖をひとつの生き物に見立て、その中身(生態系)がどのようなバランスで働いているかを調べる研究分野である。内容としては、基礎科学の生理学に近く、病気の直し方よりも、生態系のなり立ちや調節の仕組みを調べることに主眼をおいている。

主任学芸員 亀田佳代子 (かめだ かよこ)

略歴 1996年京都大学大学院理学研究科博士後期課程動物学専攻修了、博士(理学)取得、京都大学生態学研究センター研修員を経て、同年12月より現職。

専門分野 鳥類学

研究テーマ 生態系における鳥類の役割に関する研究

特に鳥だけが好きだったわけではないが、子供の頃から野生動物や自然について興味があった。その中で鳥を研究対象にしている理由は何かといわれると、ひとつは鳥の「飛ぶ」という能力にある。もちろん全ての鳥が飛べるわけではないが、飛翔能力を得たことで渡りなど長距離移動が可能になったり、さまざまな生息環境を利用して生活することができるようになった。たとえば、琵琶湖を訪れるガンや

カモの仲間は、湖だけでなく陸上のたんぼでえさをとったりヨシ帯で休憩したりしている。春になれば日本を離れてロシアにまで渡り、そこで繁殖を行う。こうした鳥の移動が、水域と陸域、繁殖地と越冬地の環境にどのような影響を及ぼしているのか。またここまで広範囲でなくても、湖で魚を食べ森林で営巣しフンを落とすカワウは、水域から陸域への物質移動にどのくらい関与しているのだろうか。こうした鳥のダイナミックな動きは、生態系や他生物になんらかの影響を及ぼしていることは確かだ。また逆に、食物条件や他生物などの環境の違いによって、鳥の側も柔軟に反応する。大学院時代に研究したキジバトではピジョンミルクという物質を分泌し、雛の食物とすることで繁殖期間が延長し、1年で何回も繁殖することがわかっている。つまり雛を育てるために必要な食物があれば、ハトでなくても何回も繁殖したり繁殖期間が延びる可能性があるわけである。このように、鳥と環境との相互作用において鳥類の役割とは何なのか、少しでも明らかにすることができればと考えている。

滋賀県あるいは琵琶湖は、たくさんの面白い特徴を持っていながらまだまだそれが十分に生かされていない。博物館が県内各地の人のネットワークを作ったり、世界と琵琶湖をつなぐパイプ役をつとめることで、広く世界に情報発信していけたら、というもの大それた夢の一つである。

主任学芸員 矢野 晋吾 (やの しんご)

略歴 1988年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、日経マグロウヒル社(現・日経BP社)入社、経済・経営雑誌、建築雑誌の記者を歴任、1993年同社退社、1995年早稲田大学大学院人間科学研究科(生命科学専攻・地域環境論講座)修士課程修了、2000年早稲田大学人間科学研究科博士後期課程修了、同年博士(人間科学・早稲田大学)取得、2000年より現職。

専門分野 環境社会学

研究テーマ 地域(主として農・山・漁村)社会における生活と自然環境の関連についての社会学的研究

幼い頃、私の育った東京・練馬は武蔵野の雑木林(平地でもヤマと呼ぶ農用林)に囲まれ、ミヤマクワガタが捕れた。しかし、その林はことごとくマンションになっていった。周りの大人は「経済が発展した」とか「近代化して便利になった」と言ったが、私には大切なものが、どんどん失われていったとしか思えなかった。そんな疑問から学部は経済に進むが、人間が見えない“科学”に大きな違和感を感じ、民俗学のサークルに入り村に通い始める。村の生活を通して、自分の生きた「高度経済成長期」と、それを支える論理である「市場」を考える必要性を痛感する。マスコミの世界に入ってから企業経営者(特にベンチャービジネス)に取材する日々を送りながら、日本企業は経済学の生まれた欧米とは異質の合理性で動いている現実を目の当たりにする。その合理性とは、「家」や「村」にみられる行動論理であった。家・村は、今でこそマイナスのイメージが強いが、本来はその地域の人々が、生活空間である自然環境(人為的なものを含めて)をうまく利用しながら日常生活を送るために長時間をかけて作り上げた仕組みである。それをもう一度考えることが現代、そして将来の日本社会を考える上で重要だということを改めて理解した。その後、日本社会を知るために、農・山・漁村に滞在し、そこで生活する人々と共に時間と体験を共有しながら、人間社会と自然との関係について教えていただいている。

学芸員 大塚 泰介 (おおつか たいすけ)

略歴 1998年京都大学大学院農学研究科博士課程熱帯農学専攻修了、博士(農学)取得、島根大学汽水域研究センター非常勤研究員(講師)を経て、2000年より現職。

専門分野 陸上生態系学

研究テーマ 付着珪藻の分布

魚を研究しようとして水産学科に入ったのに、気がついたら「珪藻」などというマイナーな生物を研究していた。川にはいるとよく、石に付いたヌルヌルに足をとられるが、あのヌルヌル(水垢)の主な

成分が珪藻である。もっとも、珪藻がマイナーなのは大半の人間の認識においての話である。実際には水気のある場所ならばどこにでもいて、水域で光合成をする生物としては最も重要なものの一つである。種類も多く、少なくとも万の単位だと言われている。

しかしこの珪藻、どこに、どんな種類が、どれくらいいるのか、ほとんど解っていない。研究している人も結構多いのだが、何せ種類と生息場所が著しく多様なので、とても調べきれないのである。そこで私も、この問題に取り組むことにした。水田、水たまり、動物の体表など、まだ珪藻がほとんど調べられていない場所が、すぐ近くにたくさんある。多分、一生かかっても研究のネタが尽きることはないだろう。

移り気なので、10年後に何をやっているかは自分でも見当がつかない。今のところ、付着珪藻の群落を、統計手法を用いて記述することに精を出している。

◇博物館学研究領域

総括学芸員 布谷知夫 (ぬのたに ともお)

略歴 1974年京都大学大学院農学研究科博士課程中退、農学修士、同年大阪市立自然史博物館、1991年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 博物館学

研究テーマ 利用者の視点からみた博物館 遺跡木材遺物による古環境復元

大学では林学を学び、林縁植生をテーマに研究を行ったが、実際には自分の研究よりも研究室仲間の仕事を手伝って、日本各地の山を見ることができたことのほうが有意義であったような気がする。博士過程に進んですぐに博物館に就職し、学芸員としての仕事を始めたが、博物館の学芸員にたいして、多くの利用者が期待する内容と大学時代に身につけた知識との差は大きく、とまどった覚えがある。

就職した博物館は、利用者との関係においては日本でも最も先進的な試みを行っていることで評価の高い博物館であり、博物館の在り方については貴重な体験ができた。そして博物館の学芸員は専門分野の知識をいかしながら、博物館そのものについてももっと積極的に発言をすべきであると考えようになった。博物館について議論する日本の博物館学は、大学の研究者が中心になっていて、現場の学芸員の声があまりに少ないためである。

琵琶湖博物館開設の仕事を担当するようになってからは、理想とする博物館像に近づけるための努力をしてきたつもりではあるが、まだまだゴールは遠い。

専門学芸員 秋山廣光 (あきやま ひろみつ)

略歴 1974年日本大学農獣医学部水産学科卒業、同年滋賀県立琵琶湖文化館を経て、1996年より現職。

専門分野 水族病理学

研究テーマ ズナガニゴイの繁殖行動、ギギの発音機構

子供の頃は無類の虫好き。でも、どういう訳か、標本にするのが嫌で、飼育観察するのみ。しばらくして、魚を飼育し始め、昆虫の飼育では難しかった環境を作り出すことが容易であることに魅せられる。以後魚一辺倒の人生を歩むことになる。しかし、一人で飼育をしたり、研究したりするのではなく、魚に対する想いを少しでも多くの人に伝え、魚大好き人間を増やしたいと念じている。琵琶湖文化館時代に、水族部門で撮り貯めた写真映像資料（主に35mmフィルム）の整理を行い、写真活用が十分にできるようにした。百聞は一見に如かず、の例えのように実物から得られる知識は必要十分なものであるが、映像資料からも聞いたり読んだりすることより実物にずっと近い知識が得られる。蓄積された写真資料は多岐にわたり、6万点を超える資料数に達していた。完全な整理にはまだ時間を要するものの、今後撮影してゆく映像とともに、琵琶湖博物館の貴重な資料となるだろう。写真撮影とその整理・利用は、博物館の重要な業務と考えるが、私自身の興味は生態学や行動学にあり、現在は魚の産卵行動や声の研究を行っている。

主任学芸員 戸田 孝 (とだ たかし)

略歴 1991年京都大学理学研究科博士課程地球物理学専攻単位取得、同年科学技術庁防災科学技術研究所特別研究員(非常勤)、1992年理学博士(京都大学)取得、同年滋賀県教育委員会事務局(仮称)琵琶湖博物館準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 地球物理学

研究テーマ 人工衛星や航空機からの観測による琵琶湖の流動の実態解明

「地球物理って何ですか。」と、聞かれたら「気象庁の仕事にかかわる基礎研究全て」だと答えることにしている。大気の動きはもちろん、海水や雨水の動き、地震の発生などについて、その原因まで含めて探求する学問である。私の専門は、その中でも海や湖などの「大きな水たまり」の中の水の動きを調べることだ。この水の動きを、人工衛星や飛行機などで遠くから観測する「リモートセンシング」という方法で調べるのを得意としている。琵琶湖博物館へ来るまでは、黒潮の暖かい水がどのように沿岸へやってくるのかを、人工衛星のデータで調べていた。琵琶湖博物館では、同じような方法で、琵琶湖の水の流れの細かいところを調べていこうと思っている。リモートセンシングを使うと、広い範囲の細かい情報を一度に観測することができる。つまり、一度の観測で大量のデータが得られる。リモートセンシングでは、この大量の観測データをどうやって効率的に処理するかが重要になる。そこで、コンピュータの使い方も並行して研究していたら、ずいぶん詳しくなってしまった。こういう縁で、琵琶湖博物館では、情報システムの整備も担当させていただき、最近では「博物館情報論」も研究テーマに加えている。

主任学芸員 八尋 克郎 (やひろ かつろう)

略歴 略歴 1994年九州大学大学院農学研究科博士後期課程昆虫学専攻修了、博士(農学)取得。九州大学農学部研究生、国際協力事業団派遣職員を経て、1996年より現職。

専門分野 陸上昆虫学

研究テーマ オサムシ上科甲虫の系統分類学的研究および生態学的研究

大学に入ってから現在まで、オサムシ上科甲虫の、形の不思議さや生態のおもしろさにひかれて研究を行ってきた。漫画家の手塚治虫が、ペンネームをこの虫にちなんでつけたことを知る人は以外に多い。オサムシは他の昆虫にはあまりない”飛べない”という大きな特徴を持っている。そのため、地方色豊かな方言と同じように、同じ種でも地域ごとに違いが見られる。地域特性の代弁者であるオサムシから、日本あるいは世界の中で琵琶湖とその集水域がどのような地域なのかを考えてみたい。そして、オサムシがどのような過程で現在の分布に至ったのかを明らかにしたい。

琵琶湖とその集水域はその豊かな自然環境から、オサムシのほかにも実に多くの種の昆虫類が生息している。しかしながら、何がどこに生息しているのかという基礎的な事さえほとんど解明されていない。琵琶湖とその集水域の昆虫相を地域に住む一般の人達や専門家と一緒に調べて明らかにしていきたい。

琵琶湖周辺には古琵琶湖層群をはじめ昆虫化石も多く出てくる。他の分野の研究者とも連携し、博物館でしかできないような研究を行い、展示、交流、資料整備、情報事業などの博物館活動に展開させたい。

主任学芸員 芦谷 美奈子 (あしや みなこ)

略歴 1990年千葉大学理学研究科修士課程生態学専攻修了、理学修士、同年滋賀県教育委員会事務局文化部文化施設開設準備室を経て、1996年より現職。

専門分野 水生植物学

研究テーマ 水生植物の繁殖と成長の研究

水生植物の生態学が専門。沈水植物の繁殖生態の研究の一環として、イバラモを対象とした調査を行っているほか、沿岸帯の種類組成やその役割についても調べている。最近では、水中だけではなく水辺の植物にも興味が広がりつつあり、特にヨシ(およびヨシ帯)の生態系に人の利用がどのように絡み合っ

いるかについても、そのうち調べたいと考えている。生物の研究以外には、博物館の教育活動や触れる展示手法と利用者のメッセージの受け取り方について、実践的な取り組みも含めて調べてきた。

事業部では、長年ディスカバリールームの計画と運営に関わってきたが、平成12年度から情報センターで図書の仕事を担当、平成15年度半ばよりは平成16年度企画展担当として専念した。いずれの仕事においても、利用者の方々にとって博物館という場が、利用しやすく、楽しく知的刺激にあふれた場所になりたいと考えている。

学芸員 中 藤 容 子 (なかとう ようこ)

略歴 1996年京都大学大学院文学研究科修士課程地理学専攻修了、文学修士、同年5月より現職。

専門分野 民俗学

研究テーマ 琵琶湖水系における伝統的な資源利用とその変化

長い学生生活に終止符をうち、琵琶湖博物館開館の年、民俗学部門担当の学芸員となる。大学では文学部の地理学研究室に籍をおき、日本の地域社会に見られる社会集団と空間との関係を解明すべく、学部時代は村落を、修士課程時代は都市を駆けめぐった。近代化した生活様式の裏側でなおムラ的な社会集団が残っていることに非常に興味を覚えたのである。

学芸員となってからは、近江の祭を見てまわったり、観察会の広報ポスターをつくったり、生活実験工房の田んぼの田植えをしたり、収蔵庫にこもって民具資料の整理をしたりと慌ただしい。これらの民具たちを研究の材料として、これから少しずつ彼らが語ってくれる物語を紹介していきたいと思っている。

主査(教員) 谷 口 雅 之 (たにぐち まさし)

略歴 1986年滋賀大学教育学部地学研究室卒業。滋賀県公立小学校教員を経て、2003年より現職

専門分野 教育学

研究テーマ 博物館と学校とのよりよい連携の在り方

子どもの頃から家族でよく琵琶湖へ出かけた。そして、日本一大きな湖「琵琶湖」を故郷にもっていることが、いつの間にか私の自慢となった。また、自然科学が好きで、特に地球(空・天気)や宇宙に興味を持っていた。大学では、地学研究室に入り、地球物理学を専攻した。そして、船で琵琶湖に出たの水温や湖流の観測、湖岸での風の観測などを通して、琵琶湖の大きさからおこる「湖陸風」に関心を持ち、滋賀県と近隣府県のアメダスのデータから「湖陸風」について研究した。大学を卒業してからも、風を感じるたびに、琵琶湖のことが頭に思い浮かぶ。また、宇宙に関しても興味を持ち続け、天体観望会にも定期的に参加している。

教師として、人として、子どもたちにいつも五感をいっぱい使って生活して欲しいと願い、子ども自身の気づきや考えを大切にしてきた。

そこで、琵琶湖博物館でも子ども達が五感をフルに使い、自ら考えることができる体験学習プログラムを開発していきたいと考えている。そして、私自身も五感をみがき、「湖と人間」を見つめていきたい。

主査(教員) 西 垣 亨 (にしがき とおる)

略歴 1986年滋賀大学教育学部地学研究室卒業、滋賀県公立中学校教員を経て、2002年より現職

専門分野 教育学(中学生対象)

研究テーマ 生き物を出発点とした環境学習

生まれは京都府の北端、宮津市である。小さい頃から近くの山をかけまわり、天橋立を見ながら海水浴をし、丹後の田舎の大自然に親しんで育ってきた。18才の春に初めて琵琶湖を見た時、あまりの雄大さに「これは海じゃないのか!?!」と驚いた記憶がある。大学では漕艇部に入部。最初はうまく漕げなくて湖に落ちた時、飲んだ水が「辛い」ことにまたまたショックを受けた思い出もある。

そんな琵琶湖との出会いであったが、大学では地球物理学教室に所属し、船の上で星を見ながら湖流や水温の定点観測をしたり、バルーンを打ち上げて気温観測をしたりと、楽しく琵琶湖に触れる中で、琵琶湖に対する思いがどんどんふくらんできたように思う。

このたび博物館教員として勤務することになり、今までとは違った子供たちの表情が見られることが楽しみでならない。16年間理科の教師をしてきて、「理科はわからないから嫌い。」という生徒が増えていくことを肌で感じてきたし、それは自然体験の乏しさと大いに関係している。子供たちが目を輝かせて体験学習ができる手助けをしたいと思う。

下記のとおり過ちがありましたので、訂正のほどよろしくお願い申し上げます。

P	行	誤	正
5	10	代表 <u>八尋克郎</u>	代表 <u>内田明彦</u>
83	13	<u>2003</u> 年3月26日(金)~	<u>2004</u> 年3月26日(金)~
115	26	研究のテーマ <u>里山の再生と活用に関する研究</u>	研究のテーマ <u>林木育種</u>

琵琶湖博物館 年報 8号

2004年(平成16年)9月発行

編集・発行 滋賀県立琵琶湖博物館

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091

電話 077-568-4811

印刷 株式会社スマイ印刷工業

©滋賀県立琵琶湖博物館 2003

Printed in Japan

R100 この冊子は古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

